

北青木遺跡 第9・10次
深江北町遺跡 第19・20・21次

発掘調査報告書

2024

神戸市



1. 北青木遺跡調査地遠景（東から）



2. 深江北町遺跡調査地遠景（西から）

巻頭図版 2

北青木遺跡第 10 次調査（西地区Ⅵ区）



1. 第3遺構面空中写真（俯瞰モザイク写真）



1. 西地区Ⅱ区 SD 202 上層遺物出土状況（北東から）



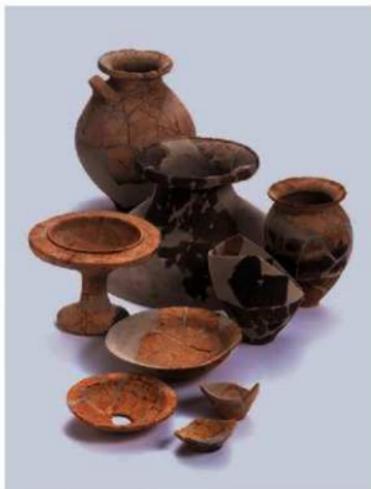
2. 西地区Ⅱ区 SD 202 下層遺物出土状況（北から）



4. 西地区Ⅵ区 SD 301 下層遺物出土状況（北西から）



3. 西地区Ⅱ区 SD 202 出土遺物



5. 西地区Ⅵ区 SD 301 出土遺物

卷頭図版 4

深江北町遺跡第 20 次調査（中央地区 I 区）



1. S E 201 断面状況（南から）



2. S E 201 井戸側東辺

1. S K 201 土層断面 (北西から)



2. S K 201 大甕内完掘状況 (北西から)



3. S K 201 底部木質遺物検出状況
(北西から)



巻頭図版 6

深江北町遺跡第 21 次調査（中央地区IV区）



1. S E 201 上部井戸枠検出状況
（南東から）



2. S E 201 下部井戸枠検出状況
（南東から）



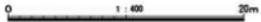
3. S E 201 上部井戸枠掘形検出状況
（南東から）

北青木遺跡 第9・10次
深江北町遺跡 第19・20・21次

発掘調査報告書

2024

神戸市

ページ数	誤	正
p4	中期後半には前方後円墳である坊々塚古墳～	中期前半
p4	酒蔵郡	酒蔵群
p9	漁撈具	漁撈具
p9	漁撈	漁撈
p10	山下史郎編	山下史朗編
p12	小野寺洋介	荒田敬介
p13	西部かけて	西部にかけて
p21	波状文が	波状文を
p42	第7・8次調査かた	第7・8次調査では
p42	被熱を受けた	被熱した
p42	こよな	このような
p62	埋土中の中	埋土中
p69	第7・8次調査おいては	第7・8次調査においては
p69	主体部の内部には木棺が非常に良好な遺存状態のものを含む木棺が検出されている。	主体部の内部には非常に良好な遺存状態の木棺も検出されている。
p71	以下とおり	以下のとおり
p75		
p88	図118 中央地区Ⅱ区SE201平・断面図	図118 中央地区Ⅰ区SE201平・断面図
p97		
p111	大甕 (348)	大甕 (304)
p120		
p134	弥生土器後期頃	弥生時代後期頃
p137	T K43段階頃	T K43型式期頃
p137	高台	底部
p137	人為的な遺構	遺構
p137	溝状遺構	溝
p137	500蓋蓋	500は蓋蓋
p141	第 5 章	第 6 章
p147	表22 500～503 地区遺構名 中央地区Ⅴ区 第3遺構面基盤層	表22 500～503 地区遺構名 中央地区Ⅴ区 第3遺構面
p163	遺物が出土している	遺物が出土している。
p165	まら損壊した部分	また損壊した部分
p167	養老衣服例令	養老衣服令
報告書抄録	調査原因：阪神電気鉄道本線住吉・芦屋間連絡立体交差事業	調査原因：記録保存調査

序

本書で報告いたします北青木遺跡、深江北町遺跡が所在する東灘区一帯では、古代よりさまざまな人や物の動きがあったことが知られています。

今回3ヶ年にわたる調査を実施し、北青木遺跡では弥生時代の墓域などが、深江北町遺跡では奈良時代の井戸などが見つかかり、往時の人々の生活の一端を知る貴重な成果を得ることができました。本書が当地域の歴史と文化を学ぶための資料として、また、埋蔵文化財へのご理解を深めていただける一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和6年3月
神戸市

例 言

1. 本書は神戸市東灘区青木5丁目、北青木1・2丁目、深江北町5丁目に所在する北青木遺跡の第9・10次調査、および、東灘区深江北町1・2丁目に所在する深江北町遺跡の第19・20・21次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は阪神電気鉄道本線住吉・芦屋間連続立体交差事業にともなうもので、神戸市都市局より委託を受けた神戸市文化スポーツ局文化財課が調査主体として実施した。
3. 現地調査は令和2年度から令和4年度にかけて実施し、令和5年度に出土品の整理作業、自然科学分析作業、報告書作成および刊行作業を実施した。
4. 本書の作成は北青木遺跡第9・10次調査、深江北町遺跡第19・20次調査については調査担当者の文章をもとに中井菜加が加筆修正を行った。(調査担当者はP12表5参照) 深江北町遺跡第21次調査はⅡ区、Ⅴ区は松島隆介、Ⅳ区は阿部敬生が担当した。北青木遺跡、深江北町遺跡ともに木製品は山田侑生が担当した。本書の全体の編集は中井が行い、阿部、松島が補助した。
5. 本書に掲載した遺構等の図のうち、写真測量による各調査区遺構面の基本図化(1/50)、編集、および既往調査区との合成図は(株)GEOソリューションズに作成、製図を委託した。その他、一部の遺構平面図、各遺構の平・断面図は調査担当者が作成、製図し、中井、阿部、松島がトレースを行った。
6. 本書で掲載する遺構種別は以下のとおりである。
SD：溝状遺構 SE：井戸 SK：土坑 SP：ピット・柱穴 SX：性格不明遺構等
7. 出土遺物の実測、トレース作業は、北青木遺跡、深江北町遺跡第19・20次調査については、大部分を(株)イビックに委託し、一部の遺物については中井、阿部が、深江北町遺跡第21次調査については阿部、松島が実測、トレースした。
8. 遺物実測図中で使用したスクリーントーンは、以下の通りである。
使用痕  墨痕  煤痕 
9. 本書に掲載した写真図版のうち、現地における遺構写真撮影は調査担当者が行い、航空写真は、(株)GEOソリューションズに委託した。また、遺物写真撮影は杉本和樹氏(西大寺フォト)、金属製品のX線透過像撮影は山田が行った。
10. 調査で出土した木製品の樹種同定、大型植物化石同定の自然科学分析業務は古代の森研究舎(古川純子氏)に委託した。本書第2部第4章、第3部第5章に分析結果を掲載している。
11. 深江北町遺跡で出土した墨書土器の文字資料については、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部 史料研究室室長(平城地区)馬場 基氏、史料研究室室長(飛鳥・藤原地区)山本 崇氏、主任研究員 桑田訓也氏・同 山本祥隆氏、研究員 垣中健志氏にご教授、ご指導いただき、釈読案を作成していただいた。なお、墨書土器の写真撮影、赤外線写真撮影は同研究所企画調整部写真室主任飯田ゆりあ氏に撮影していただいた。
12. 本書に使用した方位、座標系は世界測地系平面直角座標系第Ⅴ系を、標高は東京湾平均海水面(T.P.)を使用している。
13. 本書で使用した地図は国土地理院発行の25,000分の1地形図「西宮」、神戸市発行の2,500分の1地形図「深江」「深江北」「青木」「本山」を使用している。
14. 調査で出土した遺物および写真、図面等の記録類、分析資料については神戸市埋蔵文化財センター(神戸市西区梶台6丁目1)にて保管している。
15. 調査にあたって、神戸市都市局のご協力を得た。
16. 現地での発掘調査および出土遺物の整理、報告書作成に当たっては、下記のみなさまにご指導、ご助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。(敬称略)
小田裕樹、森岡秀人(50音順)

目 次

序			
例言			
目次			
第1部 はじめに	第1章	遺跡の立地と歴史的環境	1
	第2章	既往の調査	7
	第3章	調査に至る経緯と経過	11
第2部 北青木遺跡	第1章	第9次調査	13
	第1節	基本層序	13
	第2節	調査の成果	14
		(1) 西地区Ⅰ区	14
		(2) 西地区Ⅱ区	14
		(3) 西地区Ⅲ区	22
		(4) 西地区Ⅳ区	25
		(5) 西地区Ⅴ区	28
		(6) 東地区Ⅰ区	31
		(7) 東地区Ⅱ区	31
		(8) 東地区Ⅲ区	36
		(9) 東地区Ⅴ区	36
		(10) 小結	42
	第2章	第10次調査	45
	第1節	基本層序	45
	第2節	調査の成果	45
		(1) 西地区Ⅵ区	45
		(2) 東地区Ⅳ区	48
		(3) 東地区Ⅵ区	51
		(4) 東地区Ⅶ区	54
		(5) 小結	62
	第3章	北青木遺跡出土木製品	65
	第4章	北青木遺跡第9次及び第10次調査で出土した木質遺物の樹種	67
	第5章	まとめ	69
第3部 深江北町遺跡	第1章	第19次調査	74
	第1節	基本層序	74
	第2節	調査の成果	74
		(1) 西地区Ⅰ区	74
		(2) 小結	78
	第2章	第20次調査	79
	第1節	基本層序	79
	第2節	調査の成果	80
		(1) 西地区Ⅱ区	80
		(2) 中央地区Ⅰ区	85
		(3) 中央地区Ⅲ区	99
		(4) 東地区Ⅳ区	103
		(5) 小結	105
	第3章	第21次調査	110
	第1節	基本層序	110
	第2節	調査の成果	110
		(1) 中央地区Ⅱ区	110
		(2) 中央地区Ⅳ区	123
		(3) 中央地区Ⅴ区	136
		(4) 東地区	140
		(5) 小結	141
	第4章	深江北町遺跡出土木製品	148
	第5章	深江北町遺跡第20・21次調査出土樹種および植物遺体	153
	第6章	まとめ	163
第4部 まとめ			170
北青木遺跡 阪神連立事業関連調査平面図			174
深江北町遺跡 阪神連立事業関連調査平面図			192

巻頭写真図版目次

巻頭図版 1

1. 北青木遺跡調査地透視 (東から)
2. 深江北町遺跡調査地透視 (西から)

巻頭図版 2

- 北青木遺跡第 10 次調査 (西地区Ⅵ区)
1. 第 3 遺構面空中写真 (前撮りモザイク写真)

巻頭図版 3

- 北青木遺跡第 9 次調査 (西地区Ⅱ区) 第 10 次調査 (西地区Ⅵ区)

1. 西地区Ⅱ区 S D 202 上層遺物出土状況 (北東から)
2. 西地区Ⅱ区 S D 202 下層遺物出土状況 (北から)
3. 西地区Ⅱ区 S D 202 出土遺物
4. 西地区Ⅵ区 S D 301 下層遺物出土状況 (北西から)
5. 西地区Ⅵ区 S D 301 出土遺物

巻頭図版 4

- 深江北町遺跡第 20 次調査 (中央地区Ⅰ区)
1. S E 201 新断状況 (南から)
 2. S E 201 井戸側東面

巻頭図版 5

- 深江北町遺跡第 21 次調査 (中央地区Ⅱ区)
1. S K 201 土層断面 (北西から)
 2. S K 201 大塚内完壁状況 (北西から)
 3. S K 201 漆部木質遺物検出状況 (北西から)

巻頭図版 6

- 深江北町遺跡第 21 次調査 (中央地区Ⅳ区)
1. S E 201 上部井戸検出状況 (南東から)
 2. S E 201 下部井戸検出状況 (南東から)
 3. S E 201 上部井戸検出状況 (南東から)

図版目次

図 1 遺跡の位置	1	図 62 東地区Ⅳ区 S D 901 平・新断面	48
図 2 周辺の遺跡	3	図 63 東地区Ⅳ区 遺構面平面図	49
図 3 北青木遺跡 既往調査地位置図	6	図 64 東地区Ⅳ区 北壁面新断面	50
図 4 深江北町遺跡 既往調査地位置図	6	図 65 東地区Ⅳ区 遺構面平面図	51
図 5 工事対応図	11	図 66 東地区Ⅵ区 S D 201 平・新断面	51
図 6 第 9 次調査 調査地位置図 (S=1/5000)	13	図 67 東地区Ⅵ区 北壁面新断面	52
図 7 西地区Ⅰ区 遺構面平面図	14	図 68 東地区Ⅵ区 S K 1101 出土遺物	53
図 8 西地区Ⅱ区 遺構面平面図	14	図 69 東地区Ⅵ区 S K 1101 平・新断面	53
図 9 西地区Ⅰ区・Ⅱ区 壁面断面図	15	図 70 東地区Ⅵ区 S P 1102 出土遺物	53
図 10 西地区Ⅱ区 S D 201 平・新断面	16	図 71 東地区Ⅵ区 遺物包含層出土遺物	53
図 11 西地区Ⅱ区 S D 202・Ⅵ区 S D 301 平・新断面	17	図 72 東地区Ⅵ区 第 1 遺構面平面図	54
図 12 西地区Ⅱ区 S D 202 出土遺物	18	図 73 東地区Ⅵ区 S K 1201 平・新断面	54
図 13 西地区Ⅱ区 S D 203 出土遺物	18	図 74 東地区Ⅵ区 S K 1201 出土遺物	54
図 14 西地区Ⅵ区 S D 301 上層出土遺物	19	図 75 東地区Ⅵ区 第 2 遺構面平面図	55
図 15 西地区Ⅵ区 S D 301 下層出土遺物 (1)	19	図 76 東地区Ⅵ区 北壁面新断面	56
図 16 西地区Ⅵ区 S D 301 下層出土遺物 (2)	20	図 77 東地区Ⅵ区 S D 201 平・新断面	57
図 17 西地区Ⅱ区・Ⅵ区 厚層遺物出土位置図	20	図 78 東地区Ⅵ区 S D 203 平・新断面	57
図 18 西地区Ⅱ区 S P 201・202 平・新断面	21	図 79 東地区Ⅵ区 S D 203 出土遺物	58
図 19 西地区Ⅱ区 S P 201 出土遺物	21	図 80 東地区Ⅵ区 S D 204 平・新断面	58
図 20 西地区Ⅱ区 湿地状堆積出土遺物	21	図 81 東地区Ⅵ区 S D 204 平・新断面	58
図 21 西地区Ⅱ区 湿地状堆積出土遺物	22	図 82 東地区Ⅵ区 S D 204 出土遺物	59
図 22 西地区Ⅱ区 遺構平面図	23	図 83 東地区Ⅵ区 S K 201 平・新断面	59
図 23 西地区Ⅱ区 北壁面新断面	24	図 84 東地区Ⅵ区 S K 201 出土遺物	59
図 24 西地区Ⅳ区 遺構面平面図	25	図 85 東地区Ⅵ区 S R 201 平・新断面	60
図 25 西地区Ⅳ区 S D 402 出土遺物	25	図 86 東地区Ⅵ区 S R 201 出土遺物	61
図 26 西地区Ⅳ区 湿地状堆積上面遺構面平面図	25	図 87 東地区Ⅵ区 第 2 遺構面遺物包含層出土遺物	61
図 27 西地区Ⅳ区 南壁・北壁新断面	26	図 88 北青木遺跡出土土製品 (1)	65
図 28 西地区Ⅳ区 S D 404 新断面	26	図 89 北青木遺跡出土土製品 (2)	66
図 29 西地区Ⅳ区 S D 404 出土遺物	27	図 90 北青木遺跡 9 次調査出土木材の顕微鏡写真	68
図 30 西地区Ⅳ区 湿地状堆積出土遺物	27	図 91 時代・時期に応じた遺構・遺物の分布範囲図 (S=1/3,000)	71
図 31 西地区Ⅴ区 S D 512 出土遺物	28	図 92 調査地位置図 (S=1/2500)	74
図 32 西地区Ⅴ区 S K 501 出土遺物	28	図 93 西地区Ⅰ区 遺構面平面図	75
図 33 西地区Ⅴ区 遺構面出土遺物	28	図 94 西地区Ⅰ区 南壁面断面図 (1)	75
図 34 西地区Ⅴ区 遺構面平面図	29	図 95 西地区Ⅰ区 北壁面断面図 (2)	76
図 35 西地区Ⅴ区 遺構平・新断面	29	図 96 西地区Ⅰ区 湿地状堆積出土遺物	77
図 36 西地区Ⅴ区 北壁面新断面	30	図 97 西地区Ⅰ区 湿地状堆積出土遺物	77
図 37 東地区Ⅰ区 S D 701 出土遺物	31	図 98 西地区Ⅰ区 遺物包含層出土遺物	78
図 38 東地区Ⅰ区 遺構平・新断面	31	図 99 第 20 次調査地位置図 (S=1/2500)	79
図 39 東地区Ⅰ区 遺構面平面図	32	図 100 西地区Ⅱ区 S D 101 出土遺物	80
図 40 東地区Ⅰ区 北壁面新断面	33	図 101 西地区Ⅱ区 第 1 遺構面遺物包含層出土遺物	80
図 41 東地区Ⅰ区 遺構面平面図	34	図 102 西地区Ⅱ区 S D 202 出土遺物	80
図 42 東地区Ⅱ区 北壁面新断面	35	図 103 西地区Ⅱ区 S D 202 平・新断面	80
図 43 東地区Ⅱ区 S B 801 平・新断面	36	図 104 西地区Ⅱ区 第 1 遺構面平面図	81
図 44 東地区Ⅱ区 遺物包含層出土遺物	36	図 105 西地区Ⅱ区 第 2 遺構面平面図	81
図 45 東地区Ⅱ区 S X 1002 平・新断面	36	図 106 西地区Ⅱ区 北壁面新断面	82
図 46 東地区Ⅱ区 S X 1002 出土遺物	36	図 107 西地区Ⅱ区 S X 201 平面図	83
図 47 東地区Ⅱ区 遺構面平面図	37	図 108 西地区Ⅱ区 S X 201 出土遺物	83
図 48 東地区Ⅱ区 北壁面新断面	38	図 109 西地区Ⅱ区 S X 202 出土遺物	83
図 49 東地区Ⅴ区 S X 1003 平・新断面	39	図 110 西地区Ⅱ区 S X 202 平面図	83
図 50 東地区Ⅴ区 S X 1003 出土遺物	39	図 111 西地区Ⅱ区 湿地状堆積上面出土遺物	84
図 51 東地区Ⅴ区 遺構面平面図	40	図 112 西地区Ⅱ区 湿地状堆積出土遺物	84
図 52 東地区Ⅴ区 南壁面新断面	41	図 113 西地区Ⅱ区 第 2 遺構面遺物包含層出土遺物	84
図 53 第 10 次調査 調査地位置図 (S=1/5000)	45	図 114 中央地区Ⅰ区 第 1 遺構面平面図	85
図 54 西地区Ⅰ区 第 1 遺構面平面図	45	図 115 中央地区Ⅰ区 第 1 遺構面遺物包含層出土遺物	85
図 55 西地区Ⅰ区 S D 110 出土遺物	45	図 116 中央地区Ⅰ区 第 2 遺構面平面図	86
図 56 西地区Ⅰ区 第 2・3 遺構面平面図	46	図 117 中央地区Ⅰ区 北壁面新断面	87
図 57 西地区Ⅰ区 S E 201 平・新断面	46	図 118 中央地区Ⅱ区 S E 201 平・新断面	88
図 58 西地区Ⅰ区 第 2 遺構面遺物包含層出土遺物	47	図 119 中央地区Ⅰ区 S E 201 井戸内出土遺物 (1)	89
図 59 西地区Ⅰ区 S B 301 出土遺物	47	図 120 中央地区Ⅰ区 S E 201 井戸内出土遺物 (2)	89
図 60 西地区Ⅰ区 S B 301 平・新断面	47	図 121 中央地区Ⅰ区 S E 201 掘形出土遺物 (1)	90
図 61 西地区Ⅰ区 南壁面新断面	48	図 122 中央地区Ⅰ区 S E 201 掘形出土遺物 (2)	91

写真図版目次

写真図版1 北青木遺跡第9次調査(西地区Ⅰ・Ⅱ区)

1. 西地区Ⅰ区 遺構面全景(東から)
2. 西地区Ⅱ区 遺構面状況(西から)
3. 西地区Ⅲ区 遺構面全景(西から)

写真図版2 北青木遺跡第9次調査(西地区Ⅳ・Ⅴ区、東Ⅰ区)

1. 西地区Ⅳ区 遺構面全景(東から)
2. 西地区Ⅳ区 木製品出土状況(北から)
3. 西地区Ⅴ区 S K 501 検出状況(南から)
4. 西地区Ⅴ区 遺構面全景(西から)
5. 東地区Ⅰ区 遺構面全景(東から)

写真図版3 北青木遺跡第9次調査(東地区Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ区)

1. 東地区Ⅱ区 遺構面全景(東から)
2. 東地区Ⅲ区 遺構面全景(東から)
3. 東地区Ⅴ区 遺構面全景(西から)
4. 東地区Ⅴ区 河堤検出状況(北東から)
5. 東地区Ⅴ区 S X 1003 検出状況(南東から)

写真図版4 北青木遺跡第9次調査(西地区Ⅱ区)

1. S D 202 出土遺物
2. S D 203 出土遺物
3. 湿地状堆積出土遺物

写真図版5 北青木遺跡第9次調査(西地区Ⅲ・Ⅳ区)

1. 西地区Ⅲ区 湿地状堆積出土遺物
2. 西地区Ⅳ区 S D 402 出土遺物
3. 西地区Ⅳ区 S D 404 出土遺物

写真図版6 北青木遺跡第9次調査(西地区Ⅳ・Ⅴ区、東地区Ⅱ区・Ⅴ区)

1. 西地区Ⅴ区 S K 501 出土遺物
2. 西地区Ⅳ区 湿地状堆積出土遺物
3. 西地区Ⅴ区 遺構面遺物包含層出土遺物
4. 東地区Ⅱ区 S D 701 出土遺物
5. 東地区Ⅴ区 S X 1003 出土遺物
6. 西地区Ⅳ区 湿地状堆積出土遺物

写真図版7 北青木遺跡第10次調査(西地区Ⅵ、東Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ区)

1. 西地区Ⅵ区 S D 301 上層遺物出土状況(北から)
2. 西地区Ⅵ区 S B 301(北から)
3. 東地区Ⅳ区 遺構面全景(東から)
4. 東地区Ⅵ区 遺構面全景(南東から)
5. 東地区Ⅶ区 S K 201(南東から)
6. 東地区Ⅷ区 遺構面全景(南西から)

写真図版8 北青木遺跡第10次調査(西地区Ⅷ区)

1. S D 301 出土遺物

写真図版9 北青木遺跡第10次調査(西地区Ⅷ区、東地区Ⅵ・Ⅷ区)

1. 西地区Ⅷ区 遺物包含層出土遺物
2. 西地区Ⅷ区 遺物包含層出土石斧
3. 西地区Ⅷ区 S B 301 出土銅鏃
4. 東地区Ⅵ区 S K 1101 出土遺物
5. 東地区Ⅷ区 S P 1102 出土遺物(左)・遺物包含層出土遺物(右)
6. 東地区Ⅷ区 S K 201

写真図版10 北青木遺跡第10次調査(東地区Ⅷ区)

1. S D 201 出土遺物
2. S D 203 出土遺物
3. S D 204 出土遺物

写真図版11 北青木遺跡第10次調査(東地区Ⅷ区)

1. S D 204 出土遺物
2. S K 201 出土遺物

写真図版12 北青木遺跡第10次調査(東地区Ⅷ区)

1. 東地区Ⅷ区 第2遺構面遺物包含層出土遺物
2. 北青木遺跡 出土土器類

写真図版13 深江北町遺跡第19次調査(西地区Ⅰ区)

1. 遺構面全景(東から)
2. 湿地状堆積(北東から)
3. 湿地状堆積遺物出土状況(北から)
4. 遺構面下層出土遺物

写真図版14 深江北町遺跡第20次調査(西地区Ⅱ区・中央地区Ⅰ区)

1. 西地区Ⅱ区 第2遺構面全景(東から)
2. 西地区Ⅱ区 S D 202(南東から)
3. 西地区Ⅱ区 S X 201(南西から)
4. 中央地区Ⅰ区 第2遺構面全景(西から)
5. 中央地区Ⅰ区 S E 201 検出状況(南から)
6. 中央地区Ⅰ区 浜堤下層遺物出土状況(南から)

写真図版15 深江北町遺跡第20次調査(中央地区Ⅰ・Ⅲ、東地区Ⅳ区)

1. 中央地区Ⅰ区 新前トレンチ(南西から)
2. 中央地区Ⅲ区 S P 244 単発状況(南西から)
3. 中央地区Ⅲ区 第2遺構面全景(西から)
4. 東地区Ⅳ区 黒色シルト層検出状況(西から)

写真図版16 深江北町遺跡第20次調査(西地区Ⅱ区)

1. 第1・2遺構面遺物出土遺物
2. 第1・2遺構面遺物包含層出土遺物

写真図版17 深江北町遺跡第20次調査(中央地区Ⅰ区)

1. S D 201 出土遺物
2. S E 201 環出土遺物
3. S E 201 環土(附) 出土土葬
4. S E 201 環形出土遺物

写真図版18 深江北町遺跡第20次調査(中央地区Ⅰ区)

1. 第2遺構面遺物出土遺物
2. 第1・2遺構面遺物包含層出土遺物
3. 第2遺構面遺物包含層出土遺物(1)
4. 第2遺構面遺物包含層出土遺物(2)

写真図版19 深江北町遺跡第20次調査(中央地区Ⅰ区)

1. 第3遺構面遺物包含層出土遺物
2. 第3遺構面遺物包含層出土遺物
3. 第3遺構面下層浜堤出土遺物

写真図版20 深江北町遺跡第20次調査(中央地区Ⅰ・Ⅲ区)

1. 中央地区Ⅰ区 第3遺構面下層浜堤出土遺物
2. 中央地区Ⅰ区 新前トレンチ出土遺物
3. 中央地区Ⅲ区 第1・2遺構面遺物包含層出土遺物

写真図版21 深江北町遺跡第20次調査

1. 中央地区Ⅲ区 S P 212 出土遺物
2. 深江北町遺跡出土土器類

写真図版22 深江北町遺跡第21次調査(中央地区Ⅱ区)

1. 第2遺構面全景(北東から)
2. S K 201 土層断面(北西から)
3. S K 201 大壁内面出土状況(南東から)
4. S K 201 大壁内面状況(北西から)
5. S K 201 大壁・水質遺物検出状況(北西から)
6. S K 201 底部木質遺物検出状況(北西から)

写真図版23 深江北町遺跡第21次調査(中央地区Ⅳ区)

1. 第2遺構面全景(南西から)
2. 第2遺構面西部ピット検出状況(南から)
3. S P 207 遺物出土状況(北東から)
4. S E 201 井戸検出状況(南東から)

写真図版24 深江北町遺跡第21次調査(中央地区Ⅳ・Ⅴ区)

1. S E 201 上部井戸検出状況(南東から)
2. S E 201 上部井戸穿孔部充填状況(南から)
3. S E 201 下部井戸検出状況(南東から)
4. S E 201 下部井戸穿孔部平底式大(南東から)
5. 西平部土層断面(南から)
6. 中央地区Ⅴ区第1遺構面全景(北東から)

写真図版25 深江北町遺跡第21次調査(中央地区Ⅱ区)

1. S K 201 出土遺物(1)
2. S K 201 出土遺物(2)
3. S K 201 出土遺物(3)

写真図版26 深江北町遺跡第21次調査(中央地区Ⅱ区)

1. 第2遺構面関連出土遺物
2. 第3遺構面関連出土遺物
3. 湿地状堆積(S D 201) 出土遺物
4. 新前トレンチ出土遺物

写真図版27 深江北町遺跡第21次調査(中央地区Ⅳ区)

1. 第1遺構面関連出土遺物
2. 第2遺構面関連出土遺物
3. 第2遺構面遺物包含層出土遺物(1)
4. 第2遺構面遺物包含層出土遺物(2)

写真図版28 深江北町遺跡第21次調査(中央地区Ⅳ区)

1. S E 201 出土遺物
2. S E 201 井戸

写真図版29 深江北町遺跡第21次調査(中央地区Ⅳ・Ⅴ区)

1. 中央地区Ⅳ区 第3遺構面遺物包含層出土遺物
2. 中央地区Ⅳ区 第3遺構面遺物出土遺物
3. 中央地区Ⅳ区 新前トレンチ出土遺物
4. 中央地区Ⅳ区 第4遺構面関連出土遺物
5. 中央地区Ⅴ区出土遺物

写真図版30 深江北町遺跡

1. 出土瓦(表面)
2. 出土瓦(裏面)
3. 出土土器類

写真図版31 深江北町遺跡

1. 出土土器類(器・片断類・私用磁)
2. 出土土器類(器・赤外線画像)

第1部 はじめに

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

北青木遺跡と深江北町遺跡は、東灘区に所在し、芦屋市との市境である芦屋川と住吉川の間、大阪湾に面した海岸部に立地している。いずれも六甲山から流れる河川が形成した大小の扇状地の扇端部、および河川によって運ばれた砂礫が形成した浜堤と湿地状堆積（堤間湿地・後背湿地）に展開している。

北青木遺跡は、東灘区北青木1・2丁目、青木4・5丁目、深江北町5丁目、深江本町4丁目付近に所在する。遺跡は深江北町遺跡の西側約400mに展開し、東西約700m、南北は阪神電鉄本線を挟んで最大約300mの範囲が指定されており、北側で小路大町遺跡と隣接する。遺跡の現標高は2.0～3.0mであり、北側に向かって標高はやや高くなる。

深江北町遺跡は、東灘区深江北町1～3丁目、深江本町1・2丁目、本庄町1丁目付近に所在する。遺跡は芦屋川の右岸に東西約800m、南北は阪神電鉄本線を挟んで最大350mの範囲が指定されており、北側で本庄町遺跡、芦屋市津知遺跡と隣接する。遺跡の現標高は2.0～3.0mであり、北側に向かって標高はやや高くなる。なお、津知遺跡は現在では行政区の都合から別遺跡になっているが、本来は同一の遺跡であると考えられる。

北青木遺跡第7次、深江北町遺跡第12・14次調査において、増田氏らによって実施された古環境の分析から、弥生時代末期や古墳時代に、浜堤の形成や海水準の変動にともなう堤間湿地の形成が起こり、その後、河川の氾濫等によって六甲山から流れこんだ砂礫が湿地に堆積し、中世頃には埋没し耕作地化したと考えられている。

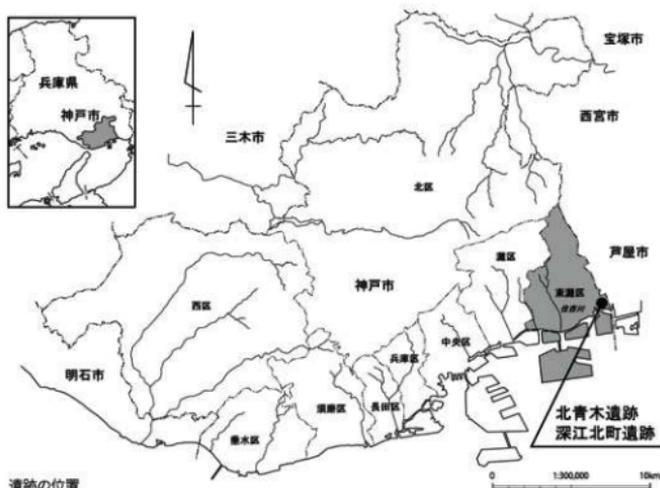


図1 遺跡の位置

第2節 遺跡の歴史的環境

本書で報告する2遺跡を中心に、旧石器時代から中世にかけての主な遺跡を整理する。
旧石器時代

旧石器時代の遺構は六甲山南麓ではまだ見つかっていない。遺物は本山遺跡(9)、西岡本遺跡(33)、滝ノ奥遺跡で後期のナイフ形石器が、津知遺跡(44)で翼状剥片石器が出土している。滝ノ奥遺跡では旧石器時代末頃から縄文時代早期の有茎尖頭器、土器が出土している。

縄文時代

先述の滝ノ奥遺跡のほか、本山遺跡(9)、西岡本遺跡(33)から早期の土器が出土している。西岡本遺跡(33)、山芦屋遺跡(54)では高山寺式に属する竪穴建物跡が検出され、押型文土器が出土している。月若遺跡では、早期末から前期初頭の土坑が検出されている。中期は本山遺跡(9)、本庄町遺跡(4)で土器が出土している。山芦屋遺跡では竪穴建物跡が検出された。

後期は遺跡が増加し、本庄町遺跡(4)、岡本東遺跡(30)、小路大町遺跡(5)、森南町遺跡(7)、寺田遺跡(48)が知られる。本庄町遺跡(4)では前期末から中期前半、後期初頭から前葉の土器と後期初頭の貯蔵穴が確認される。

北青木遺跡(2)では縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が出土し、この時期以降、継続して土地利用が行われる。晩期にはほかに本山遺跡(9)、岡本東遺跡(30)、篠原遺跡、六条遺跡(47)、若宮遺跡が知られている。篠原遺跡では大洞系の注口土器や遮光器土偶が出土しており、東北地方との広域交流を示している。

弥生時代

北青木遺跡(2)では縄文時代から継続して集落が形成される。本山遺跡(9)では縄文時代末期から集落が継続し、弥生時代前期初頭の土器、木製品が出土し、稲作の開始を示している。前期ではほかに本庄町遺跡(4)、寺田遺跡(48)で集落が展開するが、拠点集落は本山遺跡(9)周辺と考えられる。

中期は北青木遺跡(2)のほか、森北町遺跡(12)、住吉宮町遺跡(40)、寺田遺跡(48)若宮遺跡で集落が展開する。東山遺跡(24)、保久良神社遺跡(27)、金烏山遺跡(26)、三条岡山遺跡(11)、滝ノ奥遺跡、荒神山遺跡、会下山遺跡(55)、城山遺跡では高地性集落が形成される。

弥生時代中期の特徴として、青銅器の出土が顕著なことが挙げられ、北青木銅鐸(3)や桜ヶ丘銅鐸・銅戈、本山銅鐸(10)、森銅鐸(17)、生駒銅鐸(23)、保久良神社遺跡出土銅戈(27)などの出土地が周囲に点在する。北青木銅鐸(3)と本山銅鐸(10)は平地での埋納例であり、発掘調査によって埋納状況が確認できた貴重な出土例である。また、森北町遺跡(12)では前漢鏡片や銅鏃が出土している。

後期になると三条岡山遺跡(11)や郡家遺跡、月若遺跡(49)、芦屋廃寺遺跡(50)、三条九ノ坪遺跡(51)、冠遺跡(52)などで集落が展開される。

深江北町遺跡(1)では弥生時代後期から古墳時代初頭に集落のほか、方形、円形周溝墓が築造され、以降、継続して土地利用が行われる。同時期に住吉宮町遺跡(40)では方形周溝墓、魚崎中町遺跡(38)では円形周溝墓、郡家遺跡では両方の周溝墓が築造される。



図2 周辺の遺跡

古墳時代

古墳は前期には周辺で前方後円墳である東求女塚古墳(43)、扁扁曾塚古墳(16)、前方後方墳である西求女塚古墳、処女塚古墳といった古墳が築造される。中期後半には前方後円墳である坊ヶ塚古墳(41)、帆立貝式古墳の住吉東古墳(42)をはじめとした、住吉宮町古墳群の形成が始まる。後期になると郡家遺跡や、西岡本遺跡(33)、岡本梅林古墳(29)、生駒古墳(19)、野寄古墳群、八十塚古墳群、城山・三条古墳群などの群集墳が築造される。

集落は弥生時代後期から継続する遺跡も多く、郡家遺跡、森北町遺跡(12)、住吉宮町遺跡(40)などが挙げられる。前期の月若遺跡(49)、三条岡山遺跡(11)では祭祀遺構が検出された。中期の月若遺跡(49)では滑石製模造品が多数出土する。後期は郡家遺跡や森北町遺跡(12)で韓式系土器が出土し、渡来系氏族とのかわりかを示唆される。

奈良時代・平安時代

律令体制期になると北青木遺跡(2)、深江北町遺跡(1)周辺は摂津国菟原郡に属する。菟原郡郡衙については定まっていないが、郡家遺跡を比定地とする説も示される。

北青木遺跡(2)、深江北町遺跡(1)は継続して土地利用がなされる。掘立柱建物群や大型の井戸が検出されることから、隣接する津知遺跡(44)と合わせて集落域であった可能性が高い。深江北町遺跡(1)では「驛」と書かれた墨書土器や複数種の木簡が出土しており、後述する葦屋駅家が付近に設置された可能性がある。

本山中野遺跡(6)では奈良時代末から平安時代にかけての掘立柱建物跡が見つかり、施軸陶器や軒丸瓦、「木工」、「南」などが書かれた墨書土器が多く出土したことから、有力者の居宅が存在したと考えられる。住吉宮町遺跡(40)では竪穴建物、掘立柱建物による集落が形成される。小路大町遺跡(5)では馬鍬が出土し、付近に耕作地がひろがっていたことが想定される。寺田遺跡(48)では奈良時代の倉庫遺構と「大領」、「小領」と書かれた墨書土器が出土し、郡領氏族との関係が推定される。三条九ノ坪遺跡(51)では「壬子年」と書かれた干支銘木簡、出口遺跡(13)では石帯、魚崎中町遺跡(38)では丸柄が出土しており、これら遺跡の範囲に地方官衙、地方末端官衙が設置された可能性がある。

また、白鳳期には芦屋廃寺(50)が建立され、基壇が発見されている。

北青木遺跡(2)、深江北町遺跡(1)、津知遺跡(44)の付近には、六甲山南麓を通る古代山陽道が整備され、深江北町遺跡(1)、津知遺跡(44)の付近に葦屋駅家が設置されたとする説もあるが、遺構として検出されていない。

鎌倉時代以降

鎌倉時代、中世以降は北青木遺跡(2)、深江北町遺跡(1)をはじめ複数の遺跡で犁溝などの耕作痕が検出されたが、顕著な遺構が確認された例は少ない。月若遺跡(49)、寺田遺跡(48)、芦屋廃寺遺跡(50)、津知遺跡(44)、六条遺跡(47)などでは掘立柱建物が検出され、遺物も多量に出土している。

近世になると北青木遺跡(2)、深江北町遺跡(1)の南側に灘五郷と呼ばれる酒蔵郡が形成される。

以上、北青木遺跡、深江北町遺跡周辺の歴史的環境を概観した。遺跡の盛行期は北青木遺跡が弥生時代中期から後期、深江北町遺跡が弥生時代後期から奈良時代・平安時代と両遺跡でずれがあり、積極的な土地利用が北青木遺跡から深江北町遺跡周辺に遷移したと考えられる。

表1 遺跡消長一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世以降	備考	所屬市
1	原江北町遺跡								
2	北青木遺跡								
3	北青木銅器出土地								
4	本庄町遺跡								
5	小路大町遺跡								
6	本山中野遺跡								
7	森崎町遺跡								
8	井戸田遺跡								
9	本山遺跡								
10	本山銅器出土地								
11	三糸岡山遺跡							※1	
12	森北町遺跡								
13	出口遺跡								
14	本山北野遺跡								
15	本山北遺跡								
16	眞保曾塚古墳								
17	森崎跡出土地							消滅	
18	板下山遺跡								
19	五野古塚								
20	東瀬区No.24遺跡								
21	東瀬区No.25遺跡								
22	神戸女子聖大南内遺跡							消滅	神戸市
23	生駒銅器出土地								
24	東山遺跡								
25	森崎遺跡								
26	金島山遺跡								
27	保久良神社遺跡								
28	八幡谷古墳								
29	岡本翰林古墳								
30	岡本東遺跡								
31	岡本北遺跡								
32	東瀬区No.7遺跡							消滅	
33	西岡本遺跡								
34	東瀬区No.8遺跡								
35	岡本南遺跡								
36	甲南町遺跡								
37	青木遺跡								
38	鳥崎中町遺跡								
39	住吉寺遺跡								
40	住吉宮町遺跡								
41	塚ヶ原古墳								
42	住吉宮古墳								
43	東家女塚古墳								
44	雲知遺跡								
45	前田遺跡								
46	清水遺跡								
47	六糸遺跡								
48	寺田遺跡								
49	月形遺跡								
50	芦屋焼寺遺跡								芦屋市
51	三糸九ノ戸遺跡								
52	冠遺跡								
53	三糸合下山遺跡								
54	山芦屋遺跡								
55	合下山遺跡								

※1 三糸岡山遺跡は神戸市、芦屋市にまたがって所在する

各遺跡主要文献(番号は図2に対応)

- (1) 表3文献参照
- (2) 表2文献参照
- (3) 千種 浩編『北青木銅鐸』神戸市教育委員会2012
- (4) 片岡 肇編『神戸市東灘区 本庄町遺跡発掘調査報告書』(財)古代学協会1985
別冊洋二編『本庄町遺跡』兵庫県教育委員会1991
中居さやか編『本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2003
中井菜加編『本庄町遺跡第10次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2019
- (5) 長谷川真樹『小路大町遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会1987
井沢 悟編『小路大町遺跡第4次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2003
- (6) 浅岡俊夫編『神戸市東灘区本山中野遺跡』六甲山麓遺跡調査会1995
須藤 宏編『本山中野遺跡第三次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2009
- (7) 黒田正志編『南町遺跡発掘調査報告書-第1・2次調査-』神戸市教育委員会2005
- (8) 小野寺洋介『井戸田遺跡 第3次調査』『令和元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市2023
- (9) 片岡 肇編『神戸市東灘区 本山遺跡発掘調査報告書』(財)古代学協会1984
丹治康明・須藤 宏『本山遺跡 第12次調査の概要』神戸市教育委員会1991
阿田 滋『本山遺跡 第17次調査』『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1998
山本龍和『本山遺跡 第33次調査』『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2002
- (10) 丹治康明・須藤 宏『本山遺跡 第12次調査の概要』神戸市教育委員会1991
- (11) 森岡秀人編『三条岡山遺跡』芦屋市教育委員会1979
渡辺 昇編『三条岡山遺跡 -第11地点発掘調査概要-』芦屋市教育委員会1998
- (12) 黒田正志『森北町遺跡』『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1988
丹治康明・須藤 宏『森北町遺跡 第8次調査』『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1992
中居さやか編『森北町遺跡第20次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2024
- (13) 黒田正志『出口遺跡 第6次調査』『平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2005
- (14) 西岡誠司『本山北遺跡 第3次調査』『平成20年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2011
- (15) 浅岡俊夫編『神戸市東灘区本山北遺跡』六甲山麓遺跡調査会1995
- (16) 浅岡俊夫編『神戸市東灘区本山北遺跡』六甲山麓遺跡調査会1995
- (17) 藤井由弘『福保倉塚遺跡 第3次調査』『平成28年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2019
- (18) 村川行弘・三木文雄『神戸市東灘区本山町森字坂下町出土銅鐸』『神戸市坂ヶ丘銅鐸・銅支調査報告書』兵庫県教育委員会1969
- (19) 『新修 神戸市史』第1巻自然・考古神戸市1989
- (20) 渡辺邦雄編『神戸市東灘区生駒古調査報告書』神戸大学考古学研究会1992
- (21) 文献なし
- (22) 村川行弘『神戸市東灘区本山町中野字生駒出土の銅鐸』『考古学雑誌』第51巻第2号日本考古学会1965
- (23) 『新修 神戸市史』第1巻自然・考古神戸市1989
- (24) 村川行弘『神戸市東灘区本山町中野字生駒出土の銅鐸』『考古学雑誌』第51巻第2号日本考古学会1965
- (25) 宮本邦雄『本山町東山遺跡』『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987
宮本邦雄『本山町東山遺跡-第3次調査-』『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1988
- (26) 森岡秀人編『三条岡山遺跡』芦屋市教育委員会1979
- (27) 石野洋信『神戸市金島山遺跡』『古代学研究』48古代学研究会1967
- (28) 藤川清之『藤原保久神社遺跡の研究』『鞍杉会紀要』第4編国学院大学駿杉会1942
- (29) 『紅野遺跡』『考古小報』1940
- (30) 山口英正『西木塚峠古墳 第1次調査』『平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2005
- (31) 石島三和編『岡本東遺跡第3次発掘調査報告書』神戸市2022
- (32) 浅岡俊夫編『神戸市東灘区岡本北遺跡』六甲山麓遺跡調査会1992
- (33) 文献なし
- (34) 浅岡俊夫編『神戸市東灘区西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会2001
- (35) 藤井太郎編『西岡本遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2009
西岡巧次編『西岡本遺跡第8次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2011
- (36) 文献なし
- (37) 文献なし
- (38) 岩田明広編『神戸市東灘区魚崎町遺跡(第3次調査)』神戸市教育委員会1996
- (39) 内藤慶次『住古宮町遺跡 第30次調査』『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2001
発掘調査後に『住古宮寺遺跡』に遺跡名変更
- (40) 安田 滋編『住古宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001
- (41) 曾本忠明『第ヶ塚古墳 試掘調査』『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
- (42) 丹治康明・須藤 宏ほか『住古宮町遺跡 第9次調査』『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
- (43) 渡辺邦行『東求女塚古墳』『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1985
- (44) 鎌宮 正編『津知遺跡(第19地点)』芦屋市教育委員会2000
- (45) 竹村忠洋編『津知遺跡(第198・222地点) 発掘調査報告書』芦屋市教育委員会2004
- (46) 森岡秀人編『前田遺跡(第20地点) 発掘調査概要報告書』芦屋市・芦屋市教育委員会2004
- (47) 文献なし
- (48) 森岡秀人・坂田典彦編『六条遺跡発掘調査報告書』芦屋市教育委員会2002
渡辺 昇編『六条遺跡』兵庫県教育委員会2003
- (49) 前田住久ほか『兵庫県芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書第132・133・137・139・141・142地点』芦屋市・芦屋市教育委員会2002
- (50) 前田住久ほか『兵庫県芦屋市若尾遺跡発掘調査報告書第68・69・70地点』芦屋市・芦屋市教育委員会2003
- (51) 村川行弘ほか『芦屋塚古墳』兵庫県芦屋市教育委員会1970
- (52) 高瀬一嘉編『三条九ノ坪遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会1997
- (53) 森岡秀人・竹村忠洋『野道遺跡の調査成果』『平成10年度国庫補助事業(2)芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会2020
- (54) 森岡秀人・坂田典彦『三条下遺跡(第2地点)』『平成18年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会2020
- (55) 村川行弘ほか『兵庫県芦屋市早瀬町遺跡の発掘調査』『郷土資料室だより』1982年5月号芦屋市教育委員会1982
- (56) 村川行弘・石野洋信『倉下山遺跡』芦屋市教育委員会1964

第2章 既往の調査

第1節 北青木遺跡

北青木遺跡は縄文時代後期から中世にかけての複合遺跡である。遺跡の範囲は阪神電気鉄道の阪神本線青木駅から深江駅間の東西最大幅約700m、南北最大幅約300mが指定されている。1984年度（昭和59年度）に初めての発掘調査が行われて以来、過去8回にわたって調査が実施された。なお、第7・8次調査は本書掲載の調査と同じく、阪神電気鉄道本線住吉・芦屋間連続立体交差事業にともなう発掘調査である。

遺跡は六甲山南麓に特徴的な扇状地性の河川堆積によって形成された浜堤（砂丘）とその間の湿地状堆積（堤間湿地、後背湿地）上に遺構が形成され、近代に急速に都市化する以前はほとんどが水田や耕作地であった。

発掘調査の成果は弥生時代の遺構、遺物が顕著である。

第1・2次調査では弥生時代前期の東西方向の溝状遺構が検出され、壺や甕といった前期の土器が多く出土した。また、未成品を含めた農具などの木製品が出土し、集落や水田域の存在が想定された。

第4次調査では前述の溝状遺構の未調査部分のほか、湿地状堆積や包含層から石鏃や石斧などの石製品や木製品、舌状青銅製品が出土した。

第5次調査では扁平紐式四区袈裟文銅鐸（北青木銅鐸）が出土したほか、弥生時代後期後半の甕棺墓2基を検出した。北青木銅鐸は複数回の埋納、掘削作業が遺構から確認でき、銅鐸祭祀の実態を検討する際の貴重な成果を得た。なお、北青木銅鐸はその考古学的価値から2013年（平成25年）3月に神戸市指定文化財（考古資料）に指定された。

第7・8次調査では中期の方形周溝墓、後期の円形周溝墓が検出され、遺存状況の良好な木棺や周溝墓溝内から多くの完形土器が出土した。

表2 北青木遺跡既往調査一覧

調査回数	調査年度	調査機関	調査目的	調査内容	文献
1	1984	兵庫県教育委員会	県営住宅建設	弥生前期の溝	①
2	1985	兵庫県教育委員会	県営住宅建設		②
3	1991	神戸市教育委員会	市営住宅建設	中世の土坑 近世の水田跡	③
4	1993	神戸市教育委員会	市営住宅建設	弥生前期～中期の溝、土坑、ピット	④
5	2006	神戸市教育委員会	阪神連立事業	弥生中期～後期、古代の柱穴、銅鐸埋納坑と銅鐸	⑤
6	2008	神戸市教育委員会		弥生前期～中期の溝 赤彩土器	⑥
7	2011	神戸市教育委員会		弥生中期の方形周溝墓、弥生後期の円形周溝墓、奈良・平安の竪立建物	⑦
8	2016	神戸市教育委員会		弥生中期方形周溝墓、弥生後期の円形周溝墓、奈良・平安の柱穴、ピット	⑧
9	2020	神戸市文化スポーツ局			
10	2021	神戸市文化スポーツ局			本書参照

① 山下史朗編『北青木遺跡』兵庫県教育委員会 1986

② ①と同じ

③ 「市営青木遺跡住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要」神戸市教育委員会 1991

④ 石島三和編『北青木遺跡発掘調査報告書～第3次調査～』神戸市教育委員会 1999

⑤ 東嘉代ほか「北青木遺跡 第5次調査」『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009

千穂 浩編『北青木銅鐸』神戸市教育委員会 2012

⑥ 石島三和「北青木遺跡 第6次調査」『平成20年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2011

⑦ 川上輝希・舟上麻子編『北青木遺跡第7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2018

⑧ 藤井太郎編『北青木遺跡第8次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2018

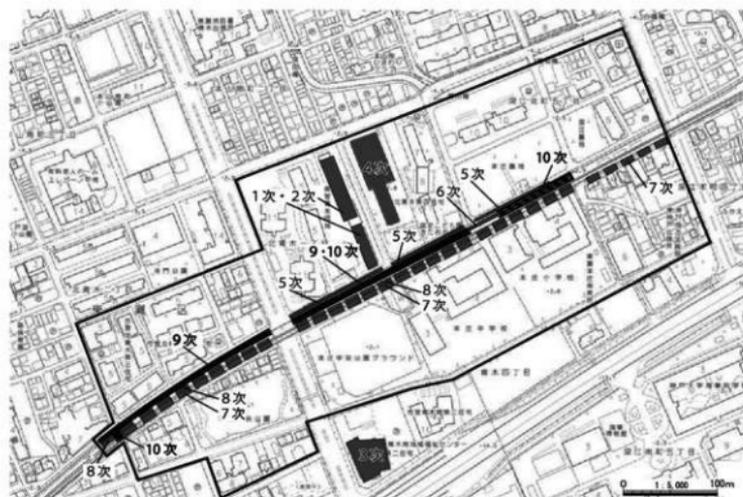


図3 北青木遺跡 既往調査地位置図



図4 深江北町遺跡 既往調査地位置図

第2節 深江北町遺跡

深江北町遺跡は弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡である。遺跡の範囲は阪神電気鉄道の阪神本線深江駅から芦屋駅間の東西最大幅約800m、南北最大幅約350mが指定されている。1984年度（昭和59年度）に初めての発掘調査が行われて以来、過去18回にわたって調査が実施された。なお、第12・14・17次調査は本書と同じく、阪神連立事業にともなう発掘調査である。

遺跡は北青木遺跡と同様に六甲山南麓に特徴的な扇状地性の河川堆積によって形成された浜堤（砂丘）とその間の湿地状堆積（堤間湿地、後背湿地）上に遺構が形成され、近代に急速に都市化する以前はほとんどが水田や耕作地であった。

発掘調査の成果は弥生時代末頃から古墳時代初頭と飛鳥時代から平安時代にかけての成果が顕著である。

弥生時代末頃から古墳時代初頭は第3次調査で円形周溝墓と土器棺墓が検出された。また、第12次調査では浜堤から古墳時代後期の祭祀土製品が出土し、出土状況から祭祀空間が存在したことが明らかになった。

飛鳥時代から平安時代にかけて、当遺跡の遺構、遺物が顕著な時期である。

第2・9・12・17次で飛鳥時代から平安時代にかけての竪穴建物や掘立柱建物が検出され、当遺跡が集落域であったことが明らかになった。

出土物は奈良時代から平安時代の硯、青銅製帯金具、小型銅鏡（第2次）、墨書土器、木簡、瓦などの官衙の性格の強い遺物が多く出土している。木簡は「承和」の年号が書かれた米の支給伝票木簡、葦屋驛長宛と考えられる命令木簡、「天平十九年」と書かれた記年銘木簡などが出土した。墨書土器は「驛」や「大垣」、「大垣官」といった文字や記号、絵画が墨書されており木簡と合わせてこの地域に地方官衙や駅家が設置されていたことを想起させる遺物である。これらの木簡と墨書土器はその考古学的価値から、2015年（平成27年）に神戸市指定有形文化財（考古資料）に指定された（2019年（平成31年）に追加指定あり）。

浜堤周辺に広がる湿地状堆積、包含層からは曲げ物や下駄などの生活用具、畜串や木製の形代（人形、馬形、舟形）といった祭祀具が多く出土した。祭祀具については都城、官衙やその周辺域で出土する機会が多いため、これらの遺物も当遺跡周辺に官衙の性格を有する施設が存在を傍証している。

なお、古代制度史的には当遺跡を含む、菟原郡沿岸には古代山陽道が設定され、「葦屋駅家」が設置されたと想定されるが、隣接する津知遺跡も含めて、考古学的成果から駅家関連施設は明らかになっていない。

北青木遺跡、深江北町遺跡両遺跡に共通する成果として、豊富な種類の漁撈具の出土が挙げられる。複数種類の土鍾や蛸壺が、弥生時代以来一貫して出土することから、全時代を通じて漁労を生業とする集落が形成されたと考えられる。また、古墳時代以降、水田が整備されるが、たびたび、洪水等の水害に襲われた痕跡があり災害のリスクを抱えた地域であったことを示唆している。

表3 深江北町遺跡既往調査一覧

調査次数	調査年度	調査機関	調査目的	調査内容	文献
1	1984	兵庫県教育委員会	県営住宅建設	弥生後期～平安後期の柱穴、ビット 奈良以降の水田跡	①
2	1985	兵庫県教育委員会		弥生後期の溝 飛鳥の竪穴建物 奈良・平安の掘立柱建物	②
3	1986	兵庫県教育委員会		弥生末～古墳初頭の円形周溝墓、土器棺墓	③
4	1987	神戸市教育委員会	共同住宅建設	古墳後期～鎌倉の落ち込み、ビット	④
5	1990	兵庫県教育委員会	県営住宅建設	弥生後期の掘立柱建物、土坑 中世の掘立柱建物、土坑、水田跡	⑤
6	1993	神戸市教育委員会	共同住宅建設	古墳後期～中世の遺物包含層	⑥
7	1996	神戸市教育委員会	共同住宅建設	平安後期の溝、土坑、ビット	⑦
8	1999	神戸市教育委員会	共同住宅建設	古墳初頭の溝、ビット 古墳後期～平安の柱穴、土坑、溝など 平安後期の掘立柱建物 木簡、墨書土器出土	⑧
9	2000	神戸市教育委員会	共同住宅建設	平安の溝、土坑、ビット	⑨
10	2006	神戸市教育委員会	下水道移設	平安の土坑、溝、ビット、落ち込み	⑩
11	2006	神戸市教育委員会	共同住宅建設	平安の流路、護岸施設	⑪
12	2011	神戸市教育委員会	阪神連立事業	古墳初頭の溝 古墳後期の祭祀跡 飛鳥の竪穴建物 奈良・平安の掘立柱建物 中世以降の塀溝 木簡、墨書土器出土	⑫
13	2011	神戸市教育委員会	老人ホーム建設	古墳初頭～平安の水田跡	⑬
14	2012	神戸市教育委員会	阪神連立事業	古墳の流路 奈良の水田跡 木簡、墨書土器出土	⑭
15	2012	神戸市教育委員会	共同住宅建設	古墳～中世の水田跡	⑮
16	2013	神戸市教育委員会	個人住宅建設	古墳の落ち込み	⑯
17	2016	神戸市教育委員会	阪神連立事業	古墳の流路 奈良・平安の掘立柱建物 奈良の水田跡 中世以降の塀溝 木簡、墨書土器出土	⑰
18	2020	神戸市文化スポーツ局	共同住宅建設	水田跡	⑱
19	2020	神戸市文化スポーツ局			
20	2021	神戸市文化スポーツ局	阪神連立事業	本書参照	本書
21	2022	神戸市文化スポーツ局			

参考文献

- 山下史郎編『深江北町遺跡』兵庫県教育委員会 1988
- ①に同じ
- ①に同じ
- 前田佳久「深江北町遺跡」『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990
- 村上賢治編『深江北町遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会 1992
- 内藤俊哉「深江北町遺跡」『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1996
- 西岡誠司「深江北町遺跡 第8次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999
- 須藤 宏「深江北町遺跡 第8次調査」『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2002
- 山本雅和編『深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2002
- 前田佳久・阿部 功「深江北町遺跡 第10次調査」『平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009
- 須藤 宏「深江北町遺跡 第11次調査」平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2009
- 谷 正俊編『深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2014
- 川上厚志「深江北町遺跡 第13次調査」『平成23年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2014
- 谷 正俊編『深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2014
- 富山直人「深江北町遺跡 第15次調査」平成24年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2015
- 口野博史「深江北町遺跡 第16次調査」『平成25年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2016
- 谷 正俊編『深江北町遺跡第17次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2018
- 佐伯二郎「深江北町遺跡 第18次調査」『令和2(2020)年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2024

第3章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書で報告する北青木遺跡第9・10次調査と深江北町遺跡第19・20・21次調査はいずれも阪神電気鉄道本線住吉・芦屋間連続立体交差事業（以下阪神連立事業）にともなう自動車、歩行者用の側道敷設部分の発掘調査である。

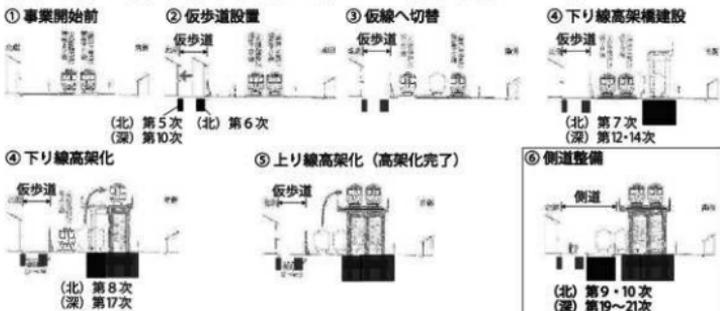
阪神連立事業は神戸市が阪神電気鉄道株式会社とともに都市計画事業として行ったものである。阪神電気鉄道本線の住吉駅から芦屋駅間の約4kmについて国土交通省の補助を得て、線路を地上線から高架化して自動車道路との平面交差の解消が達成された。合わせて神戸市では、自動車道路網を再整備し、都市環境の改善も行うこととなった。高架化による11ヶ所の踏切の撤去のほか、線路周辺の33路線の自動車道路、3路線の側道が整備されることとなった。事業は昭和58年（1983年）に都市計画が決定し、平成3年（1991年）に事業認可された。以降、計画に則って用地買収や工事が進められた。鉄道高架化事業については仮線の敷設、本線の高架切替え工事を順次実施し、平成17年（2005年）8月に住吉駅から魚崎駅間、令和元年（2019年）11月に魚崎駅から芦屋駅間の高架化が完了し事業区間の全線が高架化された。

令和3年度（2021年度）からは側道等の自動車、歩行者用交差道路の整備に着手し、本書発行時点でも工事が継続している。

本事業地内には北青木遺跡、深江北町遺跡の所在が知られており、側道敷設範囲も埋蔵文化財包蔵地に含まれる。明治期の鉄道敷設以来、土地改変が行われず、遺跡の遺存状態が良好と予測されることから、発掘調査期間も工事の工程に組み込まれた。

第2節 調査の経過

北青木遺跡第9・10次調査と深江北町遺跡第19・20・21次調査時点ではすでに阪神電気鉄道本線の高架化が完全に完了していたため、それまでの阪神連立事業にともなう発掘調査のような、シートパイル等で頑丈な土留め工は行えず、安全勾配を確保しながら露土掘り調査することになった。そのため、現地表面から深さ1.0m以上を掘削する際は、調査区壁面との間に段階的に犬走りを残しながら調査を実施している。



※各段階の黒塗り部分が、その段階での発掘調査区及び次数である神戸市都市局 HP 掲載図を使用し一部改変

図5 工事対応図

また、建設作業工程や事業予算の都合上、一部調査区では中断期間を挟みながら年度をまたいで調査を行った。結果、調査期間は3ヶ年、調査面積は北青木遺跡が約2,840㎡、深江北町遺跡が約1,680㎡、延べ面積は約6,500㎡を超える調査となった。他の阪神連立事業にともなう調査は、高架化にともなう橋脚部分である狭い範囲で実施された一方、本書で報告する道路敷設範囲の調査については、一部を除き、東西方向に連続した調査区となったため、地形形成や遺構の密度などを把握する上で大きな成果を得た。

なお、調査区の名称については高架化部分では本体工事の工区名を用いていたが、本書で報告する調査では工区名ではなく、別に発掘調査用の調査区名を設定した。

調査実施時の調査体制と各調査の進行経過、報告書作成体制は以下の通りである。

表4 報告調査一覧

	北青木遺跡			深江北町遺跡	
	第9次	第10次	第19次	第20次	第21次
調査期間	令和2年度 2020/11/5～ 2021/3/31	令和3年度 2021/6/25～ 2021/12/10	令和2年度 2021/1/13～ 2021/3/12	令和3年度 2021/6/25～ 2021/12/10	令和4年度 2022/5/9～ 2022/8/10
調査区	西地区Ⅰ区～Ⅴ区 東地区Ⅰ区～Ⅲ区・ Ⅴ区	西地区Ⅳ区 東地区Ⅳ区・Ⅵ区・ Ⅷ区	西地区Ⅰ区	西地区Ⅱ区 中央地区Ⅰ区・Ⅲ区 東地区Ⅳ区	中央地区Ⅱ区・Ⅳ区・ Ⅴ区 東地区
調査面積	約2,080㎡ (延べ：約2,080㎡)	約760㎡ (延べ：約1,300㎡)	約380㎡ (延べ：約380㎡)	約900㎡ (延べ：約1800㎡)	約400㎡ (延べ：約900㎡)

表5 調査体制一覧

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
神戸市文化財保護審議委員 (史跡・考古資料担当)	黒崎 直 菱田 哲郎	大阪府立弥生文化博物館名誉館長 京都府立大学文学部教授		
神戸市文化スポーツ局				
局長	岡田健二	加藤久雄	加藤久雄	宮道成彦
副局長	宮道成彦	宮道成彦	宮道成彦	三宅正人
文化財課長	安田 滋	安田 滋	前田佳久	平井勝彦
埋蔵文化財センター 担当課長	前田佳久	前田佳久	松林宏典	松林宏典
埋蔵文化財係長	東 喜代秀	東 喜代秀	横詰清孝	横詰清孝
(担当)係長	斎木 巖 松林宏典 中村大介	横詰清孝 松林宏典 中村大介	山口英正 中村大介	山口英正 中村大介 阿部 功
事務担当学芸員	小林さやか	小野寺洋介	小野寺洋介	小野寺洋介
遺物整理担当学芸員	山田衛生	佐伯二郎	加納大誓	加納大誓
保存科学担当学芸員	山田衛生	山田衛生	山田衛生	山田衛生
調査担当学芸員	内藤俊哉 田島靖大 置原朋奈	内藤俊哉 中井菜加 田島靖大	阿部敬生 中井菜加 松島隆介	
報告書作成担当学芸員				阿部敬生 中井菜加 松島隆介

各調査で出土した遺物の水洗、マーキング作業、出土遺物の復元作業（一部）はそれぞれの調査の年度内に終了した。

2023年度（令和5年度）に出土遺物の復元作業、作業委託を含めた遺物の実測作業、遺構図、遺物実測図のレイアウト、トレース作業を行った。また、報告書の刊行のため、出土遺物の写真撮影や原稿編集を行った。

第2部 北青木遺跡

第1章 第9次調査

調査区は、青木幹線を境に西地区と東地区を設定し、さらに工程上の都合から、西から西地区Ⅰ～Ⅵ区、東地区Ⅰ～Ⅶ区に細分して設定した。第9次調査では、西地区Ⅰ～Ⅴ区、東地区Ⅰ区～Ⅲ区、Ⅴ区の調査を実施した。



図6 第9次調査 調査区位置図 (S=1/5000)

第1節 基本層序

現地表面の標高は1.9～2.0mで、現地表面直下には盛土、中・近世耕土が堆積する。

西地区Ⅰ区からⅡ区東部、西地区Ⅳ区から東地区Ⅴ区にかけて、遺構面となる浜堤面を検出した。浜堤は黄灰色から白色系の細砂から中砂の風成堆積層で形成され、下層では礫混じりの砂層が堆積し、激しい湧水が確認されている。

また、西地区Ⅱ区東部からⅣ区の西部にかけて、浜堤間の湿地状堆積と滞を形成する暗灰色や黒褐色の粘質土の上面を検出した。湿地状堆積の下層では、植物遺体や生痕が確認されている。しかし従前が道路であったことから、特に西地区Ⅰ区～Ⅴ区、東地区Ⅰ区～Ⅴ区にかけて、上下水道やガスなどの埋設管をはじめ、近・現代水路などの地中埋設物、さらには仮軌道敷設時の地盤改良によって削平され、遺構面は大きく攪乱を受けていた。

遺構面の標高は、西地区Ⅰ区からⅡ区で1.1～1.4m、Ⅳ区の東部から中央部で約1.2m、東地区のⅠ区で約1.2m、Ⅱ区からⅢ区で1.0～1.2m、Ⅴ区で約1.0mとなり、これは現代の削平により、本来の標高よりも低くなっていると推測される。

第2節 調査の成果

(1) 西地区Ⅰ区

西地区の最西端に位置し、遺構は、溝1条、土坑1基、ピット1基を検出した。遺物は、S P 101 から弥生土器が、遺物包含層から、陶器、磁器が出土している。

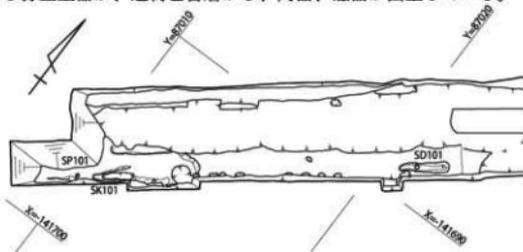


図7 西地区Ⅰ区 遺構面平面図

(2) 西地区Ⅱ区

第7・8次調査において、方形周溝墓および埋葬施設が確認されたB47調査区の北側に位置する。同調査では、周溝墓の東の区画溝であるS D 201、および西の区画溝であるS D 202が第7次調査B 47西調査区で検出された。今回の調査では、方形周溝墓の区画溝と考えられる溝3条、ピット3基を検出している。

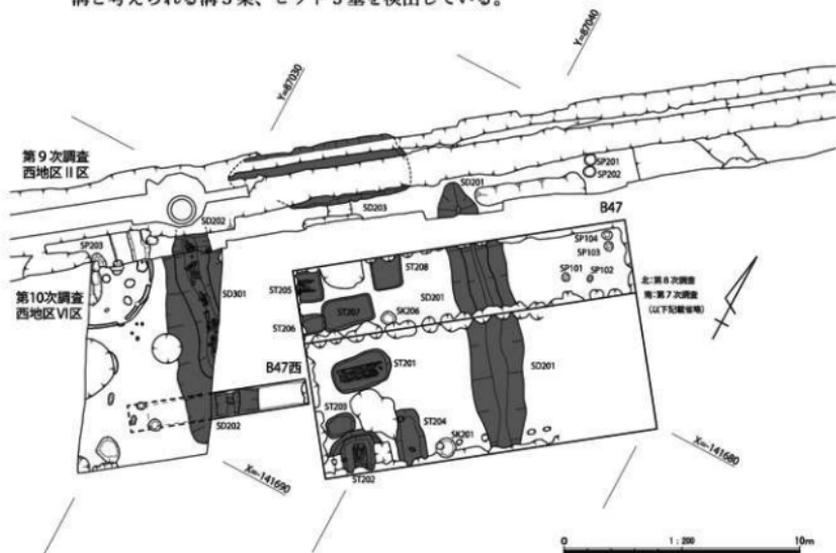
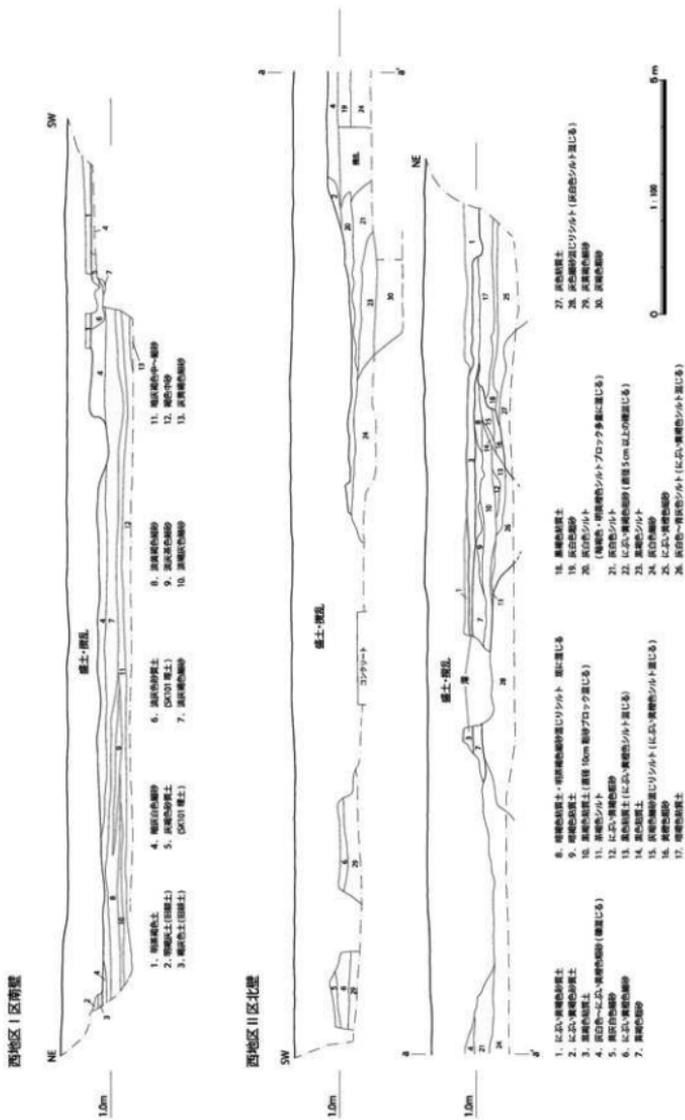


図8 西地区Ⅱ区 遺構面平面図



溝（方形周溝墓区画溝）

第9次調査では、第7・8次調査におけるSD 201から続く溝SD 201を、B 47西調査区で確認されたSD 202の北側でSD 202を、そして調査区中央部で東西方向に延びるSD 203を検出した。また、令和3年度に実施した第10次調査西地区Ⅶ区では、B47区西調査区および西地区Ⅱ区で検出されたSD 202から続く溝SD 301を、第3遺構面で検出した。SD 301も本項で合わせて報告する。なお、第10次調査第1、第2遺構面に対応する遺構面は、第9次調査では確認されなかった。

SD 201（第9次調査）

調査区東部で検出した溝で、最大幅1.7m、深さ約0.5mを測る。遺物は出土していない。

SD 202（第9次調査）

調査区西部で検出した溝で、最大幅1.38m、深さ約0.36mを測る。

遺物は、弥生土器と土錘が出土している。1～3は壺で、1の外面には、口縁部に4条の凹線文、頸部に6条の直線文、頸部から胴部最大径付近にかけて5～11条の波状文が6条確認でき、胴部最大径からやや下った位置にヨコ方向のミガキ、その下位にタテ方向のミガキを施す。内面は、口縁部に直線文、頸部から底部にハケを施す。2は摩滅が著しく、明瞭ではないが、内外面にナデの痕跡が確認できる。3は内面にハケ、外面にミガキを施す。4は甕で、胴部外面にタタキ、内面胴部上半にハケを施しており、胴部下半に穿孔が確認できる。5は管状土錘である。

1は弥生時代中期、2～4は弥生時代後期に属すると考えられる。また、2～5は上層、1は下層から出土している。

SD 203（第9次調査）

調査区中央部で検出した溝で、幅2.7m以上、深さ約0.5mを測る。

遺物は、弥生土器が出土している。6～11は甕で、12は鉢である。12の底部付近に方形の穿孔が見られる。6～11は弥生時代後期に属すると考えられ、12は中層、6～11は下層から出土している。

SD 202の北端は攪乱によって削平されているため、断定はできないものの、北へ向け浅くなっており、SD 201同様にSD 203とは分離している可能性が高いと考えられる。

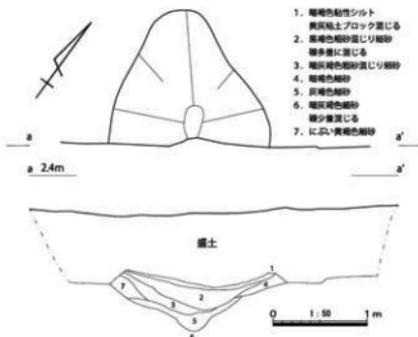


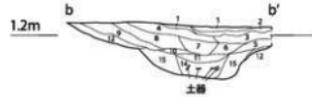
図10 西地区Ⅱ区SD201平・断面図

第9次調査 SD202



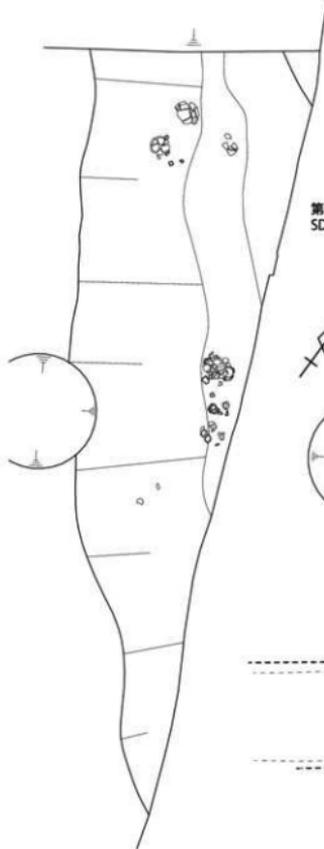
1. にぶい黄褐色砂質土 (上層)
 2. にぶい黄褐色～暗褐色砂質土
 3. 黒褐色粘性極細砂 明黄褐色土混じり
 4. 濃暗褐色粘性極細砂～極細砂
 5. にぶい黄褐色～極細砂
 6. 灰黄褐色極細砂
 7. 灰黄白色砂 (溝横面基盤層)
- (下層)

第10次調査 SD301



1. 暗褐色砂質土
2. 暗褐色シルト
3. 黒褐色砂質シルト
4. 赤褐色砂質土
5. 灰色砂質土
6. 暗灰色砂質土 (明黄灰色砂質土混じり)
7. 暗灰色砂質土
8. 灰色砂質土
9. 暗灰色砂質土
10. 暗灰色砂質土
11. 黒灰色砂質土
12. 黄褐色～灰色砂質土
13. 暗灰色砂質シルト
14. 黒灰色砂質シルト

○上層遺物出土状況



○下層遺物出土状況

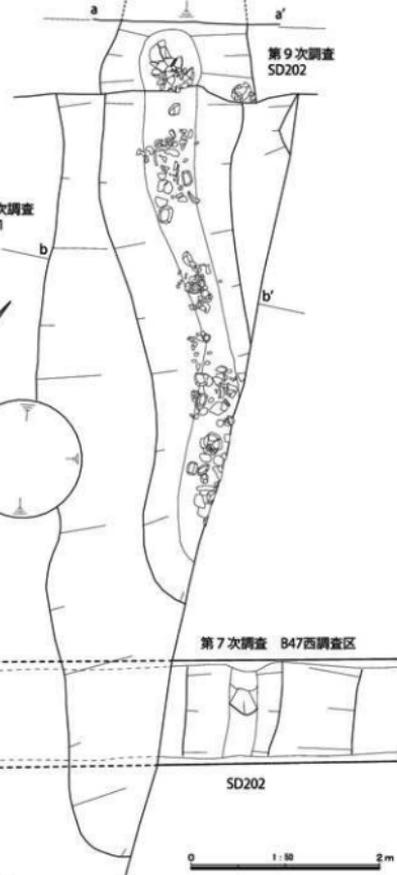


図11 西地区II区SD202・VI区SD301平・断面図

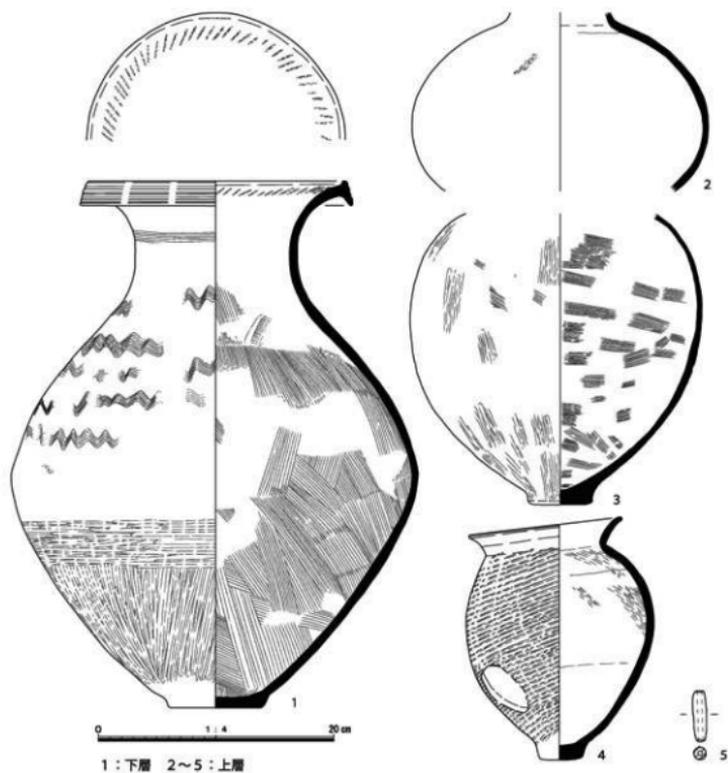


图 12 西地区Ⅱ区 S D 202 出土遺物

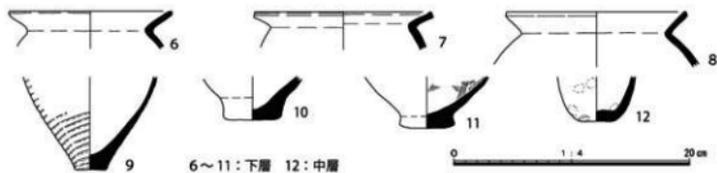


图 13 西地区Ⅱ区 S D 203 出土遺物

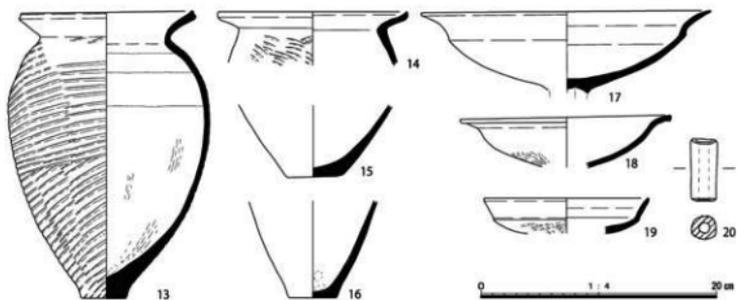


图14 西地区VI区 S D 301 上层出土遗物

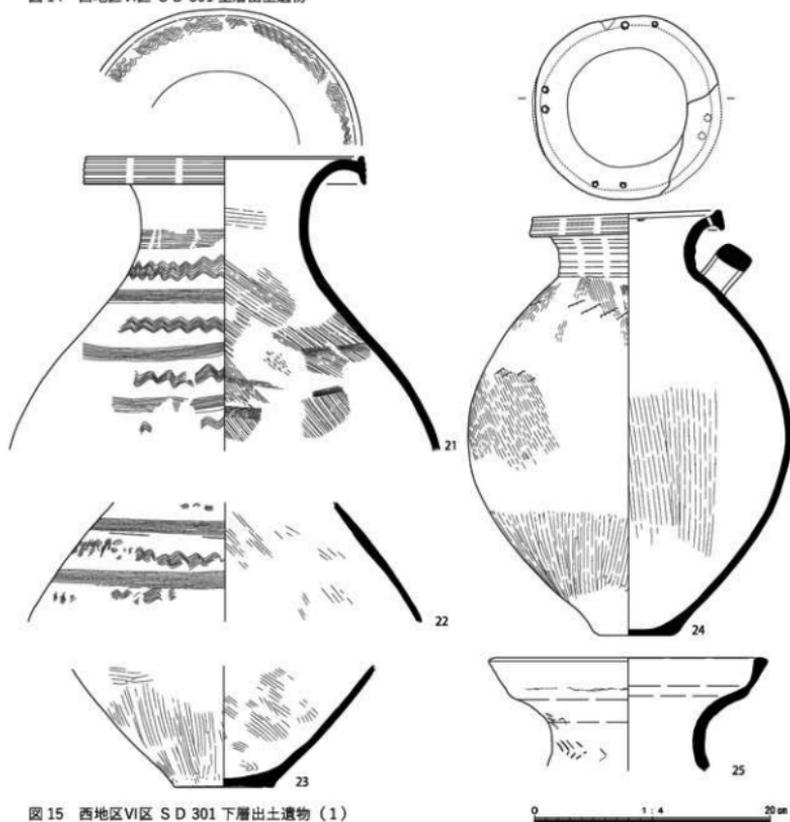


图15 西地区VI区 S D 301 下层出土遗物 (1)

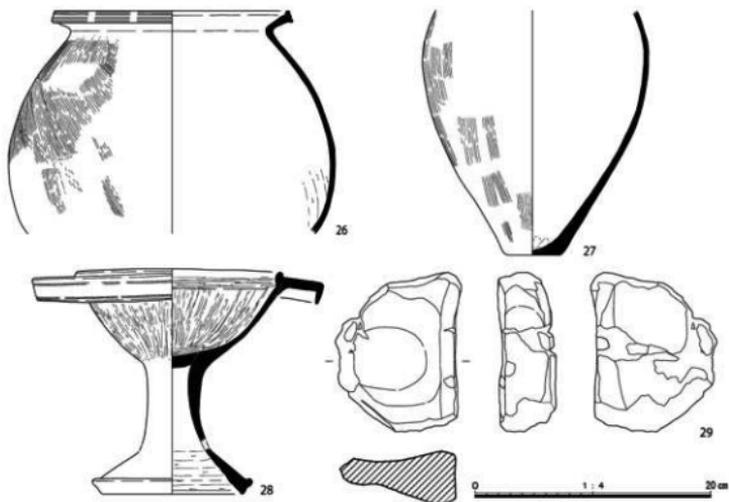


图16 西地区VI区 SD 301 下層出土遺物 (2)

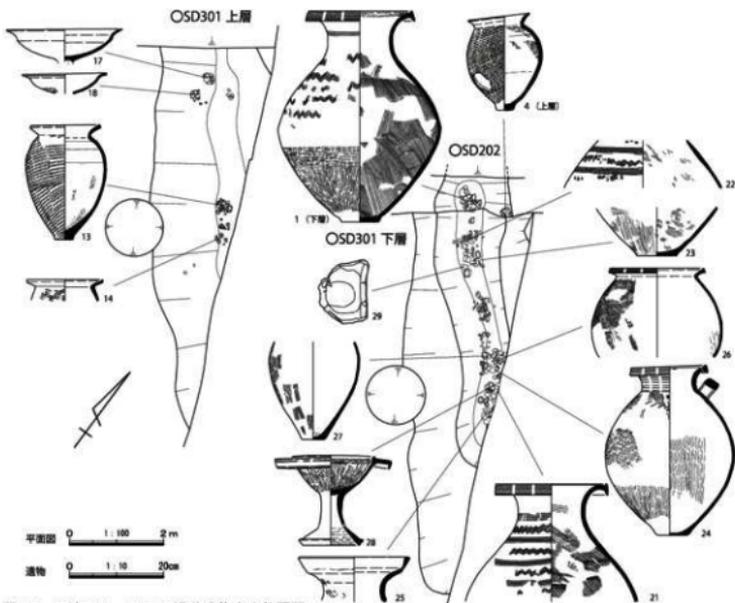


图17 西地区II-VI区周溝墓遺物出土位置圖

S D 301 (第10次調査)

第10次調査区である西地区VI区の第3遺構面東部で検出した、幅約2.2m、検出長約8.0m、深さ約0.5mを測る溝である。溝は南から北に向けて深くなる。

遺物は、弥生土器の壺、甕、水差、高坏の他、土錘、砥石などが出土している。13～16は甕で、13は胴部外面にタタキを施す。17～19は高坏の坏部、20は管状土錘である。21～23、25は壺で、21の外面には、口縁部に4条の凹線文、頸部から胴部最大径付近にかけて10～11条の直線文と、5～9条の波状文が交互に施し、内面には、口縁部に波状文、胴部にハケを施す。24は水差である。内面は、口縁部に2個1対となる穿孔が、3ヶ所に確認できた。胴部にはハケを施す。外面は、口縁部に2条の凹線文、胴部上半にハケを施し、肩部上方にはハケの後、櫛状工具による刺突文が確認できる。また、下半にはミガキを施している。26～27は甕、28は高坏である。29は砥石で、上面および側面に使用痕が認められる。上層から13～20、下層から21～29が出土している。

第7・8次の調査成果を含めると、周溝墓は北東隅および北西隅において陸橋状の掘り残しを持つ溝で区画され、東西約9m、南北約10m以上の規模をもち、南北にやや長い長方形の形状と推定される。S D 301は調査区の南東外に直線的に続いており、東に湾曲して南辺の溝と接続するか陸橋状に掘り残されているか、明確ではない。

周溝の埋土は、暗黒灰色粘性シルト層または暗褐色細砂を挟んで上下2層に分かれており、上層は弥生時代後期、下層は弥生時代中期後半と考えられる土器が出土しており、第7・8次調査においても同様の時期の土器が確認されている。

S P 201・S P 202

調査区東部で検出したビットで、直径約50cm、深さ約10cmを測る。

両ビットから、モミ属の曲物の底板または蓋板が出土している。S P 201出土のものを、第3章で図示した。その他、S P 201から管状土錘が出土している。また、S P 202は曲物の底面に石が置かれていた。



図19 西地区II区
S P 201出土遺物

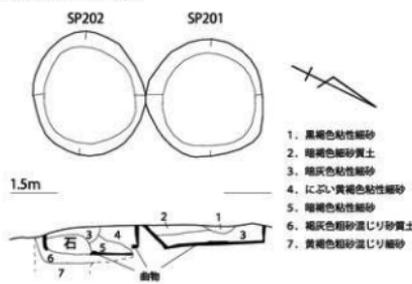


図18 西地区II区 S P 201・202平・断面図

湿地状堆積出土遺物

I区から続く浜堤は、調査区の東側で湿地状堆積に変わり、IV区まで広がっていることが確認された。湿地状堆積の検出面では、ヒトの足跡を確認している。

浜堤と湿地状堆積の境界付近から、弥生土器の壺が出土している。弥生時代後期に属すると考えらえる。

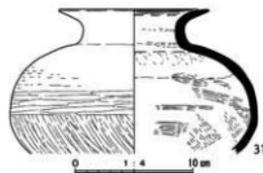


図20 西地区II区 湿地状堆積出土遺物

(3) 西地区Ⅲ区

西地区の中央に位置する。Ⅱ区の東部および南に隣接する第8次調査B48-B区の北部から続く湿地状堆積を確認した。湿地上面ではヒトの足跡が、調査区中央部の湿地内から数ヶ所の土器溜まりが確認された。

湿地状堆積出土遺物

32・33は壺である。33は内面にハケが、外面に摩滅しているがヘラミガキを施している。34～39は甕で、34・38は胴部外面にタタキを施す。37は胴部外面にタタキの後、ハケを施す。40・41は高坏である。40は外反する口縁をもち、坏部内面にミガキを施し、脚部内面にしぼり痕が認められる。外面は坏部および脚部にミガキを施し、脚部に三方向に円形の透かしが確認できる。41は坏部底部および脚部で、摩滅しているが外面にハケを施しており、脚部内面にしぼり跡が認められる。

これらは弥生時代後期に属すると考えられる。

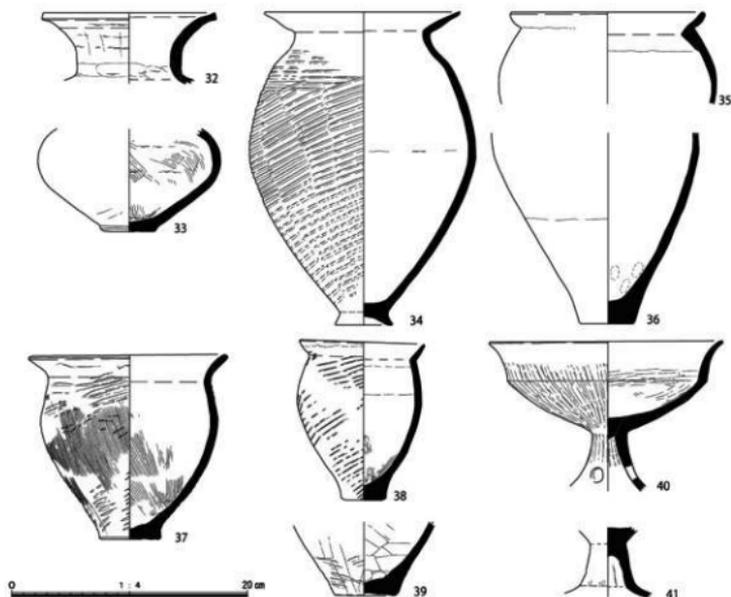


図21 西地区Ⅲ区 湿地状堆積出土遺物

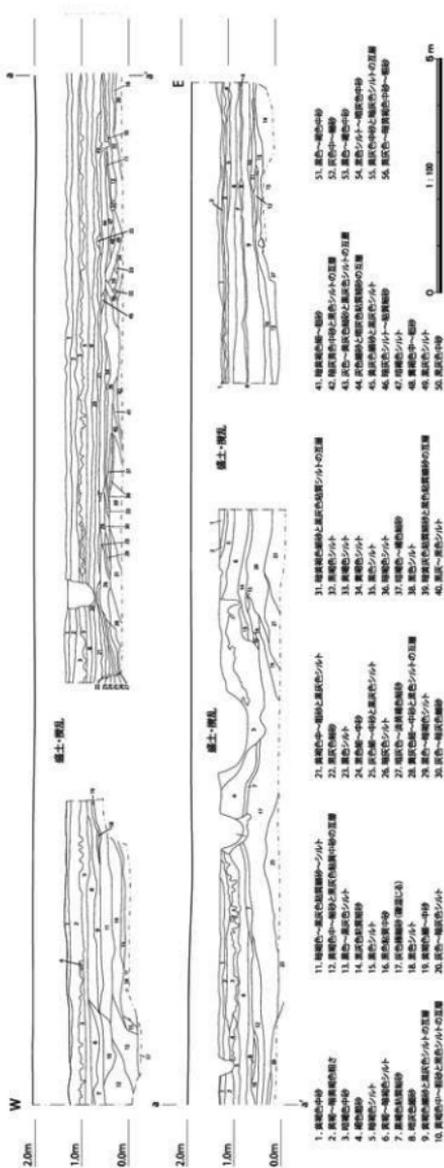


図 23 西地区川区 北壁面断面図

(4) 西地区IV区

西地区の中央に位置し、遺構は溝4条、土坑2基、ピット1基を検出した。

また、調査区の西側でII区から広がる湿地状堆積の東端を検出し、湿地上面でヒトの足跡を、湿地の東端では滞筋と考えられる堆積を確認した。また、調査区の中央でも湿地状堆積を検出している。

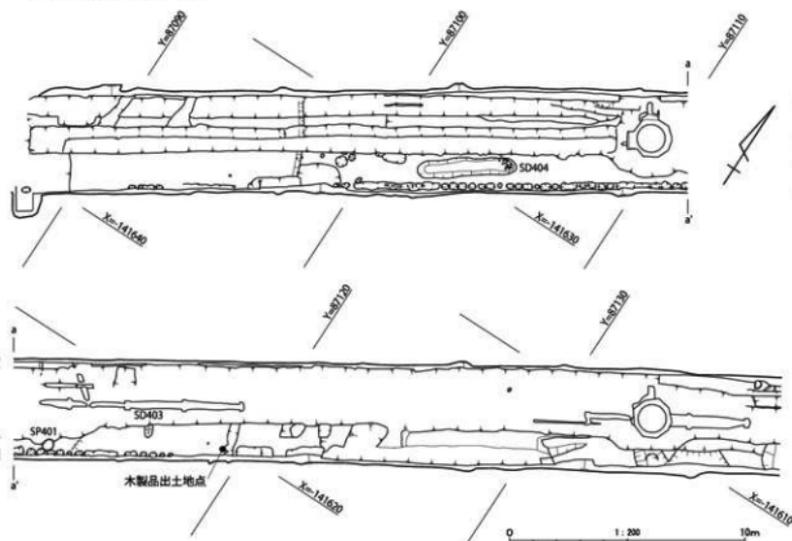


図24 西地区IV区 遺構面平面図

SD 402

調査区の西部で確認した湿地状堆積の上面で検出した、南北に延びる溝である。長さ約1.4mを測る。

古墳時代後期の須恵器坏身が出土しており、この時期に湿地状堆積が埋没したと考えられる。

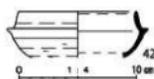


図25 西地区IV区 SD 402 出土遺物

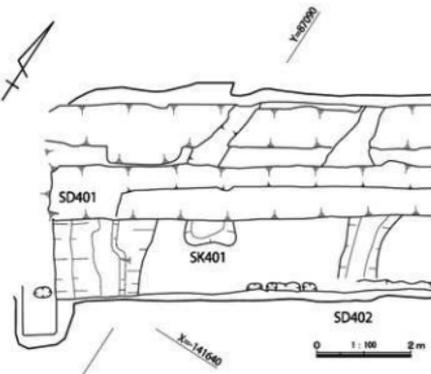


図26 西地区IV区 湿地状堆積上面遺構面平面図

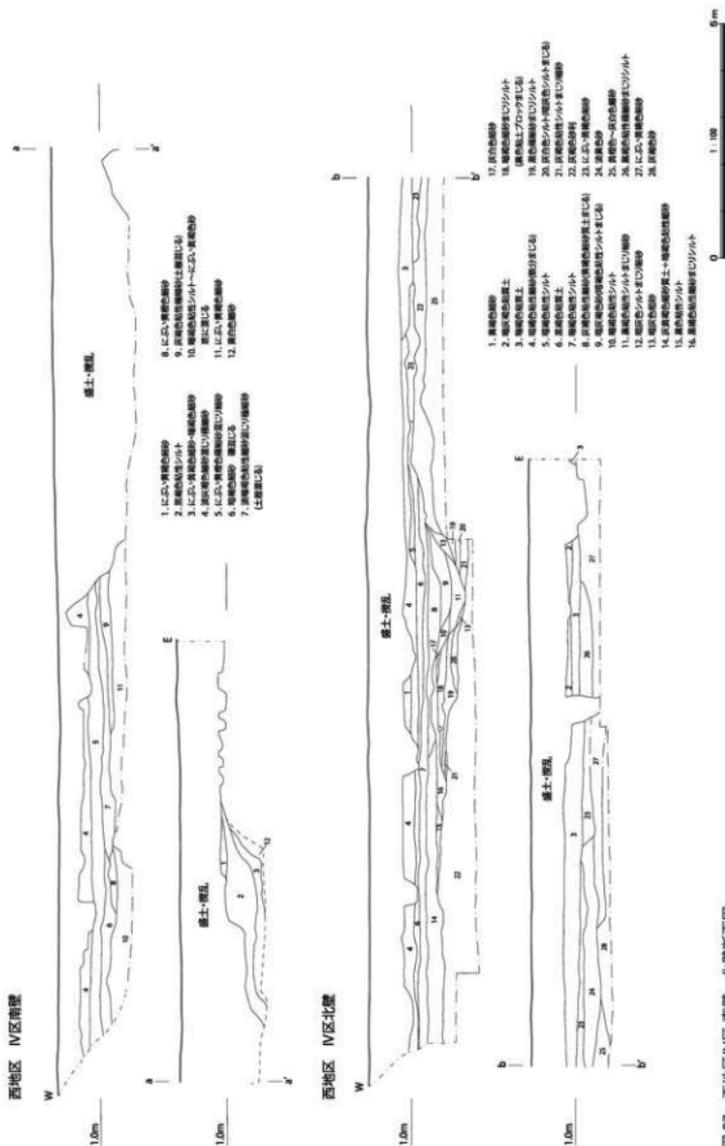


図 27 西地区IV区 南壁・北壁断面図

S D 404

調査区の西半で検出した幅0.8m、長さ4.18m、深さ25mの溝である。

遺物は弥生土器の壺が出土している。43は内面にヘラケズリ、外面にヘラミガキを施す。

44は壺の底部で、外面にヘラミガキを施す。弥生時代後期に属する。

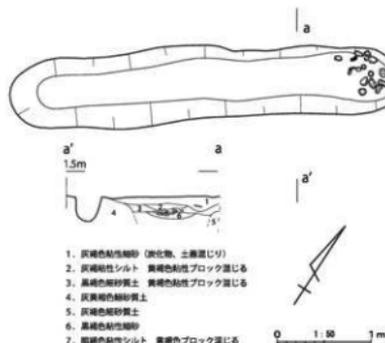


図28 西地区IV区 S D 404 断面図

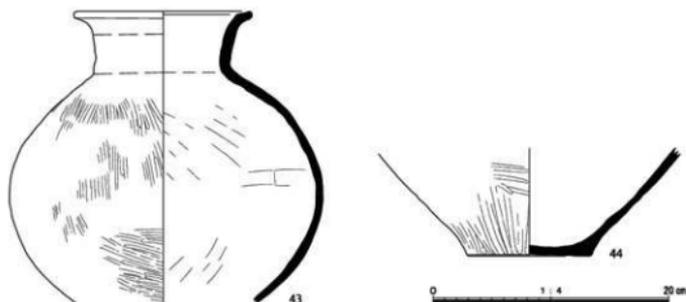


図29 西地区IV区 S D 404 出土遺物

湿地状堆積出土遺物

湿地状堆積から弥生土器の壺の口縁部と、底部片が出土している。45は「く」の字状に外反する口縁部をもち、胴部外面にヘラミガキを施す。47は外面にタタキ、内面にヘラケズリを施す。弥生時代後期から終末期に属する。

また、湿地の最下層から、ヒノキ材の鞘が出土している。第3章に図示した。

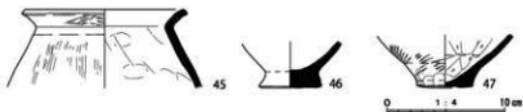


図30 西地区IV区 湿地状堆積出土遺物

(5) 西地区V区

西地区の最東端に位置する。遺構は溝17条、土坑17基、ピット3基、用途不明遺構2基を検出した。

S D 512

調査区中央部で検出した南北に延びる溝で、幅1.2m、深さ29cmを測る。埋土から管状土錘が出土している。

S K 501

調査区の東端で検出した、東西幅86cm、南北54cm、深さ約25cmの土坑である。攪乱により一部が削平されているため、全容は不明である。埋土は褐色中砂である。

遺物は、弥生土器の壺49が出土している。口縁部内面に7条の波状文と、扇形文が施文され、胴部内面は摩滅しているが、部分的にハケメが確認できる。外面は、口縁部垂下面に4条の凹線文と、その上から4本1組の棒状浮文を施し

ている。頸部上半にタテ方向のハケを施し、その上から爪痕のような痕跡が確認できる。頸部下半には断面三角形突帯を3条施し、その直下はタテ方向のハケ、ナナメ方向のハケを施した後、直線文、波状文を残す。また、上から2段目、3段目の波状文は、末端2ヶ所に扇形文が確認できる。胴部最大径付近にヨコ方向のミガキが、胴部下半にタテ方向のミガキを施し、底部は、外面から焼成後に穿孔している。壺は弥生時代中期後半に属する。

南に隣接する第7・8次調査B51区では、弥生時代中期後半の遺物をともなう遺構(S K 302、S X 302)や周溝墓の可能性のある溝(S D 202、S K 301)、弥生時代後期の円形周溝墓(S D 201)が確認されており、S K 501も、これらに関連する遺構であると想定される。

遺物包含層出土遺物

50は遺構面検出中に出土した突帯文土器の深鉢の口縁部片である。口縁部からやや下がった位置に、断面が下向きの三角形を呈する突帯を1条巡らす。縄文時代晩期後半に属する。



図31 西地区V区
S D 512
出土遺物



図32 西地区V区
S K 501 出土遺物



図33 西地区V区 遺構面出土遺物

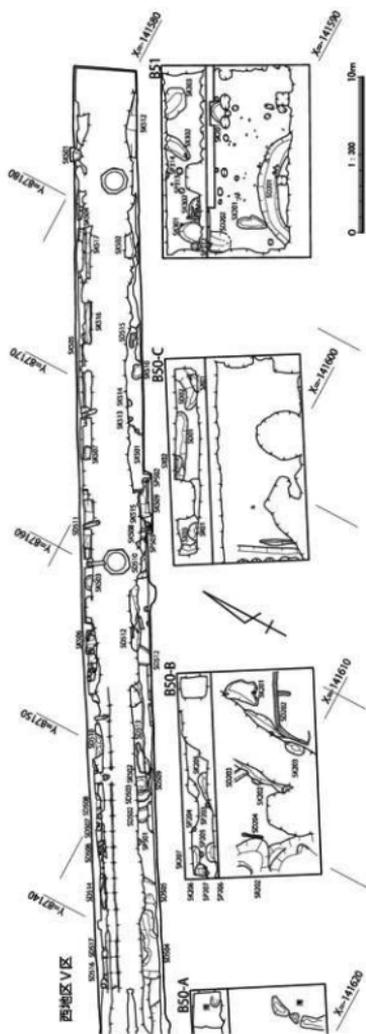


図34 西地区V区遺構面平面図

S0512

SK501

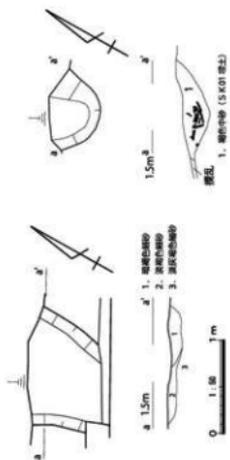


図35 西地区V区遺構平・断面図

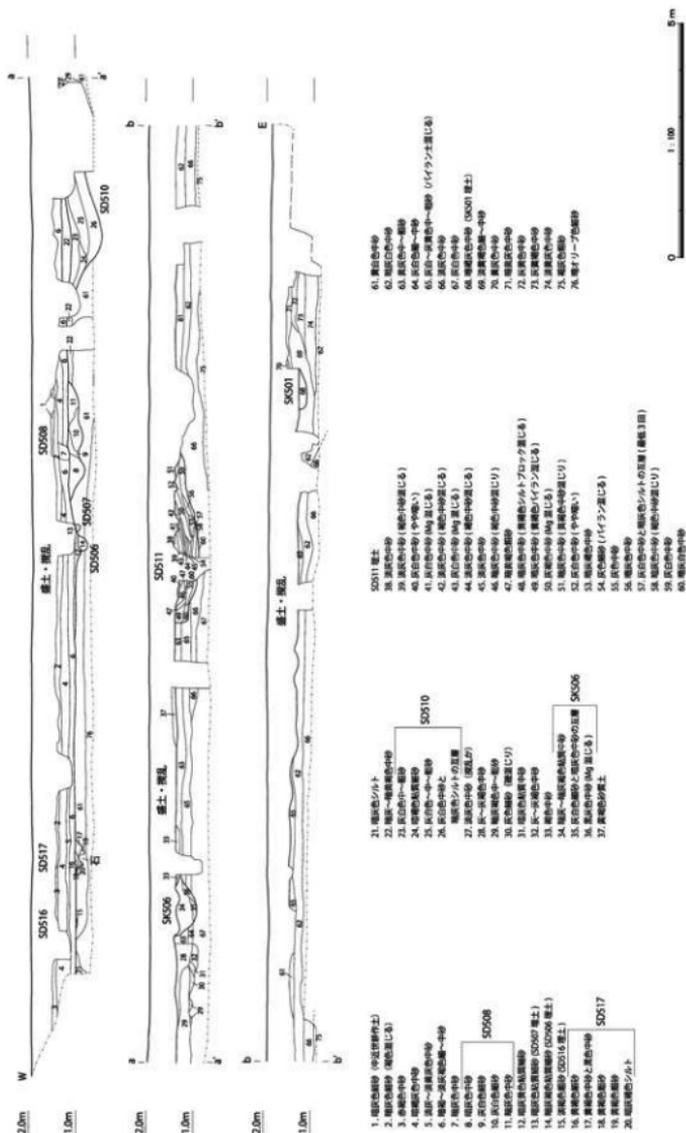


図 36 西地区V区北壁面断面図

(6) 東地区Ⅰ区

溝2条、土坑2基、ピット2基を検出した。

SD 601

調査区東側で検出した、幅約2.9～3.8m、深さ約0.8mの溝である。第8次調査で検出されたB53-A区のSD 202と同一の遺構と考えられる。遺構埋土は第7・8次調査と同様、土石流の堆積を確認した。今回遺物は出土しなかったが、第7・8次調査では、溝の下部で弥生時代中期から後期、および8世紀後半頃の土器片が出土している。なお、第8次調査ではB53-A区SD 202の両側でそれぞれ1条ずつ溝が検出されていたが、今回の調査ではそれに対応する溝は確認されなかった。

(7) 東地区Ⅱ区

溝4条、土坑1基、ピット3基、落ち込み1基を検出した。

SD 701

長さ8.4m以上、深さ15cmを測る溝である。周辺を大きく攪乱され、東端はSD 704、SK701を切っている。SK 701の上層に位置する埋土から、弥生時代前期に属する壺が出土している。

SK 701

SD 701の下層で検出した、長径約1.3m以上、深さ約60cmを測る土坑である。

SX 701

調査区中央部で検出した、幅約6.1m、深さ約1.0mの落ち込みである。南側は調査区外へ続いているが、B54-B区で西肩を検出したSK 107と同一の遺構の可能性がある。

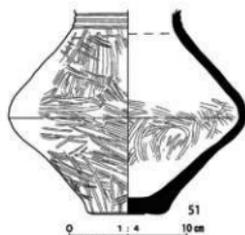


図 37 東地区Ⅱ区 SD 701 出土遺物

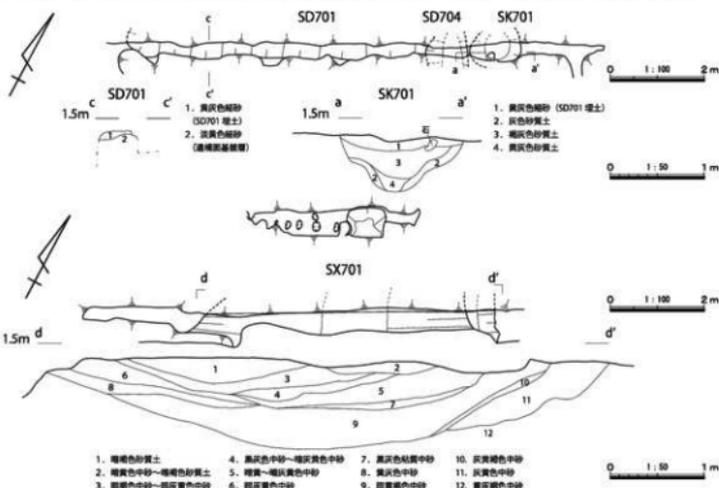


図 38 東地区Ⅱ区 遺構平・断面図

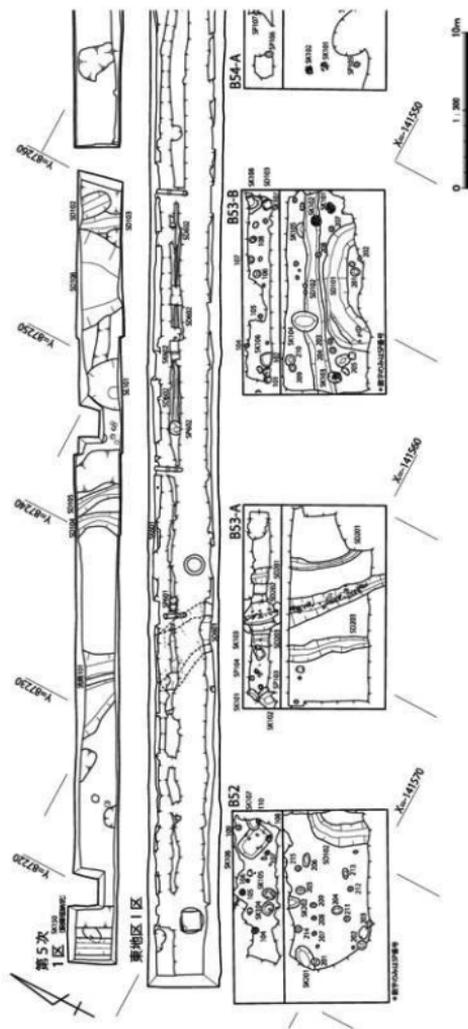


图 39 東地区I区遺構面平面図

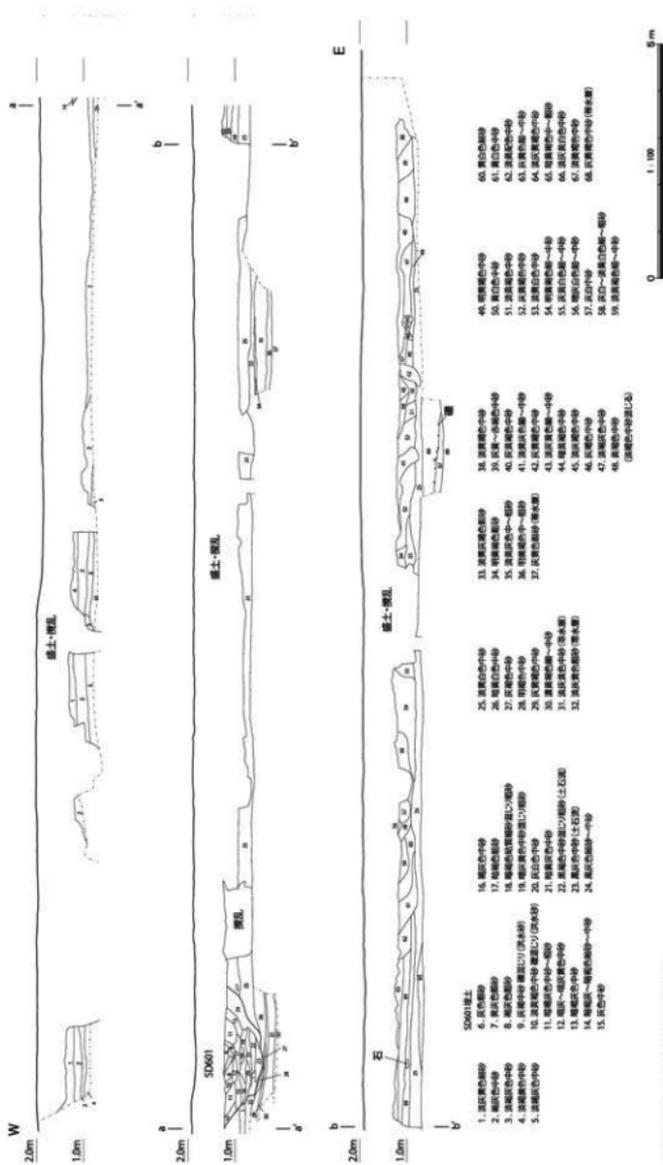


図40 東地区I区北壁面断面図

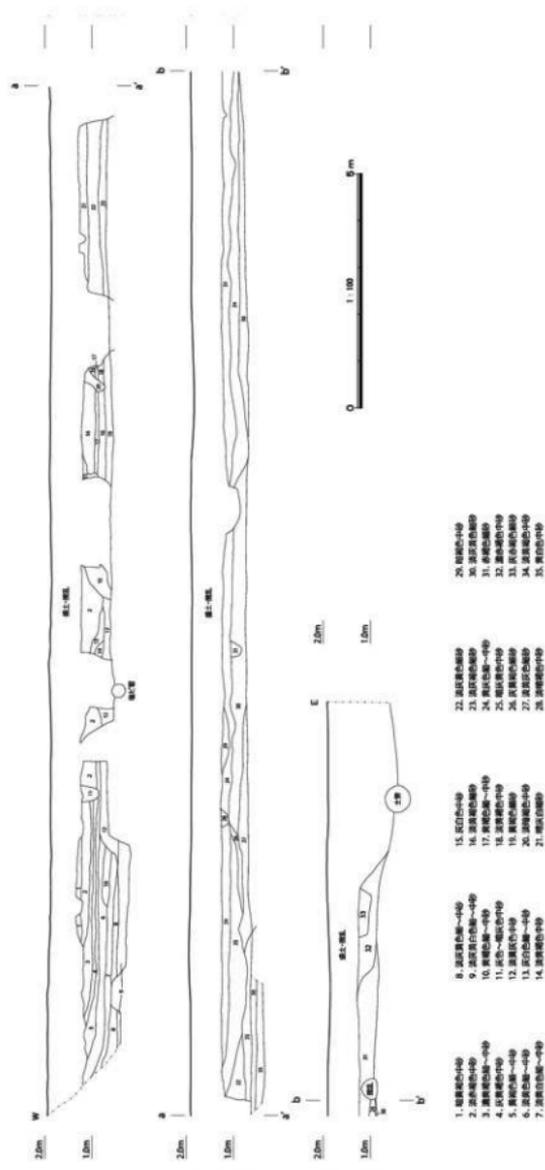


图 42 東地区 II 区 北壁断面図

(8) 東地区Ⅲ区

掘立柱建物1棟、溝1条、ピット1基、落ち込み1基を検出した。

SB 801

調査区東側で検出した掘立柱建物である。3基の柱穴は直径35～50cmで深さ約5cm、P3のみ深さ約24cmである。いずれも長径15～20cmの礎盤を備える。P3の礎盤の一つはほぼ直立状態で検出した。南側の第8次調査B55-B区では被熱した礎盤や、第7次調査B54-C区やB55-Aでは1間×2間相当の規模と考えられる掘立柱建物が確認されており、この柱穴列も東西方向2間以上の建物の可能性がある。

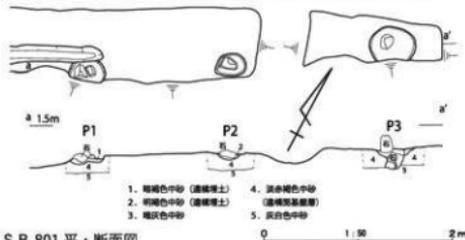


図43 東地区Ⅲ区 SB 801 平・断面図

遺物包含層出土遺物

遺構面の上位に位置する遺物包含層から、土師器、須恵器、管状土錘が出土している。それらのうち、管状土錘を図化した。



図44 東地区Ⅲ区
遺物包含層
出土遺物

(9) 東地区V区

東地区の最東端に位置する。遺構は落ち込み3基、河道1条を検出した。

SX 1002

調査区西側で検出した、東西約13.1m、南北約1.7m以上、深さ約0.9mの流路状の落ち込みである。西辺から北辺の角と東辺を検出した。南側は調査区外へと続いており、北辺から東辺の角は後世の攪乱で消滅している。

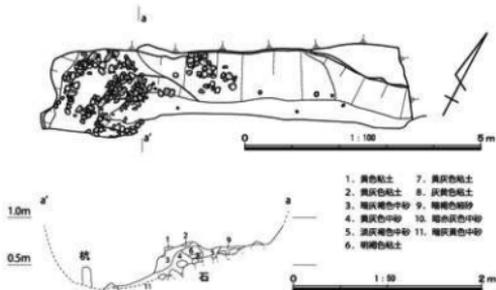


図45 東地区V区 SX 1002 平・断面図



図46 東地区V区
SX 1002 出土遺物

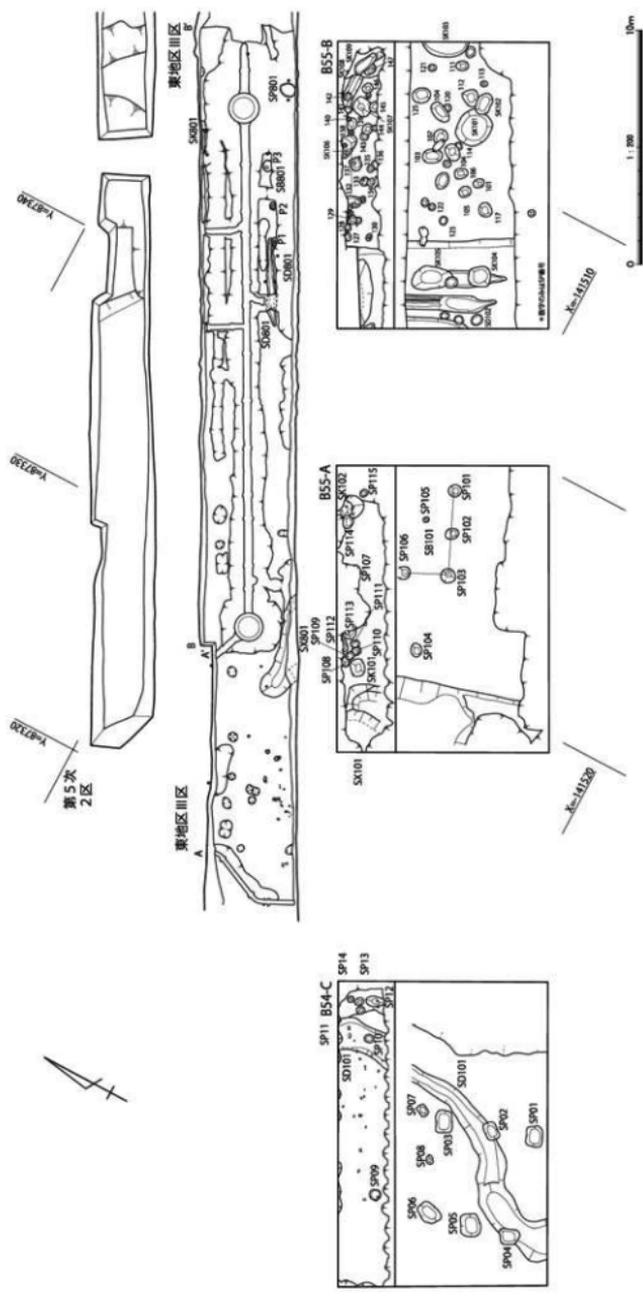


图 47 東地区III区遺構面平面図

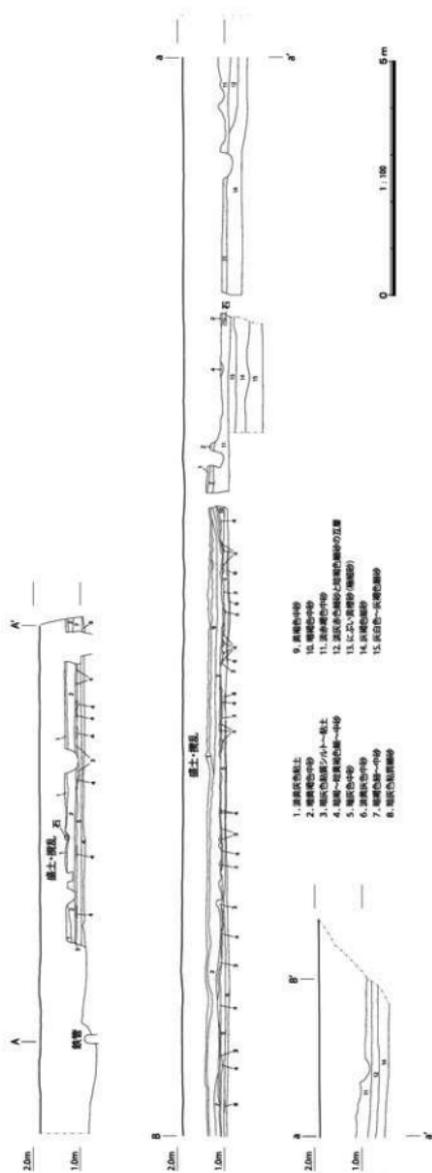


图 48 青森地区III区 北壁面断面图

落ち込みの斜面から底面にかけて、斜面に沿うように直径5cmほどの杭が打ち込まれている。また西辺から北辺の角では落ち込み斜面に人工的な集石が存在する。礫は長軸方向に直径5～20cmの大きさで、川原石のような角が摩耗した礫を用いている。集石は上層と下層の2層を確認した。標高は、下層の礫上面の斜面上部で0.75m、底面と接する斜面下部で0.3mである。上層の礫は下層の礫上に5～20cmほど土を盛り、その上に礫を施し、隙間を粘土で埋めている。

遺物は土師器・須恵器・土錘が出土しており、それらのうち管状土錘を図化した。堆積状況や杭、集石の存在、出土遺物から、古代の河道の可能性がある。

S X 1003

調査区東側で検出した、東西約4.1m、南北1.8m以上、深さ約20cmの桁形の遺構である。直径2cmほどの枝をしがらみのように横方向に積み重ねた柵で、遺構の四辺を囲っている。

遺物は土師器、須恵器、磁器が出土している。後述の河道を切るため、近世以降の遺構とみられる。出土遺物のうち、図化できたものは弥生土師の壺である。内外面ともにヘラミガキを施す。

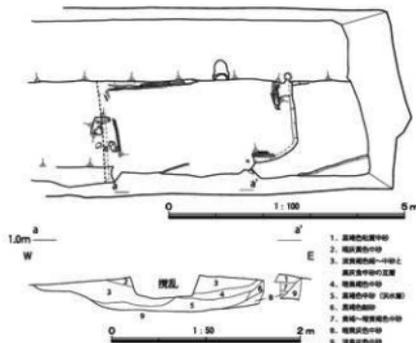


図49 東地区V区 S X 1003 平・断面図



図50 東地区V区 S X 1003
出土遺物

河道

調査区東側で検出した、東西約7.5m以上、深さ約1.0m以上の流路である。第7・8次調査では流路の東肩を検出したが、今回の調査では東肩はS X 1003に切られているため、検出できたのは西肩のみである。

既往の調査同様、流路内には多数の杭が打ち込まれていたが、流路を横断するように打ち込まれているため、護岸を目的とした杭ではない可能性がある。杭は多くが標高-0.4～-0.2mまで打ち込まれており、最も深いものでは-0.7mに達している。うち1点の樹種を同定した結果、モミ属を使用していることがわかった。

遺物は土師器、須恵器、陶器、瓦が出土している。既往の調査では近世の河道と報告されていたが、出土した遺物から、古代から中世にも流れていた可能性がある。

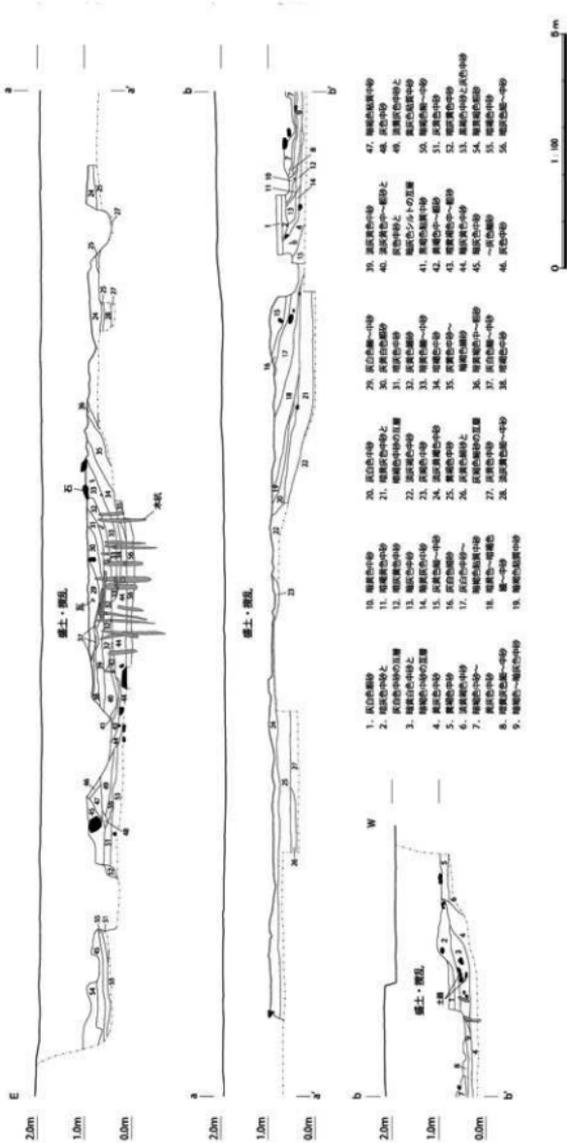


図 52 真地区V区南壁断面図

(10) 小結

第9次調査では、約420m分を調査した。

今回の調査において遺構を確認した範囲は、西地区Ⅰ区からⅡ区東部、西地区Ⅳ区から東地区Ⅴ区にかけての浜堤の部分である。しかし遺構面は、上下水道やガスなどの埋設管や、近・現代水路などの地中埋設物、仮軌道敷設時の地盤改良によって大きく削平されており、遺構の全容を確認できたものはごく一部であった。

中でも、第9次調査西地区Ⅱ区、第10次調査西地区Ⅵ区では、第7・8次調査B47調査区で確認された方形周溝墓の北辺（第9次S D 203）および東辺（第9次S D 201）、西辺（第9次S D 202、第10次S D 301）の続きと、北東隅と北西隅の陸橋部を検出することができた。現在までの既往調査の成果をまとめると、周溝墓は、北東隅および北西隅において陸橋状の掘り残しを持つ溝で区画され、東西約9m、南北約10m以上の南北にやや長い長方形の規模をもつことが確認されている。。

また、西地区Ⅴ区では、弥生時代中期の壺が埋納された土坑、S K 501を確認した。南に隣接する第7・8次調査B51区では、円形周溝墓や、土器をともなう土坑が複数確認されており、これらに関連する遺構であると想定される。

以上の成果は、既往調査から、墓域のエリア（第9・10次西地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ区＝第7・8次B46・47調査区）や祭祀空間が広がるエリア（第9・10次西地区Ⅴ区～東地区Ⅱ区＝第7・8次B50-B～B54-C調査区）と推測されている範囲で確認されており、過去の調査を追認する結果となった。

さらに東地区Ⅲ区では、3基の柱穴で構成された掘立柱建物S B 801を検出している。いずれも長径15～20cmの礎盤を備えており、P3の礎盤の一つはほぼ直立状態で検出した。第7・8次調査かた、当該エリアは、奈良時代後半及び平安時代末に職能集団の生業園、または狭小な居住域の可能性が指摘されており、南側の調査では、第8次調査B55-B区で被熱を受けた礎盤や、第7次調査B54-C区やB55-Aで掘立柱建物が確認されている。

東地区Ⅴ区では、古代の河道（S X 1002）の護岸と考えられる集石が部分的に検出された。当調査区周辺は、第7・8次調査で井戸や底部穿孔の土師器皿や五輪塔の水輪部分などが出土していたことから、古代から中世にかけて水際の祭祀空間となっていた可能性が指摘されており、この集石遺構も同様の性格をもつ可能性がある。このような遺構は既往調査では確認されておらず、奈良から平安時代にかけての北青木遺跡の性格を探る上でも、また、今後周辺の調査を行っていく上でも、貴重な成果といえる。

表6 北青木遺跡第9・10次西VI区出土遺物観察表(1) ()は復元値、[]は残存値、底径のみの場合は底径を示す。

番号	原種	地区遺構名	注量 口係 器高	胎土	色調 内面 外面	裏面 内面 外面	備考
1	弥生土器 壺	西地区II区 SD202 下層	21.8 4.0	密 1~2mmの白色砂粒を含む	灰白	ハケ 口縁部:凹線文、頸部:直線文、胴部:波状文、ヨコミガキ、タテミガキ	外面黒炭
2	弥生土器 壺	西地区II区 SD202 上層	— (15.2)	密 2mm以下の白色砂粒多く含む	灰白~褐灰 灰白~よい白	ナデか ナデか	外面黒炭
3	弥生土器 壺	西地区II区 SD202 上層	底 5.45 20.2 (24.8)	密 5.5mm大までの石英・白色砂粒多く含む	淡黄灰色 褐灰色	ハケ ミガキ	
4	弥生土器 壺	西地区II区 SD202 上層	13.1 20.6	密 1~2mmの白色砂粒多く含む	橙~淡黄橙 赤橙~淡黄橙	ハケ、ナデ タタキ、ナデ	外面黒炭、 胴下部穿孔
6	弥生土器 壺	西地区II区 SD203 下層	(13.8) (3.0)	やや粗 2mm以下の白色砂粒多く含む	明黄灰色 明黄灰色	ナデ ナデ	
7	弥生土器 壺	西地区II区 SD203 下層	(15.1) (3.0)	やや粗 2mm以下の白色砂粒多く含む	明黄灰色 明黄灰色	ナデ ナデ	
8	弥生土器 壺	西地区II区 SD203 下層	(15.1) (4.8)	密 2mm以下の砂粒多く含む	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	
9	弥生土器 壺	西地区II区 SD203 下層	底 2.6 (7.9)	密 2mm以下の白色砂粒をわずかに含む	褐灰 赤橙	ナデ タタキ、ナデ	
10	弥生土器 壺	西地区II区 SD203 下層	底 4.9 (3.8)	粗 3mm以下の砂粒多く含む	にぶい橙色 にぶい黄褐色	ナデか ナデか	
11	弥生土器 壺	西地区II区 SD203 下層	底 4.7 (4.7)	密	赤褐色~明黄褐色 赤褐色~明黄褐色	ナデ ハケ、ナデ	外面黒炭
12	弥生土器 鉢	西地区II区 SD203 中層	底 2.8 (3.8)	密 2mm以下の白色砂粒をわずかに含む	にぶい橙 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	胴下部穿孔
13	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 上層	15.0 24.4	密 1~2mmの白色砂粒を含む	にぶい橙~灰褐	ハケ、ナデ タタキ、ナデ	内面接合痕、 外面黒炭
14	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 上層	16.0 (4.6)	密 1~2mm大の石英・長石を含む	灰白 にぶい黄褐色	ナデ タタキ、ナデ	
15	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 上層	底 4.8 (6.1)	密 1~3mmの白色砂粒多く、4~5mm の白色砂粒少量を含む	淡黄橙~にぶい黄褐色 淡黄橙~にぶい黄褐色	ナデか ナデか	外面黒炭
16	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 上層	底 4.1 (8.2)	密 1~2mmの白色砂粒やや、4~5mm の白色砂粒少量を含む	淡黄橙~にぶい黄褐色 淡黄橙~にぶい黄褐色	ナデか ナデか	
17	弥生土器 高坏	西地区VII区 SD301 上層	24.5 (6.8)	密 1~2mmの白色砂粒多量、3~4mm の白色砂粒を含む	にぶい黄褐色~にぶい褐 にぶい黄褐色~にぶい褐	ナデ ナデ	内外面黒炭
18	弥生土器 高坏	西地区VII区 SD301 上層	18.0 (4.3)	密 2mm以下の白色砂粒をわずかに含む	淡黄橙~橙 淡黄橙~橙	ナデ 下部ミガキ	
19	弥生土器 高坏	西地区VII区 SD301 上層	(14.0) (3.6)	密 1~4mm大の石英・長石を含む	灰白 灰白	ミガキ、ナデ ミガキ、ナデ	
21	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 下層	23.4 (24.0)	密 1~2mmの白色砂粒を含む	黒褐~黄褐色	ハケ 口縁部:凹線文、頸部:直線文、 胴部:直線文、波状文、	
22	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 下層	— (10.2)	密 0.5~3mmの石英・長石、1.0mm以下 の角閃石を含む	褐灰 灰白~褐灰	胴部:直線文、波状文	
23	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 下層	— (10.4)	密 0.5~5mmの長石、0.5~2.0mmの石 英を含む	褐灰 にぶい黄褐色	ハケ ミガキ	
24	弥生土器 水盂	西地区VII区 SD301 下層	15.8 36.3	密 1~2mmの白色砂粒多く含む	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ、ナデ 口縁部:2斜方形穿孔、凹 線文、胴部:ハケ後刻突点文、 ミガキ	胴部黒炭
25	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 下層	(23.6) (9.65)	粗 0.1~5mmの石英・長石、0.1~4.0 mmのさざり礫を含む	橙 にぶい橙	横ナデ、ナデ ナデ、へら掻き文	外面接合痕、 工具痕
26	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 下層	(20.4) (19.0)	密 1~4mmの白色砂粒多く含む	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口縁部:波状文、胴部:ナデ、 へらすり 口縁部:凹線文、胴部:ハケ	胴部黒炭
27	弥生土器 壺	西地区VII区 SD301 下層	底 5.5 (20.9)	密 1~4mmの白色砂粒多く含む	黄赤~赤褐色 赤橙~赤褐色	ハケ ハケ、ナデ	胴部黒げ
28	弥生土器 高坏	西地区VII区 SD301 下層	24.7 19.2	密 1~2mmの白色砂粒多く、4~5mm の白色砂粒を含む	にぶい橙~にぶい褐	外部:ナデ、ミガキ、胴部:ナデ、 へらすり ミガキ、ナデ	口縁部黒炭
31	弥生土器 壺	西地区II区 掘地状遺構	(12.7) (12.3)	密 2mm以下の白色砂粒をやや含む	褐灰色、明黄灰色 明黄灰色	ハケ ナデ、胴部ヨコミガキ、下部 タテミガキ	煤付着

表7 北青木遺跡第9・10次西VI区出土遺物観察表(2) ()は復元値、[]は残存値、底底のみの場合は底底を示す。

番号	器種	地区遺跡名	注量 口徑 器高	胎土	色調 内面 外面	調整 内面 外面	備考
32	弥生土器 甕	西地区III区 湿地状埋藏	(14.4) (6.05)	粗 6mm以下のくさり礫・長石・石英 多く含む	灰白 灰白	ナデ ナデ	
33	弥生土器 甕	西地区III区 湿地状埋藏	底4.4 (8.8)	密 1.0mm以下の長石含む	黄灰 黄灰	ハケ ミガキ、ナデ	
34	弥生土器 甕	西地区III区 湿地状埋藏	26.7 4.9	密 1～2mmの白色砂粒やや含む	灰黄～黄 灰 灰黄～黄 灰	ナデか タタキ	内面接合痕
35	弥生土器 甕	西地区III区 湿地状埋藏	16.4 (7.7)	密 1～3mm以下の白色砂粒多く含む	にぶい 黄 ～にぶい 赤褐 ～にぶい 赤褐	ナデ	内外面接合 痕 外面黒斑
36	弥生土器 甕	西地区III区 湿地状埋藏	4.4 (16.3)	密 1～3mm以下の白色砂粒多く含む	にぶい 黄 ～黄灰 ～黄灰	ナデ 板ナデ	外面接合痕
37	弥生土器 甕	西地区III区 湿地状埋藏	16.3 15.8	粗 1.0～4.0mmの長石、1.0～3.0mm の石英含む	にぶい 黄 ～にぶい 黄	ハケ タタキ後ハケ	底部木葉痕
38	弥生土器 甕	西地区III区 湿地状埋藏	10.6 13.5	密 1～2mmの白色砂粒、くさり礫や 含む	にぶい 黄 ～黄 灰白	ハケ タタキ	内外面接合 痕、外面黒 斑
39	弥生土器 甕	西地区III区 湿地状埋藏	底4.9 (6.3)	密 0.5～3.0mmの長石、1.0～3.0mm の石英含む	にぶい 黄 ～黄 灰	板ナデ 板ナデ、タタキ後板ナデ	
40	弥生土器 高坏	西地区III区 湿地状埋藏	19.8 (12.4)	密 1～2mmの白色砂粒やや含む	にぶい 黄 ～黄 ～黄	ミガキ、ナデ、脚部：しぼり痕 ミガキ、ナデ	三方円形造 かし
41	弥生土器 高坏	西地区III区 湿地状埋藏	— (6.0)	密 2.0mm以下のくさり礫、0.5～4.0 mmの石英・長石、1.0mm以下の薬 母含む	にぶい 黄 ～にぶい 黄	脚部：しぼり痕 ハタカ	
42	須恵系 坏倉	西地区IV区 SD402	(10.0) (3.95)	密 1cmまでの長石含む	灰 灰	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
43	弥生土器 甕	西地区IV区 SD404	14.7 (24.38)	密 1.0～5.0mmの長石・石英、0.1～1.5 mmのくさり礫含む	灰白 灰白	ヘラケズリ、ナデ ヘラミガキ、ナデ	
44	弥生土器 甕	西地区IV区 SD404	底(10.65) (8.8)	密 0.5～3.0mmの長石、1.0～3.0mm のくさり礫、0.5～4.0mmの石英含 む	灰白 にぶい 黄	ナデか ヘラミガキ	
45	弥生土器 甕	西地区IV区 湿地状埋藏	(13.4) (6.75)	密 3mm以下の長石・石英・角閃石・ 金雲母含む	灰黄褐 灰黄褐	ナデ 口縁部：タタキ、割部：ヘラミ ガキ	
46	弥生土器 甕	西地区IV区 湿地状埋藏	底5.3 (4.0)	密 1～3mm大の石英、0.1～4.0mm大 角閃石含む	にぶい 黄 ～にぶい 黄 褐	ナデ ナデ	
47	弥生土器 甕	西地区IV区 湿地状埋藏	底4.6 (4.6)	密 1～3mm大の長石・石英多く含む	褐灰 明褐灰	ヘラケズリ タタキ	
49	弥生土器 甕	西地区V区 SK501	19.3 35.0	密 1～2mmの白色砂粒をやや含む	灰白～ にぶい 黄 灰白～ にぶい 黄	口縁部：波状文、扇形文、割部： ナデ、ハケ 口縁部：西鑑文、棒状浮文、頸 部：ハケ、断面三角形突帯、割 部：直線文、波状文(輪に扇形 文)、ハケ、ミガキ	底部穿孔
50	縄文土器 钵鉢	西地区V区 遺構面	— (4.1)	粗 4mm以下の長石・石英多く含む	灰黄 暗灰黄	ナデ、ヘラミガキ、貼り付け突 帯 ナデ	
51	弥生土器 甕	東地区II区 SD701	底6.6 (17.4)	密 1～4mm大の石英・長石、1mm大 金雲母含む	にぶい 黄 ～にぶい 黄	ナデ、ヘラミガキ 頸部：沈線、ハケ、ハケ後ミガ キ	外面黒斑
54	弥生土器 甕	東地区V区 SK1003	底6.5 (17.8)	密 1～3mm大の石英・長石、0.5mm 程度の薬母含む	にぶい 黄 ～にぶい 黄	ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ ヘラミガキ	外面黒斑

第2章 第10次調査

第10次調査は、第9次調査で設定した西地区、東地区のうち、西地区Ⅵ区、東地区Ⅳ区・Ⅵ区・Ⅶ区を調査した。



図53 第10次調査 調査区位置図 (S = 1/5000)

第1節 基本層序

現地表面の標高は約2.0 mで、直下には盛土、部分的に中・近世耕土が堆積し、その上面で遺構面を確認した。(第1遺構面)さらにその下層では遺構面となる浜堤面や湿地状堆積の上面を検出した。(第1または第2遺構面)

中・近世耕土上面の標高は西地区Ⅵ区で約1.5 m、東地区Ⅵ～Ⅶ区で0.6～1.1 mで、浜堤面は、西地区Ⅵ区で約1.3 m、東地区Ⅳ区で1.1～1.2 m、Ⅵ～Ⅶ区で0.5～0.9 mである。東地区の浜堤は黄灰～白色系の細～中砂の風成堆積で形成され、東に向けて標高は低くなる。

第2節 調査の成果

(1) 西地区Ⅵ区

調査区は南北約10 m、東西約7 mの範囲で、第7・8次調査におけるB47調査区の西側、第9次調査における西地区Ⅱ区の南側に隣接する。また調査区内には、第7次調査においてB47西調査区としてすでに調査されている南北1.0 m×東西3.4 mの区画が存在する。遺構面は3面確認された。

1. 第1遺構面

黄茶色砂質土層上面で検出された遺構面で、標高約1.5 mである。遺構は溝10条、ピット7基を検出した。出土遺物が少なく時期は断定できないが、遺構面上や遺構埋土から奈良時代から中世の土器が出土している。

調査区全面で確認したSD 101～110は東西に並走しながら南北方向に延びることから、鋤溝と考えられる。第7次調査においても同様の耕作痕が検出されている。SD 110から管状土錘が出土している。

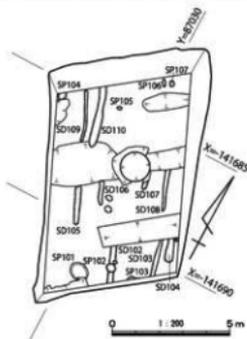


図54 西地区Ⅵ区 第1遺構面平面図



図55 西地区Ⅵ区 SD 110 出土遺物

2. 第2遺構面

灰色砂質土（黒灰色砂質土混じり）上面で検出された遺構面である。井戸1基とピット5基を検出した。

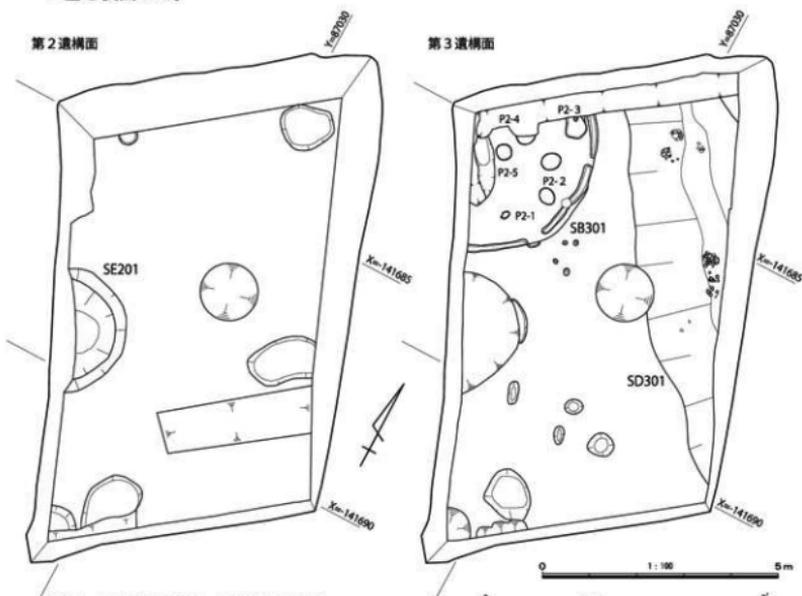


図56 西地区VI区 第2・3遺構面平面図

SE 201

調査区の西側で検出した、直径約1.3m、深さ約85cmの平面半円状の井戸である。今回の調査で検出したのは東側の1/2と考えられるもので、西側は調査区の外側に拡がっている。深さ50cmで段差を設け、さらに直径約80cmの円形状に掘り下げられている。標高0.5mほどで湧水層である最下層の灰色～黄茶色細砂に達し、底部に水が溜まるようになっていた。井戸枠材を設けた痕跡が見られないことから、素掘りの井戸と考えられる。遺物は土師器羽釜片が出土しており、平安時代後期頃に埋没したものと考えられる。

第2遺構面遺物包含層出土遺物

第2遺構面遺物包含層からは弥生時代後期の土器、土師器、古墳時代後期から平安時代前期の須恵器の坏身、蓋、灰釉陶器、瓦、須恵質の飯蛸壺が出土している。そのうち57～61を図示した。

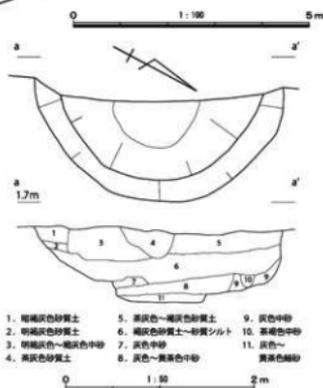


図57 西地区VI区 SE 201 平・断面図

- | | | |
|--------------|-----------------|--------------|
| 1. 暗褐色砂質土 | 5. 黄灰色～黒灰色砂質土 | 9. 灰色中砂 |
| 2. 暗褐色砂質土 | 6. 暗褐色砂質土～砂質シルト | 10. 茶褐色中砂 |
| 3. 暗褐色～黒灰色中砂 | 7. 灰色中砂 | 11. 灰色～黄茶色細砂 |
| 4. 黄灰色砂質土 | 8. 灰色～黄茶色中砂 | |

57は須恵器の坏で、7世紀後半に属する。58は石斧である。幅5.8cm、厚さ3.96cm、残存長10.0cmを測る。刃部に使用痕が確認できる。材質は砂岩で、表面は丁寧に研磨されている。59～61は管状土錘である。

出土している遺物の時期に幅があるが、遺物の出土状況から、第2遺構面は概ね7世紀後半から8世紀後半に属すると考えらえる。

3. 第3遺構面

褐灰色砂質土（橙色砂質土混じり）上面で検出された遺構面である。遺構は、方形周溝墓の周溝、竪穴建物1棟、土坑1基、溝1条、ピット3基を確認した。周溝に関しては北青木遺跡第9次調査西地区Ⅱ区の項目で報告している。

S B 301

調査区の北西部で検出した、平面形が円形を呈する竪穴建物である。今回検出できたのは建物の南東1/3ほどで、残りは調査区の北西へと続いている。復元径は直径約5.0m、深さは約15cmを測る。埋土直下で、貼床と考えられる明褐灰色砂質土（灰色シルト混じり）層が検出された。貼床上面の高さは標高約1.2mで、この上面において直径約20cmの柱穴を3基検出した。また、幅約19cm、深さ1～5cmを測る一部が途切れた周壁溝が巡る。北西部では一部炭が広がる面があり、その上面から銅銭が1点出土している。

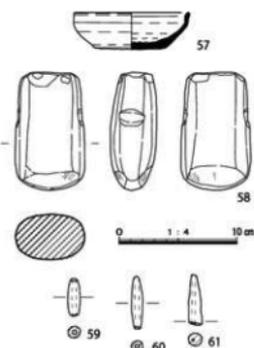


図58 西地区Ⅵ区
第2遺構面遺物包含層出土遺物

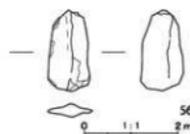


図59 西地区Ⅵ区
S B 301出土遺物

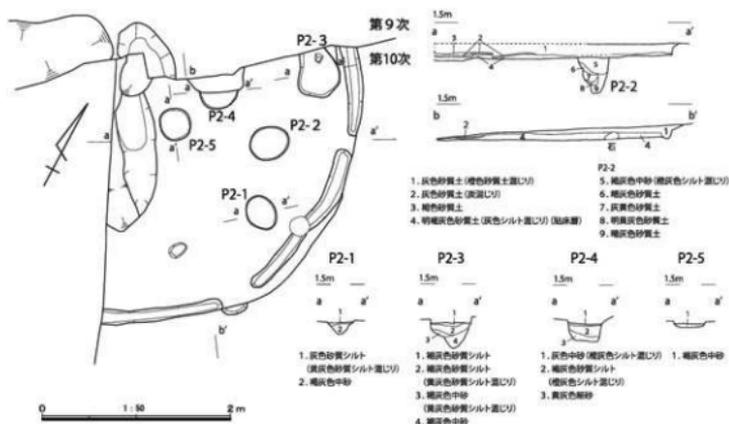


図60 西地区Ⅵ区 S B 301 平・断面図

銅鏃は、長さ1.68cm、幅0.86cm、重さ2.7gを測る。鏃身部の破片で、表面が摩滅しているが、両面に鏃と考えられる稜が認められる。その他、土器が3点出土しているが、いずれも底部片であり、時期を決め難い。方形周溝墓の周溝と同一面で検出したことから、弥生時代後期頃に関する可能性がある。

貼床層を除去した底面の高さは標高約1.1mで、平面形が円形を呈する直径20～40cmの柱穴を5基（P2-1～5）検出しており、うちP2-2、P2-3は柱根が残る。P2-2は直径14cm、深さ38cm、P2-3は直径22cm、深さ32cmを測る。以上から、建て替えが行われた可能性がある。

北側に接する第9次調査の西地区Ⅰ・Ⅱ区においては浜堤上面まで削平されていたため、竪穴建物としては認識されていない。今回の調査成果を考え合わせると、西地区Ⅱ区で検出されたビットに建物の柱穴が存在する可能性が考えられる。

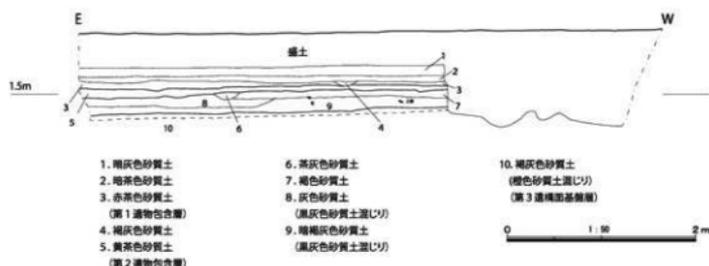


図 61 西地区Ⅵ区 南壁面断面図

(2) 東地区Ⅳ区

東地区の中央部に位置する長さ52mの調査区である。遺構面は幅0.5～1mの細長い島状のみ残存していた。浜堤面で検出された遺構は、溝1条、落ち込み1基、ビット14基である。遺構から出土した遺物は多くないが、遺構面の時期は概ね8世紀後半から10世紀に属すると考えられる。

S D 901

調査区西部で検出した、幅1.48m、深さ14cmの浅い溝である。遺物は出土していない。南側の第8次調査B56-A区のS D 101に連続すると考えられる。



図 62 東地区Ⅳ区 S D 901 平・断面図

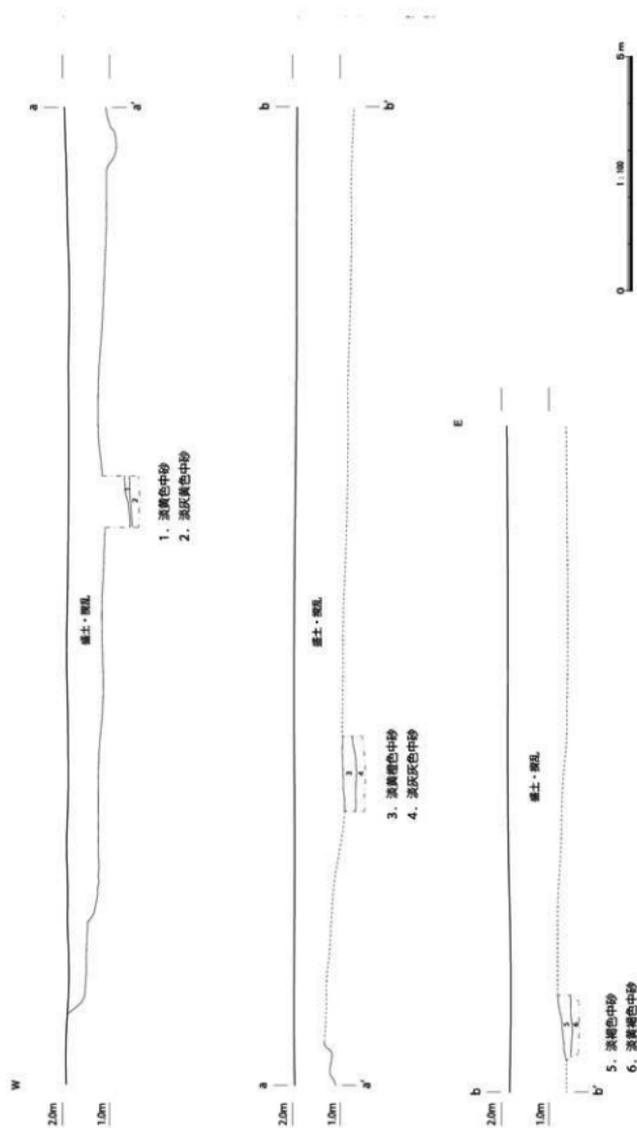


图 64 夷地区IV区北壁面断面图

(3) 東地区VI区

第9次調査V区の東隣に位置する、長さ約30mの調査区である。浜堤面で、土坑1基、溝1条、落ち込み1基、ピット3基を検出した。

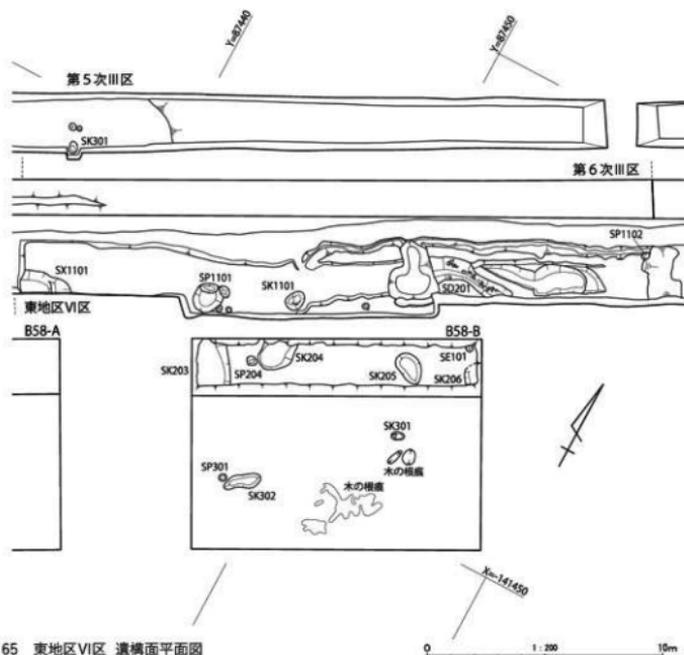


図65 東地区VI区 遺構面平面図

S D 201

調査区中央部で検出した、北西から南東に向かって調査区を縦断する検出長約6.5m、幅約1.5mの流路の一部と考えられる溝である。東端および上面を攪乱で削平されている。断面はU字状を呈し、深さは約60cmを測る。堆積状況から数時期に分かれて堆積したと考えられ、最終堆積では、北側肩部に沿って多数の拳大の石が、また、遺構の西端底から弥生時代後期に属する、甕または壺の底部片が出土している。

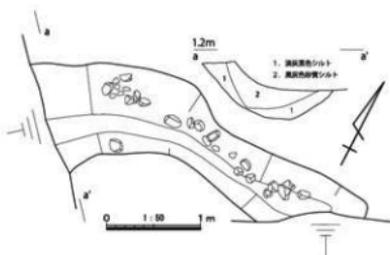


図66 東地区VI区 S D 201 平・断面図

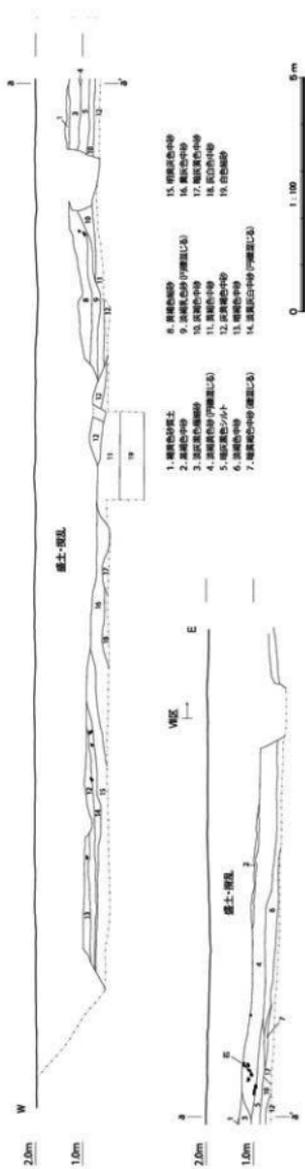


图 67 奥地区VI区 北壁面断面图

S K 1101

調査区中央部南側で検出した土坑である。平面形は楕円形で、断面は上部が皿状、下部がゆるい逆台形を呈する。長辺90cm、短辺65cm、深さ約70cmを測る。

上層から口縁を南に向けた横倒しの状態で、弥生時代中期の壺(62)が出土している。摩滅が著しく、胴部内外面の調整は不明であるが、口縁端部外面にタテ方向の刻目を施している。壺の内部に堆積していた土壌には、拳大の礫が複数含まれていた。

S P 1101

調査区の南西部、S K 1101の西隣で検出したピットである。平面形は円形、断面形は緩い逆台形を呈し、直径約1.2m、深さ約0.4mを測る。埋土から土師器、須恵器の細片が出土している。

S P 1102

調査区の東部で検出した直径約0.7m、深さ約0.14mを測るピットである。北東部3/4を攪乱により削平されている。埋土から須恵器坏Bが出土しており、7世紀後半に属する。

S X 1101

調査区南西端で検出した落ち込みである。平面は楕円形を呈するが、検出できたのは遺構の北東の縁のみである。残りは調査区の南西へと続くが、西隣は攪乱で削平されている。

検出長は長辺2.2m、短辺0.6mを測る。断面はV字状を呈し、深さ約0.3mを測る。遺物包含層出土遺物

遺構面検出中に、土師器や須恵器の細片が出土している。それらのうち、64を図示した。64は遺構面検出中に出土した須恵器の坏である。

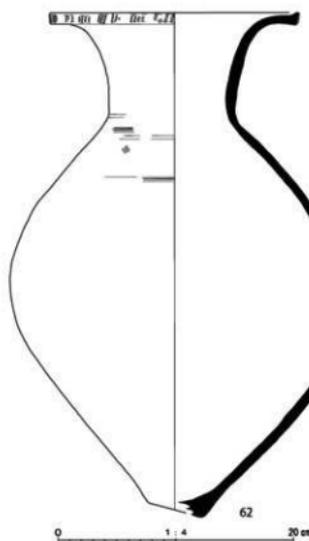


図 68 東地区VI区 S K 1101 出土遺物

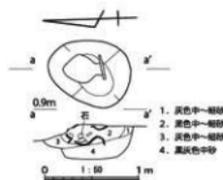


図 69 東地区VI区 S K 1101 平・断面図

図 70 東地区VI区
S P 1102 出土遺物図 71 東地区VI区 遺物包含層
出土遺物

(4) 東地区VII区

第10次調査地の東端、および北青木遺跡の東側縁辺部に位置する、長さ約50mの調査区である。VI区から続く浜堤は中央部で東に向かって下がっており、標高約0.4m以下は海成堆積と考えられる粘土の堆積が続く。調査区の一部で第1遺構面を、全面で第2遺構面を確認した。

1. 第1遺構面

調査区内で、部分的に確認できた遺構面である。土坑1基、南北方向の溝数条を検出した。土師器、須恵器、遺構面からは陶器などが出土しているが、いずれも細片で時期は不明瞭である。周辺の調査区の成果から、中・近世頃の遺構面と考えられる。

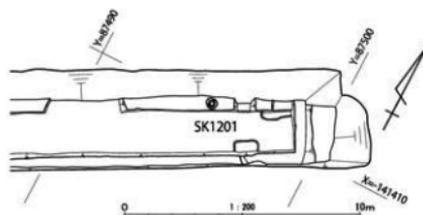


図72 東地区VII区 第1遺構面平面図

SK1201

調査区の東部で検出した土坑である。瓦質土器の羽釜が倒立した状態で出土している。近世のものと考えられる。



図73 東地区VII区 SK1201 平・断面図

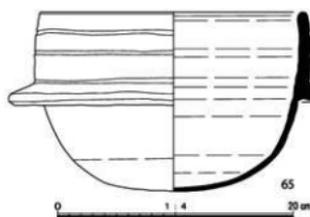


図74 東地区VII区 SK1201 出土遺物

2. 第2遺構面

土坑2基、溝4条、落ち込み2基、流路1条、ピット6基を検出している。

SD201

調査区内を南北に縦断する長さ2.47m、幅1.1m、深さ40cmを測る溝である。溝の北部と南部から弥生土器の壺と甕が出土している。

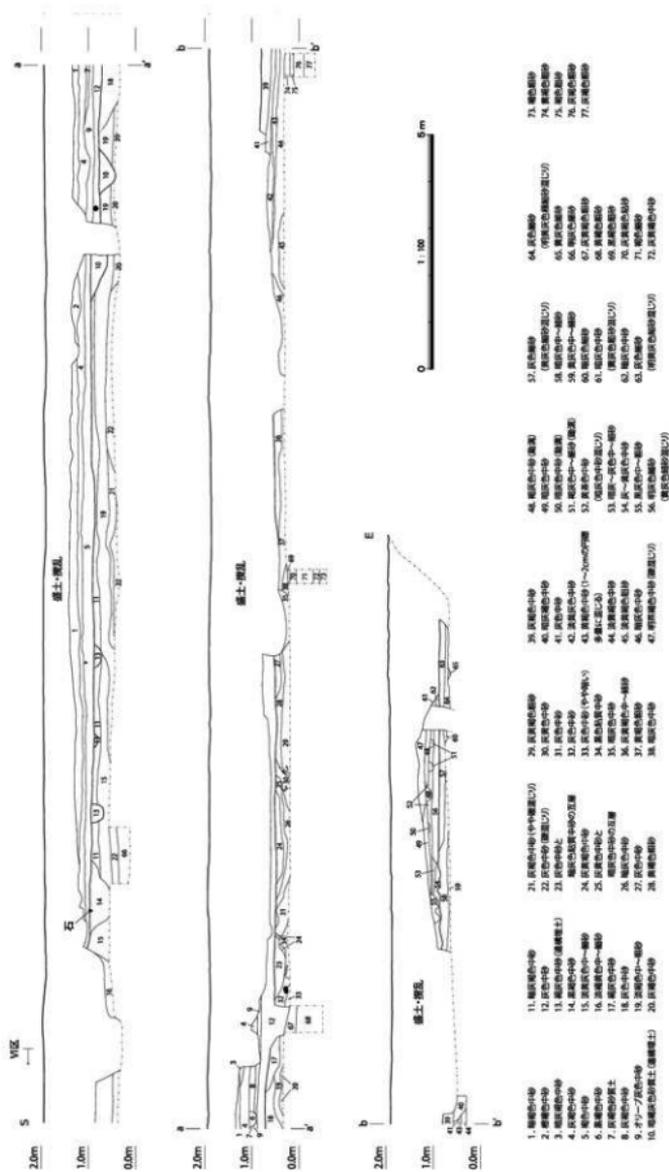


図 76 東地区VII区北壁面断面図

66～68は壺である。66は外面頸部から胴部最大径付近にかけてハケを、底部から胴部最大径にかけてタテ方向のミガキを施す。67は溝の北部で、拳大の礫の下から割れた状態で出土している。内面の胴部最大径付近にナデを、胴部最大径から下半にヘラナデを施す。口縁端部上面に刻目が施され、端面に円形浮文が貼り付けられている。頸部にはヘラミガキを施し、頸部と胴部の境界には指頭圧痕突帯を施す。胴部上半から最大径付近にかけて8条の直線文が3帯と、ヘラミガキ後に斜格子文を施している。胴部最大径付近

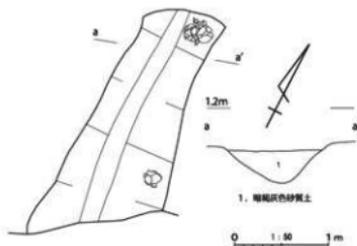


図77 東地区VII区 S D 201 平・断面図



写真1 東地区VII区
S D 201 土器出土状況

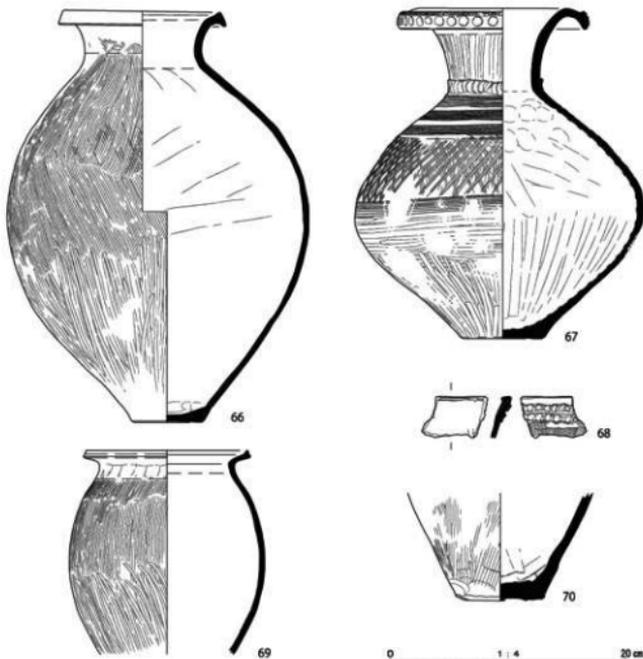


図78 東地区VII区 S D 201 出土遺物

は、8条の直線文と横方向のヘラミガキ、およびその下半にタテ方向のヘラミガキを施す。および横方向のヘラミガキが、底部に縦方向のヘラミガキを施している。68は口縁部片で、ヘラ状工具による圧痕をもつ突帯を2条貼り付け、その下位にハケを施す。

69・70は甕である。胴部外面の上半にはハケを、下半はハケの後、タテ方向のミガキを施している。70は底部片で、外面にハケを施す。

以上の遺物は弥生時代中期に属しており、遺物の出土状況や、南側の調査区である第7・8次調査 B59-A 区、B-59 B 区で弥生時代中期後半の方形周溝墓が確認されていることから、これらの周溝墓の周溝である可能性がある。

SD 203

調査区東部で検出した流路である。検出したのは、北側から流れ込み、調査区内で東西方向に蛇行して南側へと流れる部分と考えられる。南側は調査区外に続いているため、流路の幅は不明である。深さは約0.5mである。南西角では、護岸とみられる拳大から人頭大の集石を確認した。また流路中では、後述するしがらみ状遺構（SR 201）を検出した。

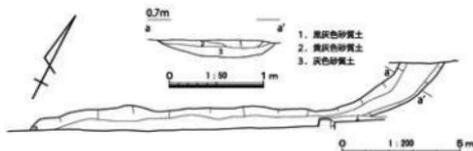


図79 東地区VII区 SD 203 平・断面図

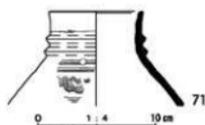


図80 東地区VII区

SD 203 出土遺物

遺物は、流路埋土から近世の瓦、陶器碗、中世土師器、須恵器、白磁、溝の北東端や集石護岸から、弥生土師の小片が出土している。それらのうち71を図示した。71は弥生土師の壺で、頸部外面に2条の貼付突帯文と、その下位に、上から2条の直線文、波状文、直線文が認められる。弥生時代中期に属する。

遺物の出土状況から、中世から近世までの流路と考えられる。

SD 204

調査区中央部で検出した、ゆるく湾曲する溝で、南北長2.8m、幅1.25m、深さ27cmを測る。埋土から弥生土師の壺や甕が出土している。

72と73は壺である。72は口縁部外面に3条の凹線文が認められ、頸部から胴部最大径までハケを、胴部下半にはヘラミガキを、胴部内面にヘラナデを施す。73は長頸壺で、摩滅しているが、胴部最大径付近にヨコ方向、下半にタテ方向のミガキを施す。

74と75は甕で、接合しないが同一個体と考えられる。頸部外面にハケの後に直線文を、胴部外面にミガキを施している。

いずれも弥生時代中期に属すると考えられる。

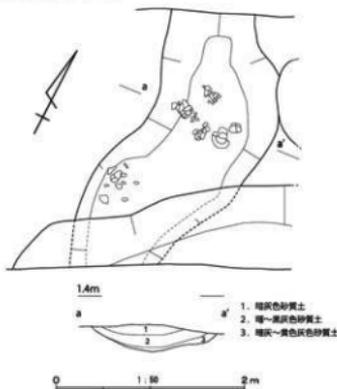


図81 東地区VII区 SD 204 平・断面図

S K 201

調査区の西部で検出した、長辺約1.2 m、短辺約1.0 m、深さは約0.9 mを測る土坑である。平面形は楕円形、断面形は、緩い逆台形を呈する拳大の石とともに弥生土器の壺などが、口縁を南に向け、倒れた状態で出土している。

76は弥生土器の壺である。胴部内面に板ナデを施す。外面は、頸部から底部までハケを施した後、頸部に10条、胴部最大径付近に6条の沈線を巡らす。77は小型の壺である。胴部外面上半に、ヘラナデ後ミガキを、下半にハケ後ヘラミガキを施している。78は甕である。表面が摩滅しており、調整が明瞭でないが、ヘラミガキの痕跡が確認できる。

これらは弥生時代前期末頃に属すると考えられる。

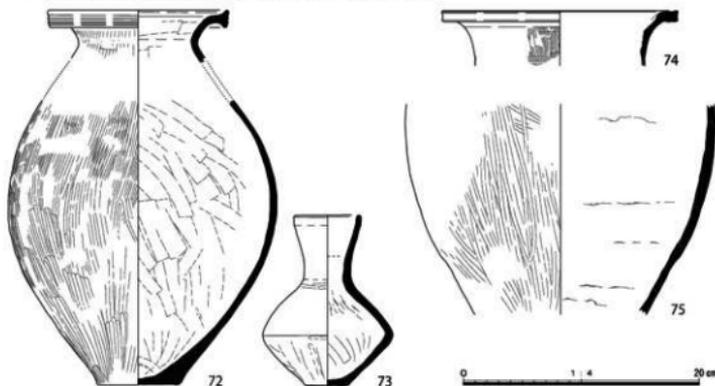


図 82 東地区VII区 S D 204 出土遺物

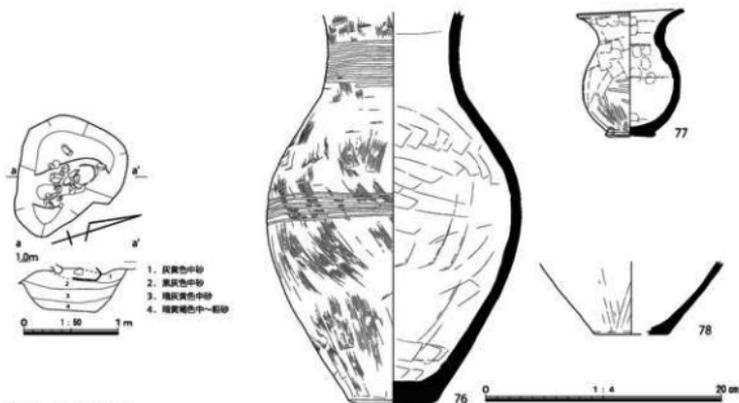


図 83 東地区VII区

S K 201 平・断面図

図 84 東地区VII区 S K 201 出土遺物

SR201

流路中に構築されているしがらみ状遺構である。北側を現代の埋設管の掘削で削平されているため、現状では東西約4m、南北約1.9mのコの字状に検出したが、全体の規模や形状は不明である。しがらみ状遺構は、20～30cm間隔で打ち込まれた長さ40～80cm、直径4～9cmの杭と、長さ約1m、直径2～4cmの丸木を横方向に束ねた横材で作られている。横材同士は編みこまれていないが、水流を制御する目的で構築されたと考えられるため、しがらみ状遺構とした。横材は、流路を横断する東辺部分では、千鳥配置で打ち込まれた杭の間に挟み込んで固定している。西辺部分も、大半は近世の流路で消滅しているが、同様の構造と考えられる。南辺では、一列に打ち込んだ杭と南側の流路斜面で横材を挟んで固定している。また、しがらみ状遺構の南辺裏込め埋土から土師器、須恵器、弥生土器の小片が出土している。

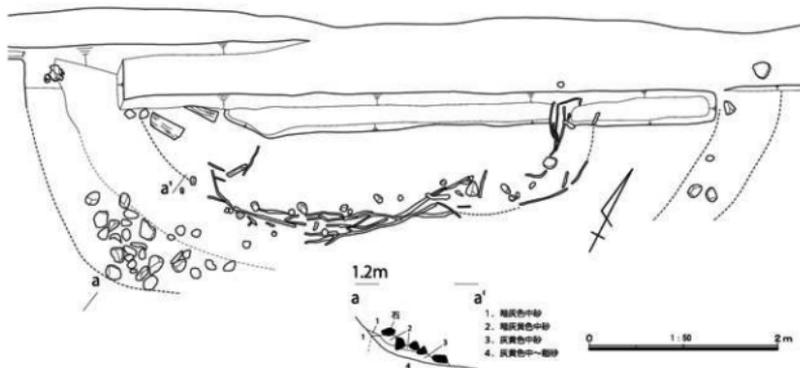


図85 東地区Ⅶ区 SR 201 平・断面図

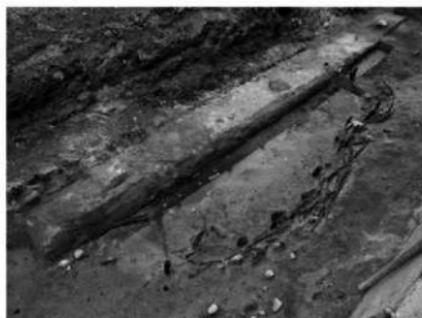


写真2 東地区Ⅶ区 SR 201 検出状況

その他、しがらみ状遺構の埋土から、弥生土器、土師器、陶器、磁器、円形板材が出土している。それらのうち、79～82を図86に、円形板材を図88 W1に図示した。

79、81、82は弥生土器で、79は壺である。頸部から胴部最大径付近にかけて、直線文と波状文を交互に巡らす。81は壺で、外面にヘラミガキを、82は甕で、内面にヘラナデ、外面にハケを施す。80は土師器の坏である。

流路の埋土から出土した遺物の時期を踏まえると、しがらみ状遺構は中世に設置され、近世には埋没していたと考えられる。

第2遺構面遺物包含層出土遺物

第1遺構面基盤層以下第2遺構面検出までの土層からは、83～92が出土している。

83～84は須恵器の鉢で、83は口縁端部に丸みをもつ。84は鉢である。

85は土師器の鍋で、外面にタタキを施す。15世紀に属する。

86は黒色土器A類である。底部外面にヘラ描きの刺突文が確認できる。

87は布留式併行期の甕である。

88～90は弥生土器である。88は壺の胴部片で、直線文と扇形文を組み合わせた、疑似流水文を施す。弥生時代中期に属する。89、90は甕の底部と考えられる。90はハケ後ヘラナデを施す。

91は管状土錘、92は石製円盤と考えられる。

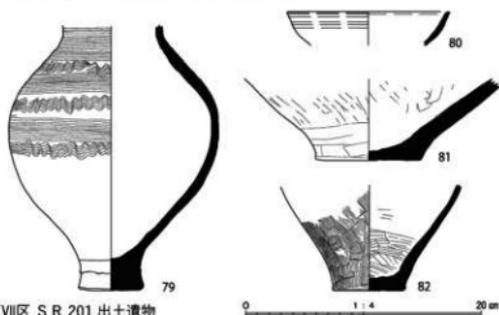


図86 東地区VII区 S R 201 出土遺物

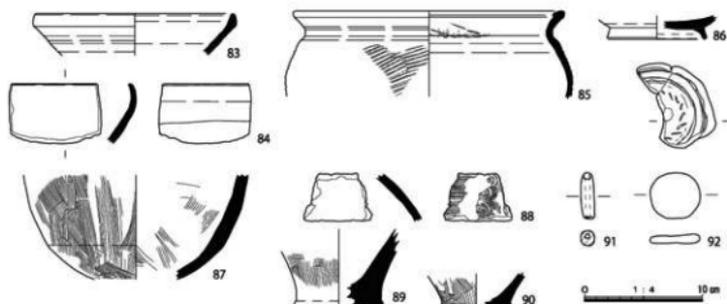


図87 東地区VII区 第2遺構面遺物包含層出土遺物

(5) 小結

第10次調査では、西地区Ⅵ区の6×10mの範囲と、東地区Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ区の約130m分の範囲を調査した。

西地区のⅥ区では、第7・8次調査で確認されていた方形周溝墓の西側周溝SD301をはじめ、竪穴建物SB301を確認することができた。SD301については、本書の第1章に掲載している。

竪穴建物は隣接する調査地で確認されておらず、今回が初めての検出となった。土器が3点出土しているが、いずれも底部片であり正確な時期は不明である。方形周溝墓の周溝と同一面で検出したことから、弥生時代後期頃に属する可能性がある。また、埋土の中で炭が広がる部分があり、その上面から銅鏝が1点出土している。当調査区は北青木遺跡の西端部に位置するが、建物を検出したことから、集落域が西地区Ⅵ区から北西側に広がる可能性がある。周溝墓と竪穴建物との関連については、今後の検討課題である。

東地区Ⅳ区は大きく攪乱を受けていたが、西地区Ⅴ区から続く安定した浜堤を確認した。浜堤面では多くの遺構を確認したが、遺構内から明確な時期がわかる遺物は出土しなかった。遺構検出中に出土した土器から、遺構面の時期は、概ね8世紀後半から10世紀に属すると考えられる。

東地区Ⅰ区からⅣ区にかけては、第7・8次調査においても奈良時代後半から平安時代頃に属する遺構や遺物が多数確認されており、当該時期における北青木遺跡の様相の一端がうかがえる。

東地区Ⅵ区では、弥生時代中期の甕が出土した土坑SK1101を、東地区Ⅶ区では、弥生時代前期末頃の壺などが出土した土坑SK201、弥生時代中期の壺と甕が出土したSD201を確認した。SD201は遺物の出土状況から、第7・8次調査で確認された弥生時代中期後半の方形周溝墓の周溝の可能性もある。その他、弥生時代中期の遺物が出土したSD204、中世から近世の流路の痕跡と考えられるSD203、中世から近世のしがらみ状遺構であるSR201などを検出することができた。

東地区Ⅵ・Ⅶ区は、既往調査から、弥生時代前期から中期には祭祀・葬送空間が広がり、古代から中世には生業域、また水際祭祀の空間となるエリアと推定されており、今回の調査結果も、それらを追認する結果となった。

北青木遺跡を東西に横断する調査によって、遺跡内の堆積状況を連続して確認できた。また、これまでの調査によって確認されてきた集落や祭祀遺構、墓域などの遺構分布をはじめ、浜堤や潮汐などの自然地形や、これらを利用し制御するための護岸やしがらみ状遺構など、遺跡をめぐる人々の営みや景観などについてより明らかにすることができたものと言えよう。

表8 北青木遺跡第10次調査出土遺物観察表(1) ()は復元値、〔 〕は残存値、底径のみの場合は底径を示す。

番号	器種	地区遺構名	法量 口径 器高	胎土	色調 内面 外面	調整 内面 外面	備考
57	須恵器 坏身	西地区VII区 第2遺構面 遺物包含層	9.65 3.15	密	灰白 灰白	回転ナデ 回転ナデ	
62	赤生土器 壺	東地区VII区 SK1101	20.7 43.2	密 5mm大までの白色砂粒、4.5mm大までのくさり礫、1mm大までの石英を多く含み、金雲母の微細粒を含む	淡褐色 淡黄灰色	摩滅 口縁部：タテ方向の割目、胴部：ハケか	外面胴部下 黒斑
63	須恵器 坏	東地区VII区 SP1102	底 (8.3) 〔3.3〕	密 2mm以下の長石含む	灰 灰	回転ナデ 回転ナデ	
64	須恵器 坏	東地区VII区 第1遺構面 遺物包含層	底 (6.8) 〔1.2〕	密 0.5～3mmの長石含む	青灰 青灰	回転ナデ、底部へラ切り 回転ナデ	
65	羽釜	東地区VII区 SK1201	22.5 11.5	密 1mm大の石英・長石含む	黒 黒	回転ナデ 回転ナデ	
66	赤生土器 壺	東地区VII区 SD201	(13.1) 5.7	粗 2mm以下の長石・石英や多く含む	灰白 灰白	胴部：板ナデ ナデ、胴部：上半ハケ、下半ミガキ	
67	赤生土器 壺	東地区VII区 SD201	(15.4) 28.2	密 2mm以下の長石、6mm以下のくさり礫含む	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	胴部：上半ナデ、下半へラナデ 口縁部：割目、内面浮文、頸部：へラミガキ、下端に押除突帯文、胴部：直線文、へラミガキ後斜格子文、下部へラミガキ、底部：へラミガキ後ナデ	
68	赤生土器 壺	東地区VII区 SD201	— 〔3.5〕	密 1～2mm大の石英、0.1～1mmの雲母含む	にぶい褐 明赤褐	ナデ、口縁部：指頭圧痕突帯 ナデ、へラクズリ	
69	赤生土器 壺	東地区VII区 SD201	(13.6) 〔17.4〕	密 1～2mmの白色砂粒・くさり礫や含む	灰青褐 にぶい褐	ナデ 口縁部：ナデ、胴部：上半ハケ、下半へラ後ミガキ	
70	赤生土器 壺	東地区VII区 SD201	底7.5 〔9.2〕	粗 0.5～2.0mmの長石、0.5mm以下の雲母含む	にぶい褐 にぶい橙	胴部：ナデ、底部：へラナデ後ナデ ハケ、ナデ	
71	赤生土器 壺	東地区VII区 SD203	(7.9) 〔8.1〕	粗 0.1～2.0mmの石英を含む、0.1～5.0mmのくさり礫を多く含む	浅黄褐色 浅黄褐色	ナデ ナデ、貼付突帯文、直線文、く波状文	
72	赤生土器 壺	東地区VII区 SD204	(15.2) 〔32.0〕	密 0.1～4.0mmの石英・長石、1.0～7.0mmのくさり礫、1.0mm大の雲母を含む	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	口縁～胴部：へラナデ 口縁部：凹線文、頸部：ハケ、胴部：上半ハケ、下半ミガキ	
73	赤生土器 壺	東地区VII区 SD204	5.35 14.6	密 1.5mm以下の長石・石英・くさり礫や多く含む	灰 灰黄	ナデ、胴部：上半しぼり目、下半へラナデ 頸部：へラミガキか、胴部：ミガキ	
74	赤生土器 壺	東地区VII区 SD204	(20.0) 〔4.7〕	密 1～3mmの長石・石英を多く、1～3mmのくさり礫を含む	にぶい褐 灰褐	ナデ ナデ、胴部：ハケ、直線文	
75	赤生土器 壺	東地区VII区 SD204	— 〔18.0〕	粗 7mm以下の長石・石英・くさり礫を多く、3mm以下のくさり礫を多く含む	明褐灰 にぶい褐	ナデ ミガキ	
76	赤生土器 壺	東地区VII区 SK201	底7.4 〔33.4〕	粗 1～3mmの長石・石英多く含む	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	胴部に10条・胴部最大径に6条の沈線、ハケ	
77	赤生土器 壺	東地区VII区 SK201	8.7 10.9	密 0.1～4.0mmの石英・長石、1.0mm大の雲母を含む	ナデ にぶい褐 明赤褐	ナデ、胴部：上半へラナデ後へラミガキ、下半ハケ後へラミガキ	胴部黒斑
78	赤生土器 壺	東地区VII区 SK201	底 (6.3) 〔6.3〕	密 3mm以下のくさり礫、3mm以下の長石、2mm以下の石英、1mm以下の角閃石含む	にぶい橙 にぶい橙	へラクズリか へラミガキか	
79	赤生土器 壺	東地区VII区 SR201	底5.4 〔22.6〕	粗 2～3mmの長石・石英多く含む	にぶい橙 明褐灰	ナデ 直線文、波状文、ハケ後ミガキ	
80	赤生土器 壺	東地区VII区 SR201	(13.7) 〔2.9〕	密 1mm以下の長石含む	にぶい橙 にぶい橙	ナデ ナデ	

表9 北青木遺跡第10次調査出土遺物観察表(2) ()は復元値、〔 〕は残存値、底径のみの場合は底径を示す。

番号	器種	地区遺構名	注 口徑 器高	胎土	色調 内面 外面	調整 内面 外面	備考
81	弥生土器 甕	東地区Ⅶ区 SR201	底 9.0 (7.0)	粗 2～4mmの長石・石英多く、2 mm以下のくさり礫含む	灰黄褐色 にぶい體	ヘラナゲ ヘラミガキ、ナゲ	
82	弥生土器 甕	東地区Ⅶ区 SR201	底 (6.2) (9.1)	密 1～5mmの長石、1～2mmの石 英を含む	灰白 にぶい體	ナゲ、ヘラナゲ ハケ	胴部黒斑
83	須恵器 鉢	東地区Ⅶ区 第2遺構面 遺物包含層	(16.6) (3.65)	1mmまでの石英・長石含む	灰 灰	回転ナゲ 回転ナゲ	口縁部外面 自然釉付着
84	須恵器 鉄鉢	東地区Ⅶ区 第2遺構面 遺物包含層	— (5.1)	密 2mm以下の石英・長石含む	暗青灰 灰	回転ナゲ 回転ナゲ	
85	土師器 甕	東地区Ⅶ区 第2遺構面 遺物包含層	(22.35) (7.5)	密 1mm以下の長石・石英含む	橙 體	ナゲ タタキ	
86	土師器 黒色土器 A型 杯	東地区Ⅶ区 第2遺構面 遺物包含	底 (8.1) (2.0)	密 1mm以下の長石、0.5mm以下の石 英・くさり礫含む	暗灰 にぶい黄體	ナゲ ナゲ、刺突文か、貼り付 け高台	
87	土師器 甕	東地区Ⅶ区 第2遺構面 遺物包含	— (8.9)	密 1～3mm次の石英・長石含む 1mm次の金雲母含む	にぶい黄體 灰黄褐色	ハケ ハケ	
88	弥生土器 甕	東地区Ⅶ区 第2遺構面 遺物包含	— (4.0)	粗 0.5～2.0mmの長石、0.5mm以下 の雲母含む	明褐色 明褐色	ナゲ 疑似流水文	
89	弥生土器 甕か	東地区Ⅶ区 第2遺構面 遺物包含	底 (6.8) (6.3)	密 0.1～3mmの長石、0.5～4.0mm のくさり礫含む	灰白 にぶい體	ナゲか ハケ	
90	弥生土器 甕か	東地区Ⅶ区 第2遺構面 遺物包含	底 (5.9) (2.9)	粗 0.5～2mmの石英・長石、0.5～ 3mmのくさり礫含む	にぶい黄體 にぶい黄體	ナゲか ハケ後ヘラナゲ、ハケ	

第3章 北青木遺跡出土木製品

北青木遺跡第9・10次調査では、西III区やIV区の湿地部、東V区やVII区の流路内を中心に木質遺物が出土した。大半は自然木や流路にともなう杭等の土木材である。これらのうち木製品4点を図示した。

W1は平面円形に加工された重厚な板材で、一方の面が黒色化していることから漆が塗布されていた可能性がある。樹種はヒノキ科である。W2も同じく平面円形に加工された板材である。容器等の蓋や底板の可能性が考えられるが多材との結合の痕跡がなく詳細は不明である。樹種はモミ属である。W3・W4は直刀の鞘である。ヒノキの板目材を削り出したもので、外面をヤリガンナで丁寧に面取りし、端部をやや薄く仕上げている。内面は刀身の形状に合わせて凹部が作出されている。2枚が合わさった状態で出土したが、装具や結合の痕跡は確認できなかった。仮に鞘として実装されたならば、反復的な刀身の抜き差しにより内面凹部の工具痕が摩滅すると予想されるが、明瞭に稜を残す箇所も観察されることから、非実用品もしくは未成品等の可能性も考えておきたい。西IV区の湿地部から出土しており、共伴遺物は弥生時代末～古墳時代後期の時期幅をもつ。

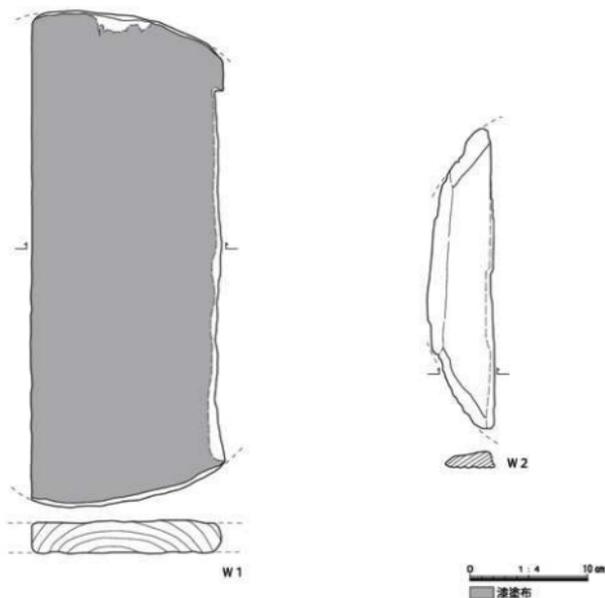


図88 北青木遺跡出土木製品（1）

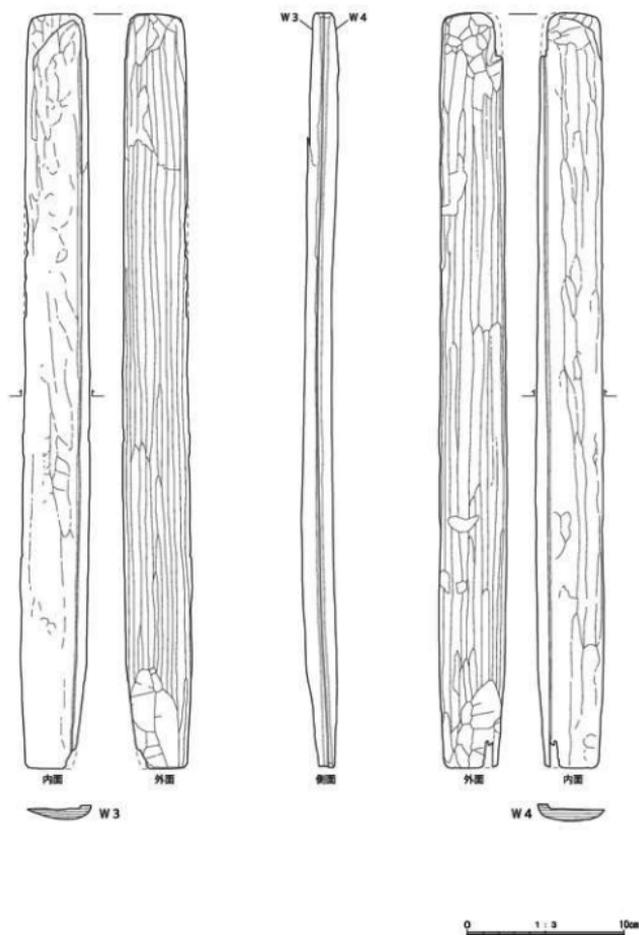


図 89 北青木遺跡出土木製品 (2)

第4章 北青木遺跡第9次及び第10次調査で出土した木質遺物の樹種

吉川純子（古代の森研究会）

1. はじめに

北青木遺跡は神戸市東灘区に立地し、弥生時代の遺構とともに木質遺物が発見されたことから当時の木材利用状況を調査する目的でこれら木製品の樹種同定をおこなった。

2. 同定方法

分析に充てた種類は、曲物、鞘など合計5点である。出土木製品からはステンレス剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の3方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

3. 同定結果及び考察

北青木遺跡第9次及び第10次調査で出土した木製品の樹種同定結果を表1に示す。出土した樹種は、モミ属、ヒノキ、ヒノキ科の計3分類群であった。

表10 北青木遺跡第9・10次調査出土木製品樹種一覧表

調査名	番号	調査別のサンプル No.	遺物名		地区名	遺構名	樹種	R番号
			分類群	器種				
北青木遺跡第9次	W 2	1	容器	曲物底板 または蓋板	西地区Ⅱ区	SP201	モミ属	148
	W 3	2	武器	鞘	西地区Ⅳ区	湿地状堆積最下層	ヒノキ	214-1
		3	土木材	杭	東地区Ⅴ区	河道	モミ属	215
	W 4	4	武器	鞘	西地区Ⅳ区	湿地状堆積最下層	ヒノキ	214-2
北青木遺跡第10次	W 1	1	用途不明品	円形板材	東地区Ⅶ区	SR201	ヒノキ科	250

樹種別ではモミ属とヒノキが2点ずつと同数で、ヒノキ科が1点であった。鞘は2点ともヒノキで、モミ属は容器と杭に使われていた。今回は分析点数が少なかったことから樹種による利用頻度の違いなどは不明であるが、年輪が狭く均質なヒノキを細かい細工が必要な鞘に利用し、食事にモミ属を利用していたことがわかる。北青木遺跡第7次（株式会社古環境研究所 2014）、第8次（黒沼 2018）でも木製品の樹種同定が実施されており、ヒノキの利用率が高い。

以下に同定された分類群の記載を行う。

モミ属 (*Abies*)：早材から晩材への移行は比較的緩やかな針葉樹で、放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個である。放射組織の上下縁に不規則な形状の放射柔細胞がありじゅず状末端壁を有する。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endl.)：早材から晩材への移行は急で晩材部が薄い針葉樹で晩材部に樹脂細胞が点在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型で1分野に2個存在する。なお、樹脂道を欠き晩材部に樹脂細胞が多いが腐食のため分野壁孔の形が確認できないものはヒノキ科とした。

引用文献

- 株式会社古環境研究所、2014。第2節 北青木遺跡における古環境分析Ⅱ。木製品の樹種同定。
北青木遺跡第7次調査埋蔵文化財発掘調査報告書。神戸市教育委員会文化財課。99-102
黒沼保子、2018。第3章 自然科学分析 第1節 北青木遺跡第8次調査出土の木質遺物の樹種同定。
北青木遺跡第7次調査埋蔵文化財発掘調査報告書。神戸市教育委員会文化財課。68-70

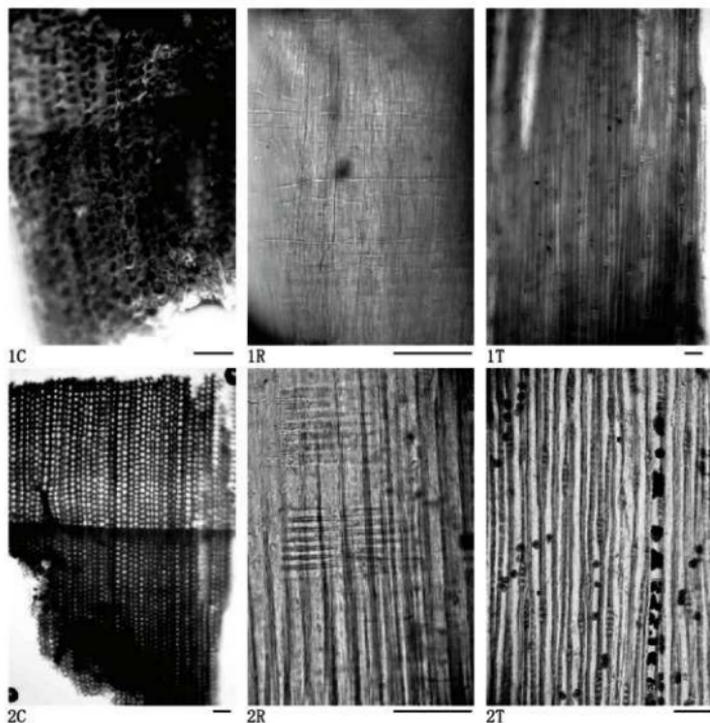


図90 北青木遺跡9次調査出土木材の顕微鏡写真

1. モミ属 (9次 No.3 杭) 2. ヒノキ (9次 No.4 鞘)

C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは0.1mm

第5章 まとめ

第1章から第4章において、2ヶ年にわたって調査を実施した北青木遺跡第9・10次調査の調査成果について述べてきた。ここでは、まず、両調査において検出した、特徴的な遺構、遺物について考察し、その後でそれらの検討結果をふまえてまとめを行いたい。

第1節 遺構について

方形周溝墓について

今回実施した調査では、第9次調査（一部第10次調査を含む）で2基、第10次調査で1基、計3基の方形周溝墓を検出した。南側に隣接する第7・8次調査においては、B46区で弥生時代後期の円形周溝墓1基、中期の方形周溝墓1基（以上第8次調査）、B47区、B47西調査区で中期の方形周溝墓1基、（第7・8次調査）、B48-B区で後期の方形周溝墓1基（第7・8次調査）、B50-C区で中期の方形周溝墓1基（第8次調査）、B51区では後期の円形周溝墓1基（第7次調査）、B53-B区で後期の円形周溝墓1基（第7次調査）、B54-C区で中期の方形周溝墓1基、B59-A区では中期の方形周溝墓2基（第7次調査）、B59-B区で後期の方形周溝墓1基（第7・8次調査）、がそれぞれ検出されている。このうち、B47区およびB59-B区で検出されたそれぞれの方形周溝墓では複数の主体部（木棺墓）が確認され、主体部の内部には木棺が非常に良好な遺存状態のものを含む木棺が検出されている。

今回検出した方形周溝墓のうち、第9次調査西地区Ⅱ区および第10次調査西地区Ⅶ区で検出したものは、上記のB47区で検出されたものと同一の周溝墓である。今回の調査では新たな主体部は検出されなかったが、東側周溝の北側延長部分と、北側周溝の一部、西側周溝の北側延長部分を検出し、南側の周溝の検出には至らなかったものの、周溝墓のおおよその規模が判明（東西周溝の内側上端間距離約9m、外側で約14.5m）したことの意味は大きい。さらに、検出状況からは、周溝の四隅が途切れる形態の周溝墓であることがほぼ確実となったことの意味も大きいといえる。周溝墓が築造された時期が弥生時代中期であり、最終的に埋没したのが弥生時代後期であることを追認する資料も得ることができた。

第9次調査西地区Ⅶ区で検出したS K 501は調査区北壁際でわずかな範囲で検出した土坑であるが、底部穿孔を施した中期後半の壺が出土していること等から、周溝墓に関連する遺構と考えられている。周溝の一部であるのか主体部等に該当するのかは不明であるが、ここでは当該調査区の北側に周溝墓（形状は不明）が展開する可能性を想定しておきたい。

そのほか第10次調査東地区Ⅶ区で検出したS D 201はB59-B区の北西側に位置し、方形周溝墓の周溝と考えられる。東地区Ⅵ区とB59-B区との間には未調査部分があり断定はできないものの、第7次調査で確認されている南側周溝との位置的な関係から、平面形が南北に長い長方形（東西周溝の内側上端間距離約8m、南北周溝内側上端間距離13m以上）を呈する方形周溝墓の西側周溝の一部に該当するものと考えられる。

以上のように、これまでに確認されていた方形周溝墓の規模・形状がより明確になってきたこと、また新たな方形周溝墓の存在が想定できるようになったことなど大きな成果を得た。阪神連立立体交差事業地内で実施された当遺跡の調査範囲内においては、これまでに確認されているものを含め、中期の方形周溝墓7基、形状不明の周溝墓1基、後期の方形周溝墓2基、円形周溝墓の2基の計12基の周溝墓が確認されたこととなった。

第2節 遺物について

銅鐵について

第10次調査西地区VI区S B 301から銅鐵が1点出土している。S B 301は出土遺物が少なく明確ではない部分もあるが、弥生時代後期頃の竪穴建物と考えられる。銅鐵(56)は摩耗が激しいものの両面に錆と考えられる稜が残り、当該時期の遺物と考えても大きな齟齬はないものと考えられる。出土状況については埋土中の中で炭が広がる部分があり、その上面から出土している。この炭の広がりについては検出した範囲も狭く、堆積した厚さもわずかであったため、その性格は不明である。よって炭と銅鐵との関連も不明といわざるを得ない。

これまでに神戸市内で銅鐵が検出した例は、17遺跡29例にのぼる。今回の出土状況と同様に弥生時代の竪穴建物から出土した例をあげると、篠原遺跡(S B 201:後期後半～庄内式併行期?)や玉津田中遺跡(S B 02、後期後半～庄内式併行期)の例がある。いずれも竪穴建物から複数出土しているが、実用品か祭祀に関わるものなのかといった性格については、断定できていない。今回の出土例もかなり摩耗が進んだ状況や周囲で検出された炭との関連が示唆的ではあるものややはり建物との関係等は不明と言わざるを得ない。市内各地で出土例を概観したとき、上記の篠原遺跡や玉津田中遺跡のほかにも単数での出土ながら竪穴建物からの出土が、森北町遺跡、日輪寺遺跡、新方遺跡、吉田南遺跡でも確認されている。いずれも埋土中からの出土で床面直上からの出土ではないため直ちに実用品との位置づけは困難であるが、住居を廃棄する際に意図的に埋められるなどの祭祀的な意味合いなどが今後実証されるようであれば意義深い。今後類例の増加とともにさらに検討を深めたい。(阿部)

表11 神戸市内銅鐵一覧

番号	遺跡名	調査回数	回次数	出土遺物	個体数	遺物番号	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	時期	文献
1	森北町	8次		掘乱内	1		-	-	-	後期	1
2		10次	8次	S B 04	1		-	-	-	後期	2
3	北青木	10次		S B 301	1	56	[1.68]	[0.86]	[2.7]	後期	3
4	西岡本	12次		遺物包含層	1		[1.15]	[0.5]	-		4
5	篠原	40次		S B 201	3	151	[3.61]	1.19	[1.61]	後期後半～庄内期?	5
6						152	[2.64]	[1.02]	[2.06]		
7						153	[1.75]	[1.12]	[1.32]		
8	日暮	1次		重機掘削中	1		[3.2]	[1.2]	-	古墳前期	6
9	熊内	2次		S A -1	1	214	[2.5]	[1.1]	-	後期	7
10	栗原所	4次		S K 03	1		-	-	-	後期?	8
11	毛原	13次		S D 02	1		-	-	-	後期	9
12	長田神社境内	1次		S D 02	1	26	[4.07]	[1.26]	[3.6]	庄内	10
13	松野	5次-1	7次	S E 203	1	243	[3.4]	[0.5]	-	後期	11
14	大蔵山			山頂部で採集	2		[4.70]	[1.66]	[6.5]	後期?	12
15							[1.87]	[0.58]	[1.05]	後期?	
16	東谷			採集	1		[3.35]	[1.3]	-	後期	13
17	日輪寺	14次		S B 01	1		-	-	-	後期～庄内期?	14
18					1		-	-	-		
19	小山	2次		15トレスD 01	1		-	-	-	後期	15
20	玉津田中	11次-2	平野4次	S D 309	1		-	-	-	後期	16
21				S D 603	1		-	-	-	後期後半	
22		18次	平野6次	12トレスX 02	1		-	-	-	庄内	17
23		30次	15次	S B 02	4	323	-	-	[1.12]	後期後半～庄内期初頭	18
24						324	-	-	[1.13]		
25						325	-	-	[1.42]		
26						327	-	-	[2.12]		
27	新方	5次	丁の坪	S B 04	1		3.8	1.2	-	II様式	19
28	吉田南	3次-2	9次	Iトレンチ	1		-	-	-	後期	20
29		5次	11次	1トレスB 04	1		-	-	-	後期	21

文献

- 1 丹治康明・富山直人「森北町遺跡」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994
- 2 丹治康明・須藤 聡「森北町遺跡」『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992
- 3 本書
- 4 荒田敏介「西岡本遺跡 第12次調査」『平成29年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2020
- 5 藤井太郎編『藤原遺跡第40次発掘調査報告書』神戸市 2021
- 6 谷正俊編『日露遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会 1989
- 7 浅岡実夫「神戸市中央区 船内遺跡 - 第2次調査 -」『六甲山麓遺跡調査会 1996』
- 8 富山直人ほか「菅野所遺跡 第4次調査」『平成25年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2016
- 9 宮本郁雄・地野素子「水原遺跡(内塚地区)」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
- 10 黒田恭正・佐伯二郎「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1990
- 11 口野寿太郎「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」神戸市教育委員会 2001
- 12 春正俊編「神戸市大蔵山の古墳ほか」『兵庫考古』第15号 兵庫考古研究会 1981
- 13 前田伸久「山田川流域の弥生遺跡～垂水区度々遺跡～」『神戸市立博物館』No.62 神戸市立博物館
- 14 阿部敏生「日輪寺遺跡 第14次調査」『平成22年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2013
- 15 齋木雄ほか「小山遺跡 第2次調査」『平成6年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1997
- 16 山口美正ほか「玉津田中遺跡(平野地区)」『平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1993
- 17 山本雅和ほか「玉津田中遺跡 第6次調査」『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1995
- 18 春正俊編「玉津田中遺跡発掘調査報告書 第8・10・12・15次調査」神戸市教育委員会 2000
- 19 丸山隆「新方遺跡発掘調査要 居住遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1984
- 20 神戸市教育委員会・吉田片山遺跡調査団「吉田南遺跡発掘説明会資料(V)」1979
- 21 神戸市教育委員会・吉田片山遺跡調査団「吉田南遺跡発掘説明会資料(VI)」1980

第3節 まとめ

ここまで、北青木遺跡の調査において検出した特徴的な遺構・遺物について考察を行ってきた。本節では以上のことがらを踏まえて調査のまとめを行いたい。

これまで各調査区において遺構面となる浜堤と、その周囲に湿地状堆積が広がる状況に触れながら検出した遺構・遺物の状況について述べてきた。ここで改めて当遺跡の立地環境などについて考察を行う。後に掲載している「北青木遺跡 阪神連立事業関連調査 平面図」を合わせて参照いただきたい。

当遺跡における本事業地を中心とする地区については、第8次調査の報告書において、以下とおり土地利用の経過が5つに細分化して捉えられている。

- ① 旧谷状地形の西側で、洪水層、のちに滞の影響を受けるが、弥生時代中期～後期は安定した浜堤上に墓域が形成されたエリア。

(第9・10次 西地区 I・II・VI区=第7・8次 B46・47 調査区)



(『北青木遺跡第8次発掘調査報告書』を改定、引用)

図91 時代・時期別にみた遺構・遺物の分布範囲図 (S=1/3,000)

- ② 旧谷状地形の東側で、弥生時代中期～後期は墓域と推測されるが、後期以降による湿地状堆積が広がるエリア。古墳時代前期までの土地利用が認められる。
(第9・10次 西地区Ⅲ～Ⅳ区=第7・8次 B48-A～B50-A 調査区)
- ③ 滞の影響を受けなかった高位の浜堤面で、弥生時代前期・中期・後期と継続して葬送・祭祀空間となるエリア。
(第9・10次 西地区Ⅴ区～東地区Ⅱ区=第7・8次 B50-B～B54-C 調査区)
- ④ 弥生時代前期・中期の祭祀空間で、奈良時代後半及び平安時代末に職能集団の生業圏、または狭小な居住域の可能性のあるエリア。
(第9・10次 東地区Ⅰ～Ⅳ区=第7・8次 B53-A～B57-A 調査区)
- ⑤ 洪水や滞の影響を受けながら弥生時代前期～中期の祭祀・葬送空間で、古代～中世には生業域、また水際祭祀の空間となるエリア。
(第9・10次 東地区Ⅴ区以東=第7・8次 B57-B 調査区以東)

次に、上記のエリア設定に則り、第9・10次調査成果について概観を試みることにしたい。(以下、調査区名を簡略化して記載する。)

①のエリア (西Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ区)

西Ⅱ・Ⅵ区において、B47区で検出した方形周溝墓の北辺および東辺、西辺の延長部分を確認した。すでに触れたように、既往の調査成果と考え合わせると、この方形周溝墓は北東隅および北西隅において陸橋状の掘り残しを持つ溝で区画されるものと考えられる。第8次調査成果を受けて南北に長い墳丘形態をもつことが判明していたが、今回の調査成果から、墳丘部分の南北長は11.0m以上の規模をもつことが明らかとなってきた。西側周溝の調査により周溝の最終的な埋没も、これまでの考察どおり弥生時代後期に属することを補強する資料が得られた。この方形周溝墓は弥生時代中期末葉頃に築造し、墳丘上に土器を設置したものの、比較的早い段階で周溝内に落ち込んだものと考えられ、その後、周溝の埋没が一定程度進行した後期頃に、再度土器を周溝内に並べたものと考えられる。

西Ⅵ区では、平安時代後期頃に埋没したと考えられる素掘りの井戸(S E 201)を確認した。また、第2遺構面包含層から、7世紀後半から8世紀後半頃の遺物や、細片ではあるが、瓦、緑釉陶器が出土している。④のエリアを中心に確認されていた奈良・平安時代の遺物が確認されたことから、当調査区周辺も官衙的要素をもつ深江北町遺跡との関係が推測される。

また、これまでの周辺地区における調査では確認されていなかった竪穴建物(S B 301)を初めて検出した。明確な時期を示す遺物が出土していないため不明点も多いが、最終的に弥生時代後期に埋没した方形周溝墓と同一遺構面で検出したことなどから、現段階では弥生時代後期に属する建物である可能性を考えておきたい。土器の他には、埋土中から銅鏝が1点出土している。竪穴建物と方形周溝墓との関連については、今後の検討課題である。

当調査区は北青木遺跡の西端部に位置するが、集落域が当調査区から北西側の地区に広がっている可能性が考えられる。

②のエリア (西Ⅲ～Ⅳ区)

西Ⅱ区の東部から西Ⅳ区の西部、および西Ⅳ区中央部で、第7・8次調査区から続く湿地状堆積を確認した。西Ⅳ区の湿地の上面で検出された溝(S D 402)の埋土から古墳時代後期に属する須恵器が出土しており、この湿地状堆積は、当該時期頃に埋没したと想定される。また、湿地の最下層から、木製鞘が出土した。西Ⅳ区に隣接する第8次調査B49-A区～B50-A

区では、湿地状堆積の年代について、出土した土器の時期や、採集した炭化物での放射性炭素分析による年代測定から、弥生時代後期から古墳時代初頭頃に堆積したものと推測されている。今回出土した木製棺も当該時期頃に属する可能性が考えられる。また、今回の調査では、このエリアにおいては墓域に関連する遺構は確認されていない。

③のエリア（西Ⅴ区～東Ⅱ区）

西Ⅴ区、東Ⅰ～Ⅱ区にかけて安定した浜堤面を確認し、遺構も多く検出しているものの、遺構面が大きく攪乱を受けており、遺構の規模が判明したものはごくわずかであった。

確認できた遺構としては、西Ⅴ区の東部で検出した、弥生時代中期の壺が出土した土坑（SK 501）が挙げられる。この壺は底部に穿孔が施されており、また南に隣接するB51区では、円形周溝墓や、祭祀土坑と考えられる遺構が複数確認されていること等から、周溝墓に関連する遺構であると想定される。

④のエリア（東Ⅰ区～Ⅳ区）

東Ⅰ区では、B53-A区のSD 202と同一の遺構と考えられるSD 601を検出した。

東Ⅲ区では、礎盤を備える3基の柱穴を検出した。南側の第8次調査B55-B区では被熱の痕跡が見られる礎盤や、第7次調査B54-C区やB55-A区では1間×2間相当の規模と考えられる掘立柱建物が確認されており、この柱穴列も東西方向2間以上の建物の可能性がある。既存の調査では、瓦や緑釉陶器、灰釉陶器など、官衙の様相をもつ遺物が出土していることから、古代「葺屋駅家」と関連する深江北町遺跡との関係性もうかがえる。

⑤のエリア（東地区Ⅴ区以東）

東Ⅴ区では、斜面に杭や集石が確認された、古代の河道と考えられるSX 1002や、桁形のしがらみ状遺構であるSX 1003、古代から近世のものと考えられる河道を確認した。

東Ⅵ区では、弥生時代中期の甕が出土した土坑SK 1101が確認されている。

東Ⅶ区では、SD 201、SD 203、SD 204、SK 201から、弥生時代中期の壺が出土している。北側に接する第6次Ⅱ区ではSX 02から赤彩円形文広口壺が、南接するB59-AやB59-Bでは弥生時代中期後半の方形周溝墓が確認されており、これら祭祀の様相をもつ遺構に関連する可能性がある。その他、中世から近世の流路であるSR 201、中世のしがらみ状遺構であるSX 203を検出した。

以上、北青木遺跡における土地利用の経過を、第8次発掘調査報告書で設定された5つのエリアを元に状況を概観した。概ね既往調査成果を追認する成果となったが、①のエリアで方形周溝墓に近接した位置で竪穴建物を検出するなど、新たな様相を示す資料についても得ることができたといえよう。